
ゼロの使い魔 楽しく転生

風鳴刹影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 楽しく転生

【Zコード】

N7242M

【作者名】

風鳴刹影

【あらすじ】

不幸かどうか知らないが“某ハチャメチャ魔法学園のゴスロリ天使によく似た”自称・天使様によつて転生させられたオーリ。彼女はゼロの使い魔のハルケギニア、トリステインがヴァリエール公爵家、史実では存在しないルイズの双子の妹として生を受けます。そして、ハルケギニアの死亡フラグ満載な歴史をルイズと一緒に歩いて逝っちゃいます・・・。

不定期連載です

楽しく転生〇一（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと語り劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

主人公は現代日本からの転生者で、テンプレの「ごく特殊能力やアイテムを手に入れます。他のSSと比べるとそこそこなチート力・・のはず。

楽しく転生01

気がついたら、俺は　いや、私は新しい人生をこの世界で歩き始めていた。

私は就職確定率100%を蹴り、大学に進学した。物を作るのが好きで、もつと学生と言う自由の聞く立場で行動したかった。ただそれだけだった……。

ケチが付き始めたのは、恐らくこの選択をした時から……そう思いたい。

大学に進学して直ぐに世界恐慌が席卷し、手の平を返したような就職氷河期の到来……。留年できないからと、何とか大学を卒業したまではよかつた。だが就職はできず、周りからは春先からニートの仲間入りだと言われた。ニートか。

だから、何とか就職できないかとハローワークに通う毎日だった。そう、そう言う日々だったはずなんだ……。

『新しい可能性を見て見たくない?』

それが聞こえた時、世界が……代わった。

*

「おお！ カリース、よくやつたぞ！ ！」

元気な女の子だ！ それも一人だ！」

金髪のいかにも（悪い意味ではない）貴族だという格好をした男が私を覗きこんできた。そんなに顔を近づけないでくれと手を伸ばすが……あれ？ なんでこんなに手が小さいんだ？

「ええ、アナタ。

……でも、四人とも女の子と言つのは少し残念ですね。

今回、男の子が生まれれば……

「なにを言つているんだいカリーヌ。

君はこんなにも頑張ってくれて、一人も可愛い女の子を産んでくれたじゃないか？

それにほら、君がそんな事を言つからこの娘達が泣いてしまったじゃないか

「ふふ、そうね……。

なら、この娘達をリッパに育てて、最高の旦那様に巡り合える様にしましょう」

「うんうん……。

そうだ、この娘達の名前は何としようかカリーヌ？」

「そうですね……ふふ、女の子なら私が、男の子ならアナタが名前を付ける取り決めでしたね？」

「ああ、だが……」

「分かつていますよ。

さすがに、一人も生まれてくるなんて思つてもいませんでしたから……そちらの娘の方の名前を付けてくださいかしら？

その娘に合つたよい名前を付けてくださいね？

アナタは、どこかネーミングセンスが悪くて……」

そんな会話をする一人に、優しく“母”の胸元で抱かれている私達、

『これは一体……なんだ？』

先ほどから声を発しても『アグー』だと『ダアダア』と言つたような声にしかならない。いや、そもそも私は180センチはある長身で、不擇生のせいで体重も少しレッドラインに指しかかっている程だつたはずだ。では、いま自分が置かれている状況はいつなんなんだ？

ガチャ。

「お母様！」

ドアの開けられる音と共に現れたのは、長い金髪に目筋と霧囲気が少しキツイ人と、これまた長いピンク色の髪に優しそうな霧囲気を携えた女の人だった。

「カトレア、起きて大丈夫なのか？」

それにエレオノール、今日はアナタ、家庭教師の先生と御勉強をしているはずじゃ……」

「はい、今日は新しい家族が増えるからなのか朝からすこぶる調子がいいんですよお母様、それにお父様」

なんだか体調が悪そうだな……本当に大丈夫か？

「きよ、今日の授業は先生が急遽全部自習と言つて……帰つてしまわされました」

……はい分かります。急遽自習にしちゃつたんですね？ アナタが、

「それで、赤ちゃんは……一人！？」

「こらお前達、そんなに騒いだら母さんの身体に障るかも知れないと？」

「ふふ、すみませんお父様。

でも、二人も家族が増えたんですね。

こつちの娘はお母様や私に似てピンク色、目元とかお母様によく似るかもせんね？」

「ふふん（ブーブー……カブ！）つて、噛んだ！ この娘、私の指を噛んだわよ！？」

「ふふふ、それはエレオノールお姉さまの指をお母さんのオッパイと勘違いしたんですよ」

「ああ、そうなの？ つて、吸わないでよ／＼なにも出ないから」

「それで、こつちの娘は……あ

「どうしたんだいカトレア？」

「いえ、この娘の髪や肌、それに眼が……前に医療について載つて本で見たアルビノと言つのによく似ていて……」

「ああ、それは私も気にしていた事だが……」

「……お母様よろしいでしようか？」

そう言つてカトレアが、私を抱き上げる。そして、静かに目を閉じると……コックリと暖かいナニカが私の仲に入つてくる気がした。

「……大丈夫。この娘は、私なんかよりもずっと、ずっと強く生きてくれます」

よくは分からぬが……ん？ あそこにあるのは姿見つて言われている大きな鏡だな。そして、その鏡に写っているのは、たぶんこの人だな。なら……その両手に抱きかかえられているアレはなんだ？

『それは、君だよ？』

突然、その声が頭の中に響くと、次の瞬間には世界がネガ反転し、誰一人として動かなくなってしまった。

いや、

『新しい始まり、おめでとうござります＊＊＊＊さん』

ソコだけが、私達を写していた姿見の向こう側だけが、普通の色合いで保つたまま……だが、まったく別の誰かを写していた。……

……なんか、某魔法使い達の学び舎に出てきた口スロリ黒天使にとてもよく似ている気がする（アレは翼まで黒かったか？）が、気のせいだろう。

『アナタは？』

『ん……詳しい説明をスッカリゴツチャリドツチャリと省いちゃいますが、『また！』、アナタは不幸にもこの私の手によつて死んでしまったのですチャンチャン』『おい！』……なんですか？』

『いや、訳が分からぬ』

『ああ、いきなりの事に混乱しているのですね？』

まあたしかにガソリンを満載したトレー ラーでひき殺された挙句、

積載していたガソリンが引火してドカン！　だもんね～。普通はなにが起こったか分からるのは当然か～。

『……いえね、ただ単にアナタの死んでしまつた事を無かつた事にして蘇らせて、何の面白みも無いでしょ？　だから、出血大サービスでアナタを元の世界とは違う、異世界に転生させてあげました～。ワ～イ、パチパチパチ～…』

『……』

『もう、そんなに白い田で見ないでくださいよ～。あ、私の事は天使様と呼びなさい！

でね、ただ単に転生させただけで後はシランブリつてのは悪いと思つて、いくつかですが特殊な能力をアナタに付与させてもらいました。どんな能力かは……これからのお楽しみとして起きましよう。それに、どのような力が手に入ったのかはすぐに理解できるでしょうし詳しい説明は省きますね～。

外見は私の趣味のかな？　性別？　ああ、ムサツ苦しかつたから女の子に変えといたよ？　え、何で　タナリにしなかつたつて？　ふふふ～、それは後のお楽しみ～』

『いや、聞いてない』

『あ、そうそう、アナタ個人の寿命とかに関しては気にしなくていいよ～。何万年だつて生きられるからね～』

『いや、あの』

『アナタが転生した世界は“ゼロの使い魔”でお馴染みのハルケギニア、その可能性の一つです。

分かりやすく言つと、アナタの持つていたTRPG、アルシャードガイアとかで説明されているリーフワールド。本来の“枝”となる世界に付随する“葉”的世界です。

……と、もう時間がありませんね～。

それじゃ、私のためにこの可能性をかき乱してくださいね～ G

○○d l u c k ! S e e y o u a g.e.n...!..』

『ちょ、ちょっとま……』

そう言つと、自称“天使様”は鏡の中から消え……世界が元の姿を取り戻した。

「そりだお母様、この娘はなんて名前になさるのですか？」

「ううう、こっちの娘も、どんな名前にするんですか？」

ピンク色の髪のお姉さまと金色の髪のお姉さまが“母”に私達の名前を聞いている。

……はて、そう言えば先ほどから聞き覚えのある名前を言い合つてゐるみたいなんだが、

「そうですね、こちらのピンク色の髪の娘は……ルイズ、ルイズ・フランソワーズとします」

……さつきの“自称天使様”的話しがホントなら、“ゼロの使い魔”で“ルイズ”つてのは、まさか！？　いや、そんなはず……

コレもある“天使様”的仕業なのか？

「それでアナタ、その娘にはどんな名前を着けて貰さるのかしら？」

まあいいか、物語の主人公と姉妹でも……。それよりも名前だ。ヘンテコな名前を付けてくれたら、思いつきり抗議するぞ！？

「うむ……もうちょっと待つてくれ。

いま、いい名前が……アルヴァースは男の子っぽいし……カナリアは鳥だな……うむ

本当に大丈夫か？？？　カトレア姉さまやエレオノール姉さま、それにカリーヌ母さんも心配そうだ。

「そうだ、ルーティア……それと、ルシェル……ルーティア・ル

シェルというのはどうだらうかカリーヌ？」

「……はあ、アナタにしてはまだともな名前ですね。

後は、その娘が気に入るかですが……問題は無いようですね？」

「おお、ルーティア、気に入ってくれたか？」

「うんうん、なんていい子なんだ」

まあまあいい名前だぞ、お父様？

……そう言う事で私、ルーティア・ルシェルは、本来の歴史では存在しないはずのヴァリエール公爵家の第四女として、私は一度目の生を歩く事になったのだった（チャンチャン）。

……私、大丈夫か？

楽しく転生①（後書き）

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら「」指
摘ください。

楽しく転生〇二（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと語り劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

主人公は現代日本からの転生者で、テンプレの「ごく特殊能力やアイテムを手に入れます。他のSSと比べるとそこそこなチート力……のはず。

楽しく転生②

さて……自称“天使様”的おかげで、私は赤ん坊に成つてしまつたわけなのだが、

『なんにも、できない……』

そう、とにかく最初の2～3ヶ月程度は何もできない。なにせ私たちは、未だ十分に首が座っていない赤子。だから自由にハイハイもできない。

まあ、それはしかたない。とにかく動ける様になるまで我慢だ。

「ルーティアお嬢様は、よくお飲みになりますね～」

うむ、腹が減つては戦は出来ん。カリーヌ母さんからもオッパイを貰っているが、ルイズの面倒や貴族としての仕事も有るみたいで、乳母役のメイドさん（もと貴族らしい）からご飯を貰つている。

つて、痛い！ ルイズ、割り込んでこないで。アナタにはそつちのオッパイがあるでしょ！？

「あらあら、お二人ともケンカしちゃダメですよ～」

とまあ、そんな感じで過ごしていった。後は寝るだけ。赤ん坊の仕事は寝ることだからな。

もつとも、私はただ寝ていた訳ではない。

自称“天使様”的与えてくれた特殊能力の一つ、自分が寝ている間だけやって来る事のできるとのできる場所“夢幻書庫”だ。

某魔法少女に登場した無限書庫と名前が似ているが、それとは違うぞ？

この書庫には様々な本が収納されている。使えるかどうかは分からぬが各種科学、政治、経済に関する書籍のコーナー。様々なマンガやらノベ（好みの物ばかり）のコーナー。さらに『この先R18指定だよ』なんて書かれて扉の向こうには……う~む、コレはまた（ニヤリ）。

この書庫で、私は有意義な時間を過ごしている。なにしろココは

無重力感覚で移動ができ、好きな本を読むことができる。さらに本だけではなくアニメのDVDなんかもある為、かなりいい環境だ。
パソコンとDVDデッキはどこかなあー？

閑話休題。

ちなみに“ゼロの使い魔”の原作もある。ただし、18巻までだ。この書庫の性質、蔵書物は2010年4月までの発行物までしかなく。今後数年は更新されない。ただし、私が読んだハルケギニアの本は、新しく蔵書される。以上がこの“夢幻書庫”仕様らしい（注意書きがあつた）。

それから数日が経ち……、やっとハイハイが出来る様になつた。
コレで行動範囲が広がるゾエー！

「ルーティアお嬢様は、もうハイハイが出来る様になつたんですね」

「ええ、ルーティアが出来たんです。ルイズもすぐにハイハイ出来る様になりますよね～」

お世話係のメイドとカリーヌ母さん、それとルイズが戯れているが、私はそんな事は……羨ましいけど、今は一刻も早く私の行動範囲を広げることに専念するんだ！

つて、お母様！ ボールを投げないで！ つい条件反射で飛びついちゃうじゃないか！ ああ、メイドさんそんなオモチャで私の気を引こうとしないでください！

閑話休載

まったく…… そうそう、ルイズはまだハイハイできないし年相応（？）な感じだ。なので私はひたすらハイハイをして足腰のトレーニング。たまに壁などのとっかかりに捕まつて？ まり立ちにも挑戦するが…… むむむ、まだ無理か。

「ルーティアお嬢様、頑張ってください！」

「うん、まだなだけだ。もう一度……。

まあ、結果だけ言うとルイズがハイハイを始めて頃にはもう自力で歩ける様になりました。

周りからは「ルーティアお嬢様は、育つのが早いんですね～」なんて言われたりもしました。

「ルイズ～、こっちこっち～」

そうそう、私が最初に発音できた言葉は「ルイズ」です。次に自分の名前、母とお父さん……まだ上手くしゃべれないルイズと比べるとあまりにも発育が良過ぎるが、すぐにルイズも追いつくだろう。だって、

「キャッキヤ、ジュー」

うん、ルーで呼んでるんだね。ルイズは必死にハイハイして私に近寄つて来る。さらに私に？まつて膝立ちまで出来るようになつて立ち上がっちゃつた。

「る、ルイズお嬢様も！？」

え～と、とりあえず引っ張つてみる。そのままルイズはついてくる。もつと引っ張つて見る……。そんな事をしていたら、どうとうルイズは一人でに歩き出してしまつた。

……私の苦労を返せ！

「お、奥様。お嬢様方はとても発育が良いよ～……もう御二人とも歩いちゃつてああ（バタン）」

「ああ、ルイズにルーティア。

二人とも偉いわね～。

そここのメイド、この倒れたメイドを部屋に連れて行つて、代わりのメイドを呼んできなさい」

「は、はい！」

う～ん、頭をそんなんに撫でないでください～。キャッキヤと笑つているルイズはとっても幸せそうだな～……。

でも、メイドさんにはもつと優しくしてあげよ～、お母様？

そんなこんなで一人とも歩ける様になり、たゞたゞしくだがしゃべれる様になつた。その為、教育係のメイドや母さんにお父様、それと体調がよい時にはカトレア御姉さまにエレオノール姉さまが、言葉を教えようと躍起になつてくる。

「あれ？ ルーティアちゃん、なにを見ているのかなあ？」

「ん」

ベランダから外を見ていた私に、カトレア御姉さまが何を見ていたのか聞いてきた。私は指を刺して見ていたものを答える。

「ああ、鳥さんですね～」

ルーティアは、鳥さんが好きなんですね～」

う～ん、ちょっと違うんですカトレアお姉さま。

私は首を横に振ると、また大空を自由に飛ぶ鳥を見つめた。

私は、飛びたいのだ。魔法使いに生まれた私は、この先四大系統の内のどれかの魔法が使える様になるだらう。でも、どんな魔法よりも私は“フライ”が使いたい。

「ルーティア！？ 危ないわ！」

つとと、いけない。いつの間にかベランダをよじ登つて、飛んできる鳥に手を伸ばしていたみたいだ。

「もう～、そんなに手を伸ばしても、鳥さんはやつてしませんよ～」
う～ん、手を伸ばしたかつたんです「ゴメンナサイ。

それにしても、私の能力ってアレだけなのかなあ……？ プラス

アニマ（獣魂付加）とかあつたら、クーコみたいに翼が欲しいなあ。

「さあ、ルーティアちゃん。部屋の中で遊びましょうね～」
むう～、この部屋の中だけじゃソマラナイんだよ～！

「きや！？」

私はカトレア姉さまの手を振り解くと、他のメイドやエレオノール、それにルイズには田もくれずに扉のノブに飛びつく。

ガチャ。

そして、一目散で部屋から出て行つた。

「つ、捕まえてー！ 誰か、ルーティアお嬢様を捕まえてー！！！」

後ろからそんな声が聞こえるが、私のログには何も残ってはいない！

ひたすら赤ん坊の歩みで遁走する。後ろからメイドさん達が追いかけて来る。

逃げるー！ つて、歩く幅が決定的に違うから追いつかれてしもうじゃないか！ な、なにか手は！？

キュピーン！

メイドさんに捕まる。そう思ったその時、私の未だ秘められた能力が開花した。

み、見える！ 私にも、見えるぞ！

つていや、ニコータイプ化じゃないよ？ 擬音が似ているかもしれないけど、違うからね？

「捕まえ……あ、待って！」

私は、開花した能力を利用して咄嗟に左に飛んで、メイドさんの手から逃れた。次は右、その次は屈んで、後ろから挟み込んできたメイドさんはそのままゴッシンゴロされる。

「イッターライ！？」

「ほら、早く追いかけないと見失うよー…？」

「私は、こっちから回りこむねー！」

「分かつた！」

うん、そっちから……そう来るか。周りの状況が手に取る様に分かる。

「さ、お嬢様もう逃げられ……はれええ！？」

「わ、私を踏み台にい！？（ガク）」

前後で挟み撃ちされそうになるも、足が纏めた振りをして、後ろから来るメイドさんの手をターンで回避。そのまま前のメイドさんに突っ込んで行つてもらいながら、このメイドさんを踏み台にして立ちはだかるメイドさんを飛び越した。と、それに巻き込まれた他のメイドさん達がクラッシュ事故を起こし始めている。

「『メンソーヤシャーイー！』

とりあえず謝つておく。

結局、私とメイドさん達との追いかけっこは、待ち伏せしていたカリーヌお母様の『レビテーション』五連撃を回避できずに捕まる事で一応の終わりを見せた。私が空中でジタバタするが逃げ出せず、そのままお母様にカルーカ、本当に軽く叱られただけで終わった。

……ちなみに、

「「「つ、捕まえてー！ 誰か、ルーティアお嬢様とルイズお嬢様を捕まえてーー！」」

その終日後、私の遁走劇にルイズが加わり。ラ・ヴァリエール邸はメイドさん達の姦しさで終始賑やかだったとか……。

「キャーーー！ ルーティアお嬢様、階段から飛び降りてはダメですーーー！」

「ルイズお嬢様、確保しましたーーー！」
御後がよろしいようで。

楽しく転生②（後書き）

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら「」指
摘ください。

楽しく転生〇〇（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

「はいルーティアちゃん、今日は大人しくしましちゃうね~」

「う~……分かりましたカトリアお姉ちゃん」

仕方ない、カトリアお姉さまに抱きつかれて動けません。病弱なお姉さまを振りほどいてまで逃げたりしませんよ。

「ルー、ルー、あしょぼ~お~きやけつこしよ~」

「ダメですよ~ルイズお嬢様。また屋敷の中で追いかけっこなんてしたら、奥様になんて言われるか……」

「ふふふ、ごめんなさいね。

まさか、ルーティアちゃんがこんなにも元気に駆け回るなんて思わなくて……ちょっとうらやましいかな

大丈夫ですよカトリアお姉さま。私が新たに目覚めた能力“蒼き第三の眼”の力で治してあげます。

“蒼き第三の眼”的力は、気や魔力の流れを探知し、さらにそれらを利用する能力だ。簡単に言うとザ・サーダーの火乃香のサーダー・アイの様に“氣”的流れ（魔力とかも）を見る事ができ、その流れを操っちゃつたり出来るのだ。ただし、私の額にサーダー・アイ（第三の眼）は象眼されていない。

メイドさん達とのおっかけっこも、この力のお陰でどの方向からメイドさんたちが仕掛けてくるのが分かったのだ。さらに小太郎がネギに教えていた瞬動の真似をして、回避の速度を一瞬だけだが加速させている。もうちょっと訓練を積めば虚空瞬動も出来るかもしないな……。さすがにカリーヌ母さんの『レビテーション』五連撃は、見えたけど避け切れなかつたんだけどね。

閑話休題。

現在、カトリアお姉さまに抱かれながらお姉さまの中のスキヤン中。むむむ、なんだお姉さまの中……氣の流れがこんがらがってる

? それにあつちこつちにシコリが出来てるし……。

「で、こうして悪い魔女は旅の神々さんに退治され、町に平和が訪れてのでした~」

「ふ～みゅ～……」

そうそう、ただ抱かれているわけじゃなくてカトリアお姉さまが本を読んでくれている。

しかし……お姉さまの読み方は美味しい。でも、絵本の内容があまりよろしくない。王道を付いているんだけど、いまいちな内容だな。もうちょっと裏事情とか、魔女が何でこんな事をしなきゃいけなかつたのか……って、赤ちゃん向けの絵本にそんな事を求めるほうが変でした。すいません。

「カトリアお姉さま」

「？ なにかしらルーティア？」

「魔女さんには、悪い魔女さんしかいないんですか？」

一方的な悪者、子供向けな物語で絶対悪を演じてくれるキャラ達だが、そちら側に属していながら物語の主役として扱われている物語はないのかな？

「え？ ……ん～、良い魔女さんは、お姉さん見た事ないな～」

「そうなんですか～……じゃ、なんで魔女さんたちは箒に乗つて空を飛んでいるんですか？」

「え、え～と、魔女さんは、皆箒で飛ぶのが風習だからかしり～? ほら、私たち貴族は、伝統でマントを着るわね？ それと一緒になのよ、きっと」

「ふ～ん、そなんですか～」

ちなみに私たち現生後1年過ぎ位……普通に会話できるレベルにまでなってるって、ちょっと発育がよすぎるかもなあ。

「じゃあカトリアお姉さま、私も箒に跨ればお空を飛べるのですか？」

「え？ ラ～んどうかな～」

「え～」

「え～じゃないわよちびルー？」

誉れ高きトリステインの貴族、それも公爵家である私たちが、何が悲しくて卑しくて卑屈で邪悪な魔女の真似事なんかしなくちゃいけないのかしら！？」

「いふあい、いふあいです～」

「ほら、ちびルイズも」

「ぴぎー！」

エレオノール姉さまが乱入してきて一人してホッペを摘まる。う～む、油断した。

*

「で、ルーティア。何か言つ事はないかしら？」

「はい、簾に跨つてもお空を飛べませんでした」

「！」こゝの、おばかー！」

「いぢやーい」

いや、もしかしたら飛べるんじゃないかつて思つて（そつと）能
力があるかもしねないじやないか）、簾に跨つて屋敷の三階のベラ
ンダから飛び降りて見ました。一応命綱を腰につけて飛び降りたよ？
「感謝しなさいよ？ アンタもしかしたら痛いなんて感じられなく
なつてかもしぬないんだからね」
「う～、じめんなしゃい」

「……ルーティアちゃんは、なんでこんな事したのかな？」

カトリアお姉さまがやさしく覗き込んでくる。う～そんなやさし
い眼を向けないでください。全部言いたくなっちゃうじゃないです
か、

「……お空を飛びたかったから、です」

「そつか、でも、もうこんな無茶なことはしないでね？」

「……はいです」

確かに、心配をかけたらダメだよね。

……でも、あの時、空に飛び出した時に、何かを感じた気がするんだ。

「ん~、あれは何だったのかな~」

夜になり、暗くなつた自分たち（ルイズと私だ）の眠る部屋で、どうしてあの時の感覚が忘れられずにベッドの中で悶々としていた。ルイズはグーグー寝てるね。寝顔が可愛いよ~。

「……やっぱり、私の周りに何かある」

そう、違和感があるのだ。私の周りに、私と私以外を隔絶するような何かがある気がする。

……うん、試して見るか。

ベッドの上に転がつていた玩具を手に取ると、それをそこに押し込んだ。

フッ……。

すると、空間に波紋を残して今まで手に持つっていた玩具が消えてしまった。

「…………月衣^{カグヤ}”^{カグヤ}？」

“月衣^{カグヤ}”、夜闇の魔法使い（ナイトウイザード）たちが身に纏う、超常にして非常識の攝理。そして、彼らを守る結界。

「なるほど……なかなか良い能力ですね」

少なくとも手品には使えるだろう。

つと、いかんいかん。玩具を入れっぱなしはいけないな。カグヤの中に手を突っ込み玩具を……、

「あれ？」

こんなブレスレットしてたっけ？ いつの間にか自分の左手首に七つの宝石が嵌められた白いブレスレットが着けられていた。

「つて、もしかしてコレって……“アイン・ソフ・オウル”？」

楽しく転生〇三（後書き）

オリ主の能力は微妙でしたが、チートなアイテムを渡して見ました。でも、私は後悔しません！

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら「」指摘ください。

楽しく転生④（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

主人公無双も悪くありませんが、その強さに見合つ相手がないとお話が盛り上がらないので全体的に強化補正をかけてみます。

楽しく転生④

お、起こうたことをありのまま話すゾ。

私は、ベッドの上で新しく目覚めた能力“カグヤ”の発動を確認した。

それで、カグヤの中に入れた玩具を取り出したら、“七徳の宝玉”が嵌つた“AIN・SOFT・OWL”が出て来ちゃいました……。

え~と、私が“AIN・SOFT・OWL”を持つてるって事は……
私はシャイメールの転生体？ い、いやいや、何かの間違いだろ？
？ ……でも、この腕に嵌つているブレスレットは、

「AIN・SOFT・OWL、展開……」

私がそう言うと、ブレスレットだつたAIN・SOFT・OWLがバラバラになり、私の周囲に七つの白い羽が広がる。

「本物……ですね？」

それぞれの羽に嵌つている宝玉は、“慈愛”に“賢明”、“剛毅”に“信頼”、“節制”に“正義”、そして“希望”。人間の七つの美德を表し、それぞれがその名に相応しい力を司っている宝玉……だったはず。

「こ、これはこれで、ものすごくチートな力です～」

実質的に自分がチートなバグキャラになるのは分かっていたが、魔王の力ですか……。まあ、詳しい能力の解析は明日にしましょう。
「夜更かしは、お肌の天敵です～」……ぐう

*

で、次の日の朝、朝食を済ませるとそのまま遁走。瞬動（未完成）を使って追いかけてくるメイドさん達を一気に引き離す。

「 る、ルーティアお嬢様！？」

さりにメイドさん達から見えない場所に移動すると、“信頼の宝玉”的効果、はつづど～！

“信頼の宝玉”的力は、要約して説明すると認識への干渉だ。そこに在るモノを無い様に、または存在すらしていないモノをあたかもそこにあるように認識させる。この能力を発動させる事で『私は口には居ませんよ～』って周囲に認識させている。メイドさんから見たら光学迷彩で見えなくなつた上にどれだけ足音を立てても気づかれる事はないのだ。まさにMGS！（笑）。

「ルーティアお嬢様を探して！ 屋敷をひっくり返しても良いから！」

「ああ！ 奥様にこの事が知られたら……」

「取り乱している暇があつたら、さつさと探しなさい！」

え～と、ごめんなさい。後でちゃんとフォローしないとね～。

とりあえず、人目の無い……屋上がいいかな？ もともと皆としての機能も兼ね備えていた屋敷なので『兵用の広い回廊や、そこそこの広さを持つ広場のような場所もある。

「……………口が、ちょうどいいですね」

今は衛兵も居ないようだ。でも、念には念を入れて、“信頼の宝玉”的効果範囲を拡だ……あれ？ こんな事もできるの？

「う～ん、試して見る価値はありますね」

その辺に在る適当な物、この樽でいいか。コレをコアに設定して

……、

「 “条理を隔絶せしは紅き月”」

機動キーワードを詠唱。次の瞬間、世界は紅く染まつた。

「 “月匣”ですかあ……本当に魔王」

『正確には違うんだけどね～』

!

『そこ、MGISな擬音を出さない』

ああ“某魔法学園のゴスロリ黒天使似の自称天使様”だ。

『そう言つ言い方だと某から名前みたいじゃない。

まあ、あなたはシャイマールじゃないからね?

でも、ファーディ・アースに行くと、アナタは魔王としても認識されるから氣をつけてね～』

「なるほど……で、アナタはそれだけを言いに『元気?』

『いや～このままルー・ティアが成長していくと、あんまりにチートすぎてシマラナイから……。

だから、ちょっと世界修正をかけてハードルを高めときました～

パチパチ』

「“正義の宝きよ…………”！」

『わ～、待つた待つた!』

「AIN・ソフ・オウルの構えを解く、

「ふじやけた事を言わないでください。

私に迷惑をかけるのは、いつこうにかまいましょんが…………いえ、

本当はそんな事されたらたまりませんが…………」

『ああ～、いや、このまま君がチートすぎるとな、この世界が耐えられなくなくなりそうなんだ。

まあ、世界全体が原作よりも強い感じに…………まあ“世界丸”と強くて“コーゲーム”みたいな感じになるから、それでバランスを取りるんだ』

とんでもない事をサラッと言つてくれちゃうね～。

「つまり、原作よりも悲惨な事になると?」

『ん～それはルーティアしだいかな? 世界は在るべき姿へと成るうとするからね。

全力で、この世界に挑戦しなよ？　じゃないと……一生後悔する事になるかもだから。

それじゃ、バイバイ』

手を振りながら霞のように消えていく“天使様”。後悔しない様に一生懸命……か、

「上等です。やつてやろううじやないですかー！」

そうと決まれば、まずやるべき事は……自身を鍛える事、そして原作介入を行つて戦争を回避、または被害を最小限にする事だ。つと、もうすぐお昼だ。メイドさん達が心配するだらうから戻らないと……。

で、お昼を食べ終えたら、今度は屋敷中のメイドさんによる包囲網で囮まれて抜け出せない。さらにカトレアお姉さまと「私をおいていったああ」とぐずるルイズに捕まって、身動きも出来ない。む～…………、まあいいか。

“賢明の宝玉”の力と“慈愛の宝玉”の力を使い、カトレアお姉さまの体の中の不適格な流れの修正と回復を行いましょう。いきなり回復すると体とか、いろいろと負担をかけそつだからゴックリジックリと……。

楽しく転生④（後書き）

AIN・ソフ・オウル、絶対にチートアイテムです。
能力はアニメ・小説が混ざってたりします。

ただ、UP主はNWのルールブックを持っています。ですので、
ファージ・アースの魔法は使いません。 o_rz

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらじご指
摘ください。

楽しく転生〇五（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

楽しく転生⑤

さて、あれから数週間が経つた。

毎日エレオノールお姉さまにホッペを抓られたり（ルイズはものすっぽり嫌がっていたが）、カトリアお姉さまに抱きかかえられながら“慈愛の宝玉”を使ったりしている。

たまにメイドさん達との追いかけっこをして、カリーヌお母様とお父様に怒られたり……まあそんな感じでけつこう平和に過ごしている。

そうそう、能力^{チート}に気を取られていたが……私つてハルケギニアのメイジ熟成国家（？）のトリステインの公爵家に生まれたんだよね。

まあ、ぶっちゃけて魔法使いの卵なんだよ。だから、

「もう、ダメよ？ ルーティアちゃん、杖は玩具じゃないんだから」

カトリアお姉さまの杖を握っています。魔法仕えないかなあ……。

「カトリアお姉さま、魔法がでましぇん」

「あら、ルーティアちゃんは魔法が使いたいの？」

「はいです」

「ん~でも、まだルーティアちゃんやルイズちゃんは、杖を持つにはまだちょっと早いかな」

「む~~！」

ダダをこねて見ます。赤ん坊や子供だけの特権です！

*

「ルーティアが魔法を？」

「はい、お母様。ルーティアちゃんが魔法を使いたいって、私やエレオノールお姉さまの杖を振り回しちゃうんですよ」

「まったく、メイジの杖は玩具ではないというのに……」

「まあまあ、ルーティアは魔法を使いたい。だけど、ルーティアは自分の杖がないから一人の杖を使おうとしているだけじゃないか」

「お父様！ メイジにとつて杖は誇りです。ルイズなんてルーティアの真似をして私の杖を後ちょっとで折りそうに……」

「まあまあエレオノール、落ち着きなさい。」

ルイズまだまだだが、ルーティアは成長が驚くほど早い。もう私たちと普通に話したり、簡単な字なら一人で読んで……最近は色々な本を与えておけば屋敷の中を走り回る事もなくなつた。

魔法に対する関心も、お前たちは5歳くらいか？ それくらいから持ち始めたのに、ルーティアは“空を飛びたい”からと第に跨つて飛び出すくらいだ……

「それは、私も聞いた時、目の前が真っ暗になりましたわ……」

「ああ、それで相談なんだがカリース。ちょっと早いかもしれないが、ルーティアに家庭教師をつけようと思うんだ」

「それは、一向にかまいませんが……それならば私が直々に」

「ああ～カリース、ルーティアは馬車を使っての外出以外は、この屋敷にいる使用者としか会つていらないな？」

私としては、色々な人とも会つた方がいいと思うんだ。うん、それがいい

「……まあいいでしょう。そろそろ貴族としての嗜みを教えるべきだと思つていました。」

ですが……」

「杖の契約か？ さすがにあの歳で魔法を使つたら、精神力が不足してどんな事になるか分からぬから、それはさせないぞ」

*

次の週、私はお父様に家庭教師の先生を紹介された。

遊びたい盛りの赤ちゃんに早くも家庭教師ですか、お父様？

「ルーティア、今日からお前の家庭教師をすることになったミス・アリシェルだ」

「キティ・ド・アリシェルです。ルーティアお嬢様」

「ルーティアです。よろしくお願ひします」

一応挨拶はしないとね～。挨拶は基本だつて言うし。

家庭教師のキティ先生は、後ろで二つに束ねた銀色の髪を揺らしながら私と視線ありを合わせてきた。けっこつ幼い顔立ち、つてか童顔な先生だな。いつたい幾つなんだろう？

「こらこら、そんなに不満そうな顔をしないでおくれルーティア。

それではミス・アリシェル、後は任せたよ

「はい、ヴァリエール公爵」

その後、お父様が将来のために用意してくれていた部屋でお勉強、

「アリシェル先生、これでいいですか？」

「う、うん……正解です。ルーティアお嬢様」

数えで2歳の赤ん坊が解くには難しい数式の問題に、語学のテストを解いている。

最初は恐ろしく簡単な足し算に文字の書き取りだったが……さすがに一応前世で大学を卒業した事のある（成績的にギリギリだが）

赤ん坊相手には分が悪かつた。

「公爵様、私は何を教えればいいのでしょうか？」

あ～さすがに遣り過ぎたか？ 途方にくれているアリシェル先生は余りにも不憫だ。

「アリシェル先生、コレよりも魔法を教えてください」

「そ、それはダメです！ 公爵様に教えてはダメだと……あ

「……ですか、お父様が……酷いです」

教えてくれてもいいじゃないか、ケチンボ！

「ああ、えつと……杖を使って実際に魔法を使わない、座学としての魔法なら教えられますから！ ですから、先ほどの事は公爵様には内緒にしてくださいお嬢様！」

ふむ、勉強は出来るけど魔法は使わせないか、

「それは、なぜですか？」

「……公爵様は、まだ幼いお嬢様が魔法を使うと、精神力がなくなつて倒れてしまうのを心配して……」

「なるほど、だからですか。それじゃ、先生は杖の契約方法を教えられませんね～」

「はい、そうなりますお嬢様……」

「じゃあ、私が質問した事に首を振るのは……」

「私が教えた事がばれたら、明日から住む場所がなくなりますお嬢様あああ！」

う～ん、どうやらこのキティ・ド・アリシェル先生。貧乏貴族の出で領地もなく（もうほとんど平民状態）、なんとかこの仕事を成功させないと弟さんと自分の住む場所どこ飯が食べられなくなるとか……。

「分かりました。アリシェル先生のために座学で我慢します……」

「わかつて頂けましたかお嬢様？」

なるほどね～、なら今は座学で我慢するか……。

教えてもらえないなら仕方がない。自分で見つけ出します。

それなら全然問題はないですね？

私は、こつそりとエレオノールお姉さま持っているの本の中から初等魔法教育の本等を幾つかを失敬する事にした。

そして、意外にも早く杖の契約方法を見つける事ができたのだった。

「ふうむ……つまり、杖としての触媒はある程度の魔力が宿ったモノ……靈木の類で作られた杖がポピュラーなわけですか？」

それで、杖に刻まれている魔力の波長を術者本人の波長と合わせる作業を“杖との契約”と呼んでいるのですか？……

なるほどなるほど……つまり、ある程度のモノなら発動媒体としての役割を担えると、

「なら、このアイン・ソフ・オウルも一応は発動媒体として使えますね？」

なんせ、これも一応はウイザードの範だからね。とりあえず簡単なコモン・マジックを使って、馴染ませる作業からですね。

楽しく転生⑤（後書き）

杖に関する「うんぬんはオリ設定です。

元ネタが判らないと言つ指摘がございましたので、今回から作中の能力やアイテム等の紹介をしていきます。

先ず最初にアイテム、アイン・ソフ・オウル（以下〇〇〇）の紹介です。

このアイテムの元ネタは、F E A R 製 T R P G『ナイトウェイザー』のアニメで、ヒロインの一人、志宝エリスが使用する魔法の第〇〇〇です。

普段の〇〇〇の形状は、六角形のプレートを7つ繋げたブレスレットです。戦闘時は分離、巨大化、ファンネルのように飛ばして相手にぶつけたり、合体させて巨大な盾にしたり、乗つて空を飛んでみたりと……色々と役に立ちます。

これだけ聞くとぜんぜんチートじゃないように思えます。が、〇〇〇に嵌っている慈愛、賢明、剛毅、信頼、節制、正義、希望の七つの宝玉、通称『七徳の宝玉』が〇〇〇をチート化させます。

七徳の宝玉の能力について、まずこの二つから簡単に説明。

慈愛の宝玉、防御と癒しの能力を持っています。アニメでは、エリスの頭痛を直したりしています。このSSUでの使いい方はもう殆ど決まっていますが……。

信頼の宝玉、認識へ干渉できる能力をもっています。アニメでは、島一つの存在を完全に世界から消し去つてしましました（ただし、ウィザードには認知されていた）。

ちなみに、〇〇〇と宝玉の能力に関してはアニメと小説『終蓮司

と『JKの少女』を混ぜて使用します。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら、
指摘ください。

楽しく転生〇〇（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

楽しく転生⑥

貴族が習つべき事は沢山在ります。

語学や数学は基より、領地を治めるために必要な帝王学や経済学
……そして、魔法。

「一」、公爵様あ～私はルーティアお嬢様に何を教えればいいのでし
ょうか？」

弱弱しい声を上げて床に手を付くアリシェル先生。いや～さすが
に夢幻書庫にある数百年も先を行く現代地球の知識と、“賢明の宝
玉”の力でブースとされた私のインテリジェンス（INT）は、さ
すがにこのハルケギニアではチート（反則）すぎますね～分かりま
す。

「せ、先生の教え方がうま……」

「私、何も教えてましょん……」

「あうう……」

まあ、ぶっちゃけて先生の出す問題やら何やらをほとんど教えて
もらつてないのに、スラスラ解いちゃったのは不味かつたかな？
テーブルマナー やダンスなどの実技も教えてくれてけど……最初
はちょっと四苦八苦したが、それも今は難なくこなせている。編み
物や刺繡、果ては料理まで教えてもらつたが……学習能力が異常
です。こんな子供が複雑な模様の入つたセータを編み上げ、縫い物
も刺繡でかなり複雑な絵やレース網が入れられるようになつた。
そして料理も、

「ははは、このケーキおいしいですねお嬢様？」

「そうですね～砂糖をふんだんに使うのが、リッチな感じがしまし
ゅね～」

ケーキまで焼けるようになつていた。

包丁捌きも危なげなく、コック長から「お嬢様、いつたいどこで
包丁の使い方を習わされてのですか？」と、魚を三枚に下ろす私を見

て自分の目を疑っていた。

*

さて、アリ・シェル先生……自信を喪失してたみたいだけど、先日からルイズの家庭教師を任されたようです。

「やつと、やつと教えがいのある生徒に……」

などと泣いていたのは余談だ。さらに余談だが、ルイズは物覚えが大変良く……半年もすると殆ど先生が教えられる事が無くなってしまう。

閑話休題。

そして今、私はお母様とある部屋に来ている。

「ミス・アリ・シェルは『もう、私に教えられることはありません』などと言つていましたが……今日はそれを確かめてみます。良いですねルーティア？」

「はい！」

ふむ、テストみたいなモノかな？

「結果によつては、アナタが欲しがつていたモノを『えます』欲しがつていたモノつて……杖かな？ うん、もし杖ならコレで大手をふつて魔法が使えるな。

「では始めに……」

・ · · · · · · ·

「止め！」

くひゅううう～、や、やつと終わった。座学の問題を数時間、その後はダンスやテーブルマナー、礼儀作法のテストを延々と……、「……結果は、後日に教えます。

「今日はコツクリと休みなさい、ルー・ティア」

「はい、お母様！」

険しい表情のお母様に、私は笑顔で答えた。

*

Another side

「……ルー・ティアには、酷い事をしてしまったわ

「どうしたんですか、お母様？」

「カトリア？ 起きていて大丈夫なのですか？」

「はい、なんだか最近、とっても調子がいいんです。

……ところでお母様、ルー・ティアちゃんが何か？

「……雇った家庭教師が『もう教えられることはない』などと書つたので、その真偽を確かめるため……」

「ルーティアちゃんをテストしたんですけど、お母様？」

「ええ……でも、今はやりすぎたと思つてしまつているの。

あの娘がまだ2歳程度なのに、あんなに汗だくにさせて何時間もテストをさせてしまつて……

「……それでお母様、テストの結果は？」

「……文句無しの合格です。あの歳で、もうアナタ達と同等の事が出来るのなら、当然の判定です」

「まあ、それじゃルー・ティアちゃんに杖を……」

「いいえ、杖の契約はさせません。まだあの娘には、魔法を使うには早すぎます」

「そんな……。

お母様、お話をあります

「カトリア？」

「あの娘に、杖の契約をさせてあげてください」

「な、何を言いだすのですカトリア！？」

「はい……、ですがあの娘は、信じられないと思いますがもう魔法を使っています」

「……それは、どうこうことなのです？」

「お母様、この事は口だけのお話にしてください。

私がここで言つ事は、お母様が一番嫌う“約束事を破る”行いで

す。

ですので、口で私が言つた事は一切他言しないでください」

「……」

ルーティアが魔法を使つているのを見たのは、ほんの一週間ほど前の夜でした。

ルーティアが私の部屋に窓から“フライ”を使って入つてきて……私は寝た振りをしていました。次にルーティアは“治癒”を唱えてくれて……

「……」

「そこ」での娘に事情を聞きました。

もちろん杖についてです。

あの娘は何も手に持たずに魔法を使つていましたから……

「！？」

「お母様、ルーティアが手に見慣れないブレスレットを着けているたのは気付きましたか？」

「ブレスレット……そういえばあの娘、見た事もないブレスレットを着けていましたね」

「ルーティアちゃんは、誰も教えてくれないから独学で杖との契約

方法を調べて、あのブレスレットを杖として契約しているんです

「それは、本当の事なのですかカトリア？」

「はい。

そして、この事を誰にも言わないと約束もしました。

お母様、ルーティアにはあの部屋は狭すぎるんです。

いつか、誰かが教えなくとも自分の力で狭い籠から出て行つてしまいましょうわ

「……分かりました。カトリアがそこまで言つのなら考えて見ま
しょウ」

Another side end

*

お母様のテストを受けてから数日後、お母様から私専用の杖をプレゼントしてもらつた。

お母様から貰つた杖は、本当にちっちゃくて何の飾りもないシンプルな物だつた。

「一番初めの杖は、この位の物が通例です。

ルーティア、より一層の精進を積みなさい?」

「はい、お母様」

それから杖との契約を行い、いざ実践つと言つたところで問題が発生した。

ルイズだ。

「りゅーだけじゅりゅーーー！わちやしも杖がほしいー！」

「ルイズ、ダダをこねないー！」

「いやああー！」

「

ダダをこねて泣きじゃくるルイズ。……あ、お母様手を上げちゃ
だめ！！

「びええええええー！」

ああ、泣き出しちゃった……つて、お母様追い討ちをかけないで
！ 私はとっさにルイズの前に飛び出し、お母様の振り下ろした手
の平をルイズの換わりに受けた。

「ル、ルーティア！？」

「……お母様、ぶっちゃダメです」

私は両手でルイズを庇う様にお母様の前に立つと、赤く腫れた頬
を浮かべた顔でお母様を睨みつけた。

「ルーティア、これは我慢を言つるルイズの躰です。
アナタが……」

「二度目は、必要在りませんお母様。

無理やり泣き止ませるのに、二度目は必要ありません」

「ルーティア……」

しばし母と娘のにらみ合いが続いたが、ルイズを守る壁に騒ぎを
聞きつけたカトレアお姉さまが加わった。カトレアお姉さまの説得
に負けたのか、お母様は月に一度だけルイズをテストし、その合否
によつて杖を与えると言う約束がなされたのだった。

ちなみに、ルイズがこのテストに受かつて杖を貰うまでに半年程
かかったが、ココでの詳しい説明は割愛しよう。

楽しく転生⑥（後書き）

今回は、杖を持つまでの間のお話がメインでした。いつたいルイズたちは何歳で杖をもてるようになったのでしょうか？

キャラの年齢が低すぎる気がしますが……まあ仕方ない（おい

カリーヌファンの皆さんごめんなさい。

おそらく彼女が一番原作キャラとかけ離れるかもしません……。

それでは元ネタの解説、先ずは今回出て来た七徳の宝玉の一。

元ネタは、TRPGのナイトウィザードのアニメから。賢明の宝玉、頭がとても賢くなりINTが上昇します。アニメだとちょっと微妙な活躍しか出来ませんでしたが、魔法ダメージ計算をINTで行うゲームだと既存の値の5倍か……もしくは振り切れた数値を叩き出せます（たぶん）。

この宝玉、絶対にジョセフにだけは渡したくありません。すでに超人的頭脳の持ち主なのに、神域にまで昇華しそうです。

主人公の能力、月衣と月匣

両者ともFEAR製TRPG、ナイトウィザードが出身です。

月衣とは、^{カグヤ} ウィザードなら誰もが持っている個人結界で常識が通用しなくなります

。常識に対してのみ、ATTフィールド（鬼畜フィールド）見たいに鉄壁です。例え戦艦大和の主砲を打ち込まれたとしても、この結界に平然と跳ね返されてしまうでしょう。

色々な物をしまつことが出来るとっても便利なスキルです。

月匣は、一種の広域結界です。

これを簡易化したものが月衣だとも言われたりもします。核となる触媒を選択し、ルーラー（法則決定者）が定めた法則を持つ世界を形成する能力。ナイトウイザードでは主に魔王達が使います。

私は“仮初の世界を作れる程度の能力”と解釈しています。

ちなみに、夢幻書庫も月匣の一種だと思ってください。

外見……というか、様子はリリなので淫獣が働く無限書庫や、魔法先生でおなじみの秘境・図書館島など大規模な図書館を想像してください。これはそれらを混ぜ込めたモノですから……。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたらご指摘ください。

楽しく転生〇フ（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

お母様から正式に杖を貰つて、これで人目を気にせずに魔法の練習が出来る……って考えたんですけど、ひとつだけ不安がありました。

ルイズの事です。

お父様もお母様もスクウェアクラスの上級メイジ。エレオノール姉さまとカトレアお姉さまは今だラインクラスですが、原作ではトライアングルからスクウェアクラスの実力にまでなっています。

そして原作でのルイズは、自分の魔法の性質（どの魔法を唱えても爆発する）や系統が分からず（オオバカのブリミルのせいで）、結果的に彼女の幼少期は散々たるものだつたらしい。

さて『』で、双子の私まで魔法が使えたら？

それもこの歳で異常なほどレベルの高い魔法を使えたら？
その答えは簡単。ルイズは、

『出来の悪い末っ子』

ではなく、

『妹に見本を見せて上げられない姉』
と、呼ばれる事になるでしょ？

そして、それがもたらす結果は？ 彼女の心は、原作以上に深く暗い檻に閉じ込められ……最悪の場合、自他共に巻き込んでの取り返しの付かない崩壊カタストロフィへとひた走る事になるのは想像に難くない。故に……、

「ルーティア、何度言つたら分かるのですか？ 魔法は正しい詠唱とイメージが大事なのですよ！？」

「はいお母様……『レビテーション』！』

力ある言葉と魔力を紡ぎ、その行く末を杖の先へと向ける。ですが、杖の先にある小石はピクリとも動きません。“節制の宝玉”の力で私の魔法を発動させないように押さえつけているのです。

「……ルーティア、『レビューション』の魔法をもう一度……いえ、
出来るまで唱えなさい」

私は、魔法を使わないことを選びました。

そして、私の魔法が発動しない事にカリーヌお母様は容赦がありませんでした。

まあ、これも自分の選んだ道です。腹を括つて呪文の詠唱を一日に何十回も何百回で行いました。それでも魔法が発動しない事にお母様は眉を吊り上げ、般若の様な顔で怒ろうとしますが、何かを言いたげに口をパクつかせると、

「……もう、今日はコレくらいにしましょう

と、言って毎回魔法の特訓を切り上げてしまいます。

うむ、いつたいなんだろう？ 烈風のカリンとして恐れられ、原作でもルイズお姉さま達にもすごく恐れられてトラウマの様な幼少期をすごさせた……はずなのだが……、

「なにか、妙ですね？」

その答えを私が知るのは、まだまだ先の事でした。

*

「は！ はっ！」

「うむうむ、ルーティアは……なんと言つか頑張り屋だな」

なんとも複雑そうな顔で私を見るお父様を放つて置いて、私は一心不乱に木剣での素振りをしています。なぜ私が素振りをしているかと言うと、単純に剣を覚えるため。

魔法に関してはこつそりと練習して、風系統ならラインからトラインアルクラスの魔法を行使できるようになっていたりする。さらに他の火、水、土の系統もドットからラインクラスでの行使が可能で、最大攻撃力だけを見ると“剛毅の宝玉”の力を込めれば、某

リリカルな魔法少女の砲撃魔法並みの威力をたたき出せたりもします。

だがしかし、必ずしも魔法が万能と言つわけではない。

使える物は何だつて使え！ 二者択一の選択肢から無理やりにも第三の選択肢を作り出すのが“魔法使い”だと、某ハチャメチャ魔法学園の先生も言つていたではないか！

と言うわけで、私は今お父様に駄々をこねて剣の稽古を付けてもらっています。

最初に剣を習いたいなんて言つたら、お父様は手に持つていた杖を落としかけてしまいました。お父様は、女の子が剣など覚えなくともいいんだなどと言つのです。そこで私は、烈風カリンの冒険譚が書き綴られた本を家中からかき集めてきました。そして、

「『ブレイド』を纏わせた杖を振り回して、荒れ狂う火竜の群や軍隊に勇猛果敢に切り込んでいく女の子がいるじゃないですか！！」
と、お父様に突きつけます。ちなみに、烈風カリンがお母様だと言つ事はカトアレアお姉さまとエレオノールお姉さまから聞いているので、これは確信犯です。あれ、使い方が違う？ ……いいじゃないですかちょっとくらい違つたつて！！

お母様の事を聞いたお父様は苦々しい顔をしながら、「『』、極普通の貴族の慎ましやかな淑女はそんな事はしなくていいんだよ」

などと言つて言い聞かせようとしたしました。なるほど、そう言つちやいますか。では……、

「なるほど〜、ではお父様の中ではお母様は極普通の貴族で、慎ましゃかな淑女ではないのですね？」

と、言いながら私はすぐ後ろのドアを開けました。その向こう側には……般若の様な笑顔を顔に貼り付けたカリーヌお母様。いえ、烈風カリンです。

「……」

「か、カリーヌ！？ いや、それはだな……」

「……」

お母様の無言の圧力でお父様が墜ちました。

それから武芸の一環としてなら剣を習つても良いとお母様が言いつてくれました。

……お母様が直々に指導をするとまで言い出しだが、それはお父様が身を挺して阻止してくれて、そして現在に至ります。

ちなみに私が持っている木剣……正確には独特のしなりを持たせて作った木刀（特注してもらつた。なにせこの世界の木剣は両刃の直刀を模したのが主流だから）を両手に持つて剣の稽古をしています。

閑話休題。

「よしルー・ティア、素振りはそれ位にしていつたん休憩をしよう。その後、模擬戦をやって今日は終わりにしよっ」

「はい、お父様！」

模擬戦などと言つてもそんな大層な物ではない。お父様が魔法で作つた私と同じくらいの大きさのゴーレム、それも防御を中心とした動きをするモノに私がほぼ一方的に切りかかると言つ物です。

さすがに易しすぎるのは？ と、思いましたが……これがけつこう難しい。さすがお父様と言つべきか、防御をするゴーレムの動きに隙がまったくない。全ての太刀筋をゴーレムが持つている両手持ちの棍棒で防がれて、いまだに一本が取れない。もちろん宝玉の力は無しでだ。“剛毅の宝玉”を使えば防御の上からゴーレムを真っ二つに出来ますが、それでは意味がありません。

地道に隙を作る為のフェイントや足捌き、上段下段からの袈裟切りや籠手狙い、さらには至近距離での打突も加えてみるも……なかなかその防御を崩せない。

「む〜、なかなか勝てましょん」

「ははは！ そんなに簡単に勝たれては、親として威厳が保てない
じゃないか？」

む～、大人気ないですね～。

*

そんなこんなで月日が経ち……、私達姉妹は数えで4歳になつた。
……お母様、羨はいいですが幼い子供をそんな殺氣を込めないで
ください。

ルイズが魔法やダンス、テーブルマナーの練習を泣きながらやつ
ている姿は、泣きながらご飯を口に運ぶルイズは、正直見るに
耐えられないものでした。お母様は貴族がどうとかと説教をし、ル
イズが泣き出すと手を上げて泣き止ませる。

正直に言おう、アナタがまず子供の育て方と愛し方を習うべきだ！
そして酷いと思うなら、本当にそう思うなら、私よ行動に移せ！
私は自分を叱咤し、ルイズを庇うように何度も立ち塞がり、気が
付いたら母さんに怒鳴りつけていた。

「ルイズお姉さまを泣かせるな！！」

最初はお母様も面食らつたようにしましたが、その後は私も含め
てのお説教タイムに入ります。そして、お母様が止めるか、カト
レアお姉さまがお父様が止めに入るまで、この説教は続くのだ。

閑話休題。

さて、数えで四歳になつて私達は自分の部屋を貰つた。
つて、ちょっとまで早すぎるぞ？

まだ子供は親に甘えたい時期なんだよ？

そんな時期に子供を夜中一人で寝せる気か？

……まあ、部屋の外でメイドさんが寝ずの番（もちろん交代で）
やつてくれるから、ルイズが泣き出しても対処できるかもしない

けどね。私としては、一人で自由に使える部屋を貰つたので人目を気にせず心置きなく魔法の練習が出来る。

「……でも、さすがに部屋の中で練習するのは危ないですね」

いやー、さすが原作や一次創作でカトレアお姉さまが屋内に“動物園”なんて作っちゃう位に広い部屋だ。でもね、さすがに『ファイアーボール』とかの練習をすると屋敷が全焼しちゃうよね？ だつて、床一面に足が沈みそうな位の絨毯が敷かれているんです。お掃除が大変ですね~。

こんな場所で魔法の練習は出来ない！ 仕方なく、夜な夜な誰にも気付かれないようにベランダから出て（ちなみにココは三階だ）、AIN・ソフ・オウルで誰もいない空に行くか月匠を開いてその中で魔法の特訓をすることにしました。

*

Another side

「アナタ……私はどうすればいいのか判らないわ」

「ルイズと……ルーティアの事かい？」

「ええ、ルイズの事もそうですが……ルーティアが、なぜあんなにも私に反抗的になるのか」

「……泣いているルイズを庇つて、じゃないかな？」

ルーティアは決まってルイズが泣いている時に限つてだけ、君に反抗するじゃないか？ 烈風と呼ばれ、畏怖された君の前にあんなに小さくても立ちはだかって、君の“氣”に当たつてもなお食い下がつてくる。

そう、まるであの娘がよく読んでいる本に出てくるイーザルデ

イーの勇者みたいにね？」

「それでは、私はさしづめて可愛いお姫様をさらつていつた悪い竜

……と言つたところかしら？」

「……ルーティアは、本当は君に反抗したいなんて思つていいのかもしれないよ？

ただ、自分と一緒に生まれてきたルイズが泣いているのを、ただ黙つて見ていられないだけじゃないかな？」

“ そう、私は……何も出来ないと諦めたくない何も出来ないのはいやなんだ。

本当は、ルイズお姉さまと一緒にお母様に甘えたいのに……”

「絶対的な強者に、自分が負けると判つていても、背中に居る“守らなきやいけないモノ”のために絶対に引かない。我武者羅に頑張つていた若い頃の君にそっくりじゃないか」

「……本来なら私達が模範と成るべきだったのですね。でも、むしろ私が打ち碎くべき壁になってしまった……」

「大丈夫、あの娘は聰明だから、ちゃんと君が教えたいた事を判つてくれるさ」

「……そうね、確かにルーティアは聰明な娘ですわ。“ わざと魔法が使えない振り” までして、ルイズを庇つているのですから

「……“ 使えない振り” ？」

「あら、アナタは何も気付いていなかつたの？」

ルーティアは私達の前じや殆ど絶対に魔法を発動させないけど、皆が寝静まつた夜中にカトレアの部屋に『フライ』で潜り込んで『治癒』をかけているのですよ？

それだけではないわ。屋敷の裏の森の中に、あれでも必死に隠しているでしょうけど……あの娘が『土』系統の魔法で作った隠れ家

があるのよ？

中をこつそり調べて見たけど、鋼鉄製の刀剣類や何か乗り物の様な模型、あとは何の用途かが判らないカラクリが置いてあつたわ。たぶんあの娘が自分の力だけで作つた物だと思うの

「それは、本当かいカリーヌ？」

「ええ、コレが証拠ですよ？」

ガラクタの様に積み上げられていた中から持つてきた物で、剣と斧を両立させた武器だと私は考えています。

これはカラクリが上手く機能していないようで、半分までしか形が変わらないようですが。

ちなみに、ちゃんと形の変わる“完成品”も見る事ができたので、それがどのような物か判つたのですが

「ふむ、この刃の部分に使われている金属は……」

Another side end

*

ああ、バレテいたんですね？ 私はこれ以上一人の会話を聞くのを止めて、壁からそつと離れていった。そして、AIN・SOFF・オウルを箒の形に組み替えると、そのまま夜の空へと舞い上がって行く。

「うーん、やっぱ空は気持ちいいな～」

嫌な事とかも、全部忘れられそうです。

今は、本当なら凍え死んでしまう様な高度を今飛んでいる。だが、月衣の力で凍え死ぬなどと言つ“常識”は通用しない。墜落して死ぬなどと言つ“常識”も通用しない。そもそも、“非常識な存在”

にその様な概念があるのか？

そんな“枷”の無い夜空を、二つの赤と青の月をバックに飛びます。

そしてここは、天と地の狭間。ここなら誰にも遠慮する必要もなく魔法の練習が出来る。

現在私の実力だが……風のラインで、他の属性は全てドット程度だろうか？そもそもランクの決め方が曖昧なため、正確に自分の魔法使いとしてのランクがわからない。まあ、他の連中からしたらスクウェアだのほざきそうな事も出来るようになつたが……。

そんな無駄に高い力を使い、私専用の杖として“鍊金”を駆使して某モンハの“スラッシュアクス”の様なモノを作り出した（普段は最初に貰つたタクト状の杖を皆の前で使つている）。だって力ツコイなんだもん。

最初は日本刀を作ろうかと思つたけど、あれは絶対に職人さんに作つてもらつたほうがいい。『鍊金』じゃ玉鋼を鍛えられないし（それに玉鋼は『鍊金』で作るより、炉で作つたほうが早い）、成型が難しすぎてダメだ（無理やり作つたら刃が厚すぎた）。

閑話休題。

さて、そろそろ鍛錬を切り上げて屋敷に帰ろうかと思つた時、「ん？」

私は、屋敷へと続く道の真ん中で倒れている子供を見つけた。

楽しく転生〇フ（後書き）

今回は、主に日常光景でした。幼少期からコルコルと行くので、バトルはもうちょっと先になります。

元ネタ等、解説「一ナーナー！」

引き続き、宝玉の説明から行きます。

今回登場したのは、節制と剛毅の宝玉です。

節制の宝玉、能力は“封印”です。アニメでは、入手したエリスを永久昏睡状態にして封印してしまいました。ほかにも、相手の能力をいろいろ下げたり出来ます。“終力”なみに厄介な能力です。

剛毅の宝玉、主に攻撃力をUPさせる宝玉です。アニメでも恐ろしくパツとしない存在の宝玉ですが……。攻撃力UP 怪力少女化させます。

ルーの杖の元ネタは、モンハン3のスラッシュアックスです。形状は一番最初に手に入るアレです。

変形機構は再現していますが、属性攻撃やビンはついていません。その代わり、別の物が付きます。

なんでコレを使うのか？ 答えは私が好きだからだ！

今回はこれで。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

楽しく転生∞∞（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

「……クラン・ベル・ド・ベルナーブルです」「ふむ、ド・ベルナーブルか……たしかラ・フォンティーヌ領のすぐ隣の小さく、荒れ果てた領地だったな」「して、なにゆえアナタが我が娘の部屋に居たのか、説明してもらいますよ？」

おうおうと不安げに視線をさ迷わせている女の子　クランに、お父様とお母様は容赦なく尋問している。ああ～もう！

「お母様、それにお父様！　クランさんは、道端で倒れていたのを見つけて私がここに運んだだけです！」

まだ夜が明けるずっと前、屋敷に帰ろうとする私は、道の真ん中でボロボロになつて歩いてくるクランを見つけた。

「おとうさん、おかあさん……」

虚ろな眼でうわ言の様に両親を呼ぶ子供を放つては置けず、彼女を自分のへ（もちろん窓から）運び入れ、外で寝ずの番をしていた（実際は居眠りをしていた）メイドに、

「体を洗つお湯と、清潔なタオル、それと包帯に傷薬を“だれにも気付かれないように”用意してください」

と言つて、用意させた。なんに使うのかと聞かれたが、とにかく用意しようと質問を跳ね除けた。その後、持つてきてもらつたお湯とタオルで女の子の体を拭き、ボロボロになつた足に傷薬を塗つて包帯を巻いた（実際はお湯を持つてきてくれたメイドが全部やつてしまつたが）。

そしてその後、朝日が昇つた少し後に女の子が眼を覚ましたので簡単な事情聴取をかねて食事を用意させたつもりだったのだが……。やつてきたのはお父様とお母様、その後ろに寝ずの番をしていたメイドがビクビクと体を縮ませていた。

そして、冒頭につながる訳だ。

*

まつたく、お父様もお母様も……。

「あの……助けていただいてありがとうございます」

改めてメイドに用意してもらつたスープを食べ終ると、お礼を言つてペコリと頭を下げるクラン。だいたい私より少し年上ぐらいだろうか？

少し休めたため回復した彼女から、自分がカトレアお姉さまの領地のすぐ隣に領地をもつ貴族の子供で、なんでも眼が覚めたら屋敷には使用人も含めて誰も居なく、家財道具一式も自分が寝ていたベッド以外の一切が無くなつていたらしい。さらに枕元にラ・ヴァリエール公爵に頼るようになると、言つ置手紙と僅かばかりの食料が置いてあつた。

夜逃げですか……。

お父様曰く、ド・ベルナーブル領は経済的に破綻しかけていたらしい。毎年のように赤字経営だったそうだ。何でも領地に平野部が殆どないため大きな街を作る事ができず、勾配の激しい山々に囲まれて天然の要塞の様な地形となつてているので守りやすいのですが……正直に言つて交通の便と生産性と特産物がまったく無いようです。唯一の生産品は、未開拓故に鬱葱と生い茂つている樹木から木材と木炭。それすらも、交通の便が余りにも良くないために運搬費が恐ろしく高くついてしまい儲けが出ないのだとか……。さらに手入れが行き届かず、天然の迷宮に成り果てた領内では、オーク鬼やコボルト鬼などの凶暴な亜人が住みかを作つてはいるようで、平民が暮らす集落を守るために経費も馬鹿にならなかつたらしい。

さて、そんなところに人は住みたがるでしょう？

答えは否。

少なかつた領民は、最終的に現れた野生の竜種（ワイバーンの類らしい）の襲撃を受けて、全員家を捨てて逃げ出しました。

「そして、クランさんのお父様とお母様は、クランさんを残して逃げてしまわれた……と言つわけですか」

ボロボロと涙を流しながら、自分のに起こった事を説明するクランさん。私は見るに耐えなくなり、彼女を抱き寄せて自分のまな板としか言いようのない胸に押し当っていました。

きっと、カトレアお姉さまならこうするだろうな、なんて思いながら。

泣き出したクランさんの背中を、優しくさすってあげた。

それから事実確認のため、お母様が（本当はお父様が出向く予定だつたが）直々にド・ベルナーブル領に向かった。結果が判るまで3・4日はかかるらしい。

クランは、今は泣きつかれて寝ている。この年頃の女の子が馬でも半日はかかる距離をただ一人で歩き通して来たのだ。安らかな寝顔を見ていると心が休まるな。

「ところで、ルーティア

「なんでしょうお父様？」

「うむ、ルーティアはこの娘をどうするつもりだね？
彼女の言う事が確かなら、彼女は没落貴族で……」

「お父様」

「？」

お父様が最後まで言い切る前に、それを遮つて私はお父様の方を向いた。

「お父様は、苦しんでいる人を見て『可哀想だ』と、哀れめば……

『自分はその人を助けたんだ』と思ってしまう人間ですか？

可哀想だと、それだけ“思うだけ”で実際には何もしない。

思つたと言う免罪符を得る事で、自分は何もしなかつた訳じやな

いと思えてしまつ……。

それは、とても残酷な事ではありませんかお父様？

そして、お父様が『金の切れ目が縁の切れ目』だなどと言つ様であれば、お父様たちの言つ忠義や恩義とは……』

「ルーティア！！」

お父様は怒氣を荒げて声を上げるが、それでも私は、残りの言葉を力強く言い放つた。

「しょせん、その程度のモノなのですね？」

「ちがう、違うんだルーティア。貴族の忠義と義務は……」

「なら、力ある者の義務とは何でしょつかお父様？」

その力を持つてして、力無き者を虐げる事ですか？ 違うでしょお父様？」

しばしの沈黙の後、お父様はフウッと息を吐くと、私を両手で抱き上げてソファーアに腰を下ろした。

「まったく、ルーティアはカリンに似て頑固者だ。

これじや親である私達が、教えられる事は無いではないか？」

「私は、お父様の様に賢くもなければ、お母様の様に志が強いわけでもありません。

だた、引けぬと……引いてはならぬと私の中で叫ぶモノがあり。それに従つてゐるだけです」

「そりか……、それで我が娘ルーティアは、この身寄りのないミス・クランをどうしたいのかね？」

「……もし、彼女の言つとおりの場合、彼女の領地はどうなりますかお父様？」

「そうだな、唯一居所の判つてゐる正當な後継者が未だ6・7歳の子供で……領地が実質上無人であるなら、領地は一時的に国庫に預けられる事になるな」

「そして、クランさんがこのまま路頭に迷つて死んでしまつたつ場合は？」

「国内で領地をもてる貴族の誰かが、その土地の領主に命じられる

だらうな

「……ならばお父様」

私が彼女にしてあげられる事は……。

数日後、クランの言っていた事が本当である事が帰ってきたお母様により知らされた。

……………

そして、

「本日より、ルーティアお嬢様の身の回りをお世話させていただきますメイドのクラン・ベルです。どうぞ、よろしくお願ひします」

そう言って、白いメイドカチューシャをのせた亞麻色の頭を下げるクランが私の目の前にいます。

あれから一ヶ月後、彼女は私専属のメイドとしてラ・ヴァリエール公爵邸で働く事となつた。

「ええ、これからよろしくねクランさん。

でも……ちょっと硬いですよ？」

「いえお嬢様。お嬢様からいただいたこの恩義、この身に代えて……」

「だから、それが硬いと言つていいんです！」

まったく、お母様たちの指導が厳しかったのは判りますが……公の場でない時はもっと自然に接してください」

「ですが」

「私に『命令』させたいのですか？」

私がクランさんを睨みつけると、

「……判りました」

と、やつと折ってくれた。

「ですが、これだけは言わせてください。

本当にありがとうございます。

平民に身をやつす事になりましたが、雨風に凍える事も、人買いに捕まり慰み者にされる事もなくなり、あまつさえこの様な若輩者に働く場所を与えてくださつて、本当に本当に……」

最後の方はもう声にならず、下を向いてボロボロと涙を零していった。ああもう！ 私は彼女を抱き寄せる

「泣き止みなさい、これからアナタが泣いていいのは、アナタが幸せを手に入れて、それに喜んだときです」「いいえ、私は今……とても幸せなんです」

楽しく転生⑧（後書き）

今回は、オリキャラのクラン・ベルさんの登場話でした。
そう言えば、家庭教師のアリシェル先生もオリキャラでしたね……まあいつか、かませ犬見たいなキャラだし（まで

基本的、このＳＳのオリ主　ルーティアは青い子です。
もし能力がないただの人だつたら、たぶん悲惨な道を歩くかもし
れないほど青いと思います。

では、ネタなど解説コーナー！

七徳の宝玉は今回出てこなかつたので、残りの正義と希望の説明
は後回しに（おい

オリ主の能力の一つ、蒼い第三の瞳の元ネタはＳＦ小説、ザ・サ
ードアイ

正式な名称は、“蒼い天宙眼”でしたね。直すべきか直さないべきか……。

中世ファンタジーな世界なんで、紅い方ではなく蒼い方を採用し
ました！

主人公、何でも屋の火乃香の生態器官を能力として採用。ちなみに、ルーティアの額には第三の瞳は象眼されていません。もしあつたら、生まれた瞬間パニックですからね……。代わりに、気などが見える人には額に蒼い瞳の形をした文様が見えます。

火乃香は、この瞳の恩恵で氣功術に似た力を行使でき、例え戦車の積層装甲だろうと自動歩兵の大群だろうと、彼女は自慢の居合いでなぎ払いします。

……実際、アニメ、ザ・カードの最終話は無双だった。

身体の外と内の氣やオーラと言つたモノを自在に操れるなどと書かれています。……ネギま！で、考えると“咸卦法”が普通に出

来ているかも知れない件について、オリ主は使えるようになるのだろうか“咸卦法”？

某ハチャメチャ魔法学園、元ネタはファミ通文庫“まじしゃんず・あかてみい”です。

プチネウス可愛い。エーネさんもつと殴れ。先輩もとい先生、もつと突っ走れ、規制コードギリギリまで！

ちなみに、ゴスロリ黒天使の元ネタもココから、御前天使のガブリエル様です。

性格からなにやらまつたくの別物なのは、仕様です。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたらご指摘ください。

楽しく転生〇九（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

私は今、机の前に座り自作のボールペンを片手に机の上に広げられた一枚の紙と戦っている。

「ルーティアお嬢様、あまり根をつめてもいけません。そろそろお茶にしませんか？」

「……そうね、そうするわ」

ペンを机に置くと、クランさんの用意してくれたお茶を手にひとつ

て一口、うん美味い。

「上手になりましたねクランさん」

「ありがとうございますルーティアお嬢様」

私たちは今、一人で秘密の工房に籠もっています。

それはなぜか？

事はクランが私の専属メイドになつてから3・4ヶ月ほど経つたある日の事でした。

*

「ルーティア、今からとても大切な話をします」

と、お母様とお父様、それにカトレアお姉さまが真剣な顔をしています。

「何のお話でしょかお母様お父様、それにカトレアお姉さま？」

「ああ、とても大切な話でな……クランくんも同席しなさい」

「メイド風情の私めなどが……」

「クランさん、これはアナタにも関係のある事なの」

「丁寧に断りを入れようとするクランを、カトレアお姉さまが止める。はて、いつたい何の話でしょう？」

「ルーティア、そんなに険しい顔をしなくても良い。」

……さて、唯一の継承者であるミス・クランが貴族でなくなってしまったため、ベルナーブル領は空席となってしまった。

ところで、ルーティアよ家族の中でカトレアだけ名前が違うのは知つているな？」

「はいお父様、お姉さまの家名はフォンティースです。体の弱いお姉さまのためにお父様が、せめてもとお姉さまに領地を分け与えたと、お姉さまに聞きましたが……それが？」

「うむ、実は先日の事だが正式にベルナーブル領がラ・ヴァリエル領に併合される…………いや、正確に言つとラ・フォンティース領に併合される事になつた」

「なるほど、領地が増えたのですか…………ん？」

「お父様、いつたい何が私たちにとつて大切な話なのでしょうか？ 聞くところによると、クランさんの故郷がお父様の治める領地となつただけに聞こえますが…………」

「まつて、話はこれからなの」

「カトレアお姉さま？」

「うむ、それでな……ルーティアの名をド・ラ・ヴァリエールからド・ラ・フォンティースとし、領主としてミス・クランと共にかの地を治めて欲しいのだ」

「…………なんですか？」

「えへと、お父様…………どうも私の耳がおかしくなつたようですね？ お父様が私にラ・フォンティースの領主なるように言つてござるうに聞こえましたが」

「ルーティア、私は確かにそう言つた」

「…………」

「お母様、どうやら私は何か悪い物を食べたようですね？」

「先ほどから幻聴のようなモノが…………」

「ルーティア、アナタの耳は確かに正常ですよ？」

「…………」

「カトレアお姉さま？」

「口一口と微笑まないでください。

「……ルーティア・ルシェル、どうやらアナタは性質の悪い夢を見てこられるのです。

そうです、きっとそこに違ひありません。

なぜなら、聰明なお父様とお母様が5歳にも満たない子供に、領主になつて土地を治めろだなどと戯言を言つわけがありません。

そうです、きっとこれは夢「お嬢様」……何かしらクランさん?」

「とても信じがたい事ですが……現実逃避しないでくださいお嬢様」「ああ……現実なんですね?

本当にそんな滅茶苦茶な事を言つちやつたんですね?

「ルーティア、とても信じられないかもしかんが……これはカトレアからの頼みもある」

え? お姉さまが?

「理由は……カトレアは話してくれんし、反対するであろうカリースも賛成してしまつ。

かく言つワシも……“本当に何も知らない”が、一人が賛成するなら……私も賛成だと考えたのだ」

何も知らないを強調しないでくださいお父様。お母様とカトレアお姉さまに小突かれてますよ?

「イタタ……うむ、まあ、強いて理由を上げるならばコレだ」

そう言つて、お父様はマントの下から一冊の分厚い本を取り出した。

本のタイトルは、ハルケギニア語で“文明”。その上には小さく地球の文字でシヴィライゼーション。って、お父様それは!?

「うむ、先に勝手に部屋に入つた事を謝りう。

それで、私はこのゲームは実によく出来ていると思つ。政治、経済、宗教に戦争、口口までの要素を詰め込んだボード・ゲームは生まれて初めて見た」

まあ、この世界じゃ主なゲームはチヨスかトランプ……それぐら

いでしたね。狂王ことジョセフさんの作った“箱庭”なんて完璧にSLGでしたが、他の人にはただの人形遊びにしか見えてなかつた……。と、言つよりも娘の部屋を勝手に家搜ししないでください！ 今度、普通の鍵だけじゃなくて磁石式の鍵でも付けておきましょうか……。

「あ～、例えゲームとは言え、その歳でこの様な難しい事をやつているのだ。領地の経営を任せて見ても良いと考えたのだ。うん、そうだ」

いや、あの、そんなんでいいんですかお父様？

ゲームですよ？ たかがゲームですよ？

「ルーティアちゃん」

「なんですか、カトレアお姉さま？」

「クランちゃんの事も考へると、これはとつてもいい事だと思つた……あ、なるほど。もともとそつぱつ考へもあつてクランさんを保護したんでした。

「……そうですね、わかりました。

「領主の件、謹んで拝命します」

*

「さて、作業を再開しましょう」

現状、目下の問題は私に力がない事だ。

私個人の力なら、ある程度ある。懐にさえ潜り込まれなければ何とか成ると思うし、いざとなればAIN・ソフ・オウルの“正義の宝玉”の力を解放し『滅びの翼（命名、私）』で辺り一面を殲滅すればいい。そう、エリスさんが土星の輪を破壊したよ……。

だがこれは、一切の手加減が効かないうえに色々な場所で一斉に問題が発生した場合に対処が出来ない。

ほんと、

「『私がコレから言う事に“はい”か“イエス”で答えてください』
……で、動いてくれる部下が欲しいですね」

「……お嬢様、いつたい先ほどの台詞は？」

「ああ、気にしなくていいですよ？ ちょっと独り言が漏れただけ
ですから」

まずは、手勢を増やす必要があります。そして、その人達が生活
を送れる環境も。

前々から少しずつ考えていましたが、ラ・フォンティーヌ領
を使えることが出来るようになりますので、本格的に計画を開始
しましょう。

そして、私が今行っているのはお父様から頂いたラ・フォンティ
ーヌ領で何が出来るか？ を、領地の地図と農林水産などの第一次
産業や領地経営の方法を指南している書物を片手に検討していると
ころです。

「とにかく、使えるものが木材だけとは……」

「はい、とにかく樹木が多くしかも手入れが行き届いていないので
建材としては価値が低く、木炭にして売り払おうにも……」

「運び出すコストが高くなりすぎる……と」

ううん、ここ数日地図と睨めっこしていたが良い案が浮かびませ
ん。

と言ふが、地図の精度が悪すぎてどのような地形なのかハッキリ
と分からぬ。地図を元に土で領地の模型を作つて見たのですが…
…正直に言つて地図の方がまだマシかもしないモノです。

事前に少しでも何か出来ないかと考えて見ましたが、やはり実際
に領地を見てからないとダメですね。

「農地を作るにしても平地が少なく大規模開発はムリ。後は鉱山資
源か…温泉でも大量に出てくれれば観光名所に出来るかもしだ
せんね」

でも、望み薄かもしぬ。現実は厳しいですからね。

チラリと、左手のアイン・ソフ・オウルに目をやる。希望の宝玉でどうにかしようか……。いやいや、それは最後の手段であつて、「それではお嬢様、明日は領地視察の出発日です。

夜も更けてきましたので、もうお休みなられたほうが良いかと?「そうですね……（仕方がない、夢幻書庫も漁つて見ましょうか）」

いや~、淫獣ことユーノくんが欲しいと思ったのはコレが初めてではない、かな?

夢幻書庫は、地球の色々な書物や記録媒体が保管されている場所です。

ですが、ひとつだけ……本当に困った問題があります。

ガツン!

「イタ!?」

それは、

ドカドカドカ……。

「ゲホッ！ ゲホッ！？」

だれも整理整頓をしてくれないので。

しかも、私が前世で見た事のある本などは（一応）ちゃんと整理されていたが、その他の物は一切合財整理されておらず……今日の晩御飯7月号と書かれた料理本の隣に理科1の教科書（しかもかなり古い）があつたり、ゾウさんの冒険などと言う児童書のすぐ横に今夜から出来る夫婦愛の手引き（内容はR18か?）なんて物があつたりする。

本棚に貼られているジャンル別けの札は飾りですか??

ですのでこの夢幻書庫では、実質的にユーノくんが過労死しそうな無書庫となんら変わらない状況が発生しています。

「農業に関する本は……えーとコレじゃなくて、コレでもなくて……」

しかも、だれも整理してくれないから引き抜いた本が床に積み上げられ、元あつた場所に戻されてもいません。

「……はあ、もう寝ましょう」

結局、探索は諦める事にしました。さすがに精神世界でも疲れ果てたくありません。

……そう言えば、この夢幻書庫。私以外の人を招く事もできたつけ？ よし、誰かに整理整頓を頼めば……。って、ダメだダメだ！ R18コーナーにはゼロ魔の本もありました。もし通常コーナーにそれが紛れ込んでいたら、大惨事です。

「やっぱり、自力でやるしかありませんね」

楽しく転生⑨（後書き）

今回は主に日常+でした。

5歳程度の子供に領地をあげるなんて、ヴァリエール公爵ならまずありえない事でしたね。

しかも、自分が納得した理由が娘の部屋から出て来たゲームって……。

まあ、いろいろと事情がかみ合つてこの結果に成ったなんです。

まず、ベルナーブル領とフォンティース領の合併ですが、ヴァリエール領がこれ以上大きく成る事で発生する他の貴族との摩擦を回避するための措置です。

まだまだ子供のオリ主が領主に選ばれたのは、旧ベルナーブル領が実質的に無人（鬼亜人を住民と数えないため）である事と、ベルナーブル領の正当な後継者であるクランさんを確保している事です。クランさんは、王室の書類上では行方不明（死亡）扱いされています。

カトレアさんの苗字は、相変わらずフォンティースです。親御さんと含めて後見人のような立ち位置……かな？

「私じゃ、領地を治められないから」

ど、カトレアさんなら言ひそつですでの、オリ主に領地を任せたとも考えてください。

シヴィライゼーション、元ネタも何もまんます。ちなみに、ハルケギニア語で“文明”と言うゲームにしています。

これは、場違いな工芸品や東方からの品ではなく、オリ主が夢幻書庫でたまたま見つけた攻略本やガイドブックを見て作った物です。ジヨセフさんにあげれば、熱中して戦争なんて止めてくれるかもと

作ったしだいです。まあ、ムリでしょ？が……。

『私の言ひ……』元ネタはNWのアンゼロッタ様の名言、もとい迷言です。

アンリエッタを改造して、アンゼ様みたく……いや、ダメだダメだ（笑）。

正義と希望の宝玉の説明をします！

正義の宝玉、能力は純粹なる破壊。アニメでは入手時に魔王を瞬殺し、守護者キリヒトの絶対防御を貫くなど、一番の活躍を見せている宝玉です。

希望の宝玉、能力は確立、可能性の操作。アニメでは、秘密公爵リオン＝グンタの持つ“世界のあらゆる秘密が書かれた本”に記載されていた世界の流れを覆しました。

夢幻書庫のこの仕様ですが、知識無双オレ凄い！ から、使えねぇ！ に突き落とすためのものです。

ちゃんと本はありますよ？ ただ、探索系魔法がないとやつていけませが……。

楽しく転生～（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

楽しく転生10

さて、あれから……いや、この行を常用したい訳じゃありませんよ？

处处細かい事を省くだけですからね？

「いつたい誰に言つているんですか、ルーティアお嬢様？」

「クランさん、ルーティアお嬢様が不思議な事をするのはいつも事じやないですか」

ああ～、久しぶりに登場したのにそれは酷いですねミス・アリシエル先生。そんなんだから噛ませキヤ、ゲフングフン……！

現在私達は、フォンティーヌ領（元ベルナーブル領）の再開拓を行っています。

実際に領地を検分して分かつた事は、意外にも農業地として利用可能な平地が“確保可能”である事でした。……鬱葱と生い茂る樹海と勝手に住み着いてしまったオーク鬼等に阻まれ、十分な探索が出来ずにいた為にこの場所を見つけることが出来なかつたんですね。まあ、確保可能と言つても、比較的勾配が少なくて慣らし易そうな土地という意味ですが。

「それにしても、すさまじい光景ですね……いつたいどの様に為さつたのですか？」

アリシェル先生は、田の前に広がっている光景を見て啞然としています。

私達の田の前、数日前までは数リーグ先まで樹木で覆いつくされていた場所が……今は、その代わりに倒木で埋め尽くしています。私が行つた事は、まず指定範囲の樹木の伐採作業。AIN・ソフ・オウルと正義の宝玉の力でバツサバツサと切り裂いてやりました（笑）。羽を広げて超低空フライで木と木の間を抜けると……あら不思議、次々と木が倒れていくのです。

伐採作業とか、本来は業者に頼む事で雇用を生めるんですけど……

…。私の手元には、公に使えるお金が有りません。なんと、私にはコレだけの規模の伐採を行うために雇う人件費が払えないのです。

ついでに切り倒した樹木の運搬費も払えません。

ですので……、

「いえ、皆さんが来る前に、その……伐採しちゃいました。
どうやってやったかは、禁則事項です」

ピンと立てた人差し指を口に当て、集まつてもらつた人たちに確認します。

聞かないほうがいいかもしないと、全員が肯いてくれたました。
いや一人だけ……、

「ルー、アンタいつたいどうやったのよ……」

「ダメよ、ちいさなルイズ。ちいさいルーが教えられないって言うんだから聞いちゃダメなのよ？」

訝しそうな顔をするルイズをちい姉さまこと、カトレアお姉さまが嗜めた。

あまり深く質問されると、はぐらかすのも大変ですからね。

「では、残りの作業を始めましょう！」

そう言つて、私は空中に手を突っ込みます。そして、月衣の中から某モハンのスラッシュアクスを模した杖、“タケミカヅチ”を取り出すと魔法の詠唱を開始しました。

*

Reverse time side

なぜ、私がルイズ達の前で平然と特殊能力を使い、隠していた魔法まで使つているかと言つと……。それは数ヶ月前に発生したあの

事件がきっかけでした。

私の旧ベルナーブル領視察が終わり、どの様に開拓を行っていくかを決めていた頃の事です。5歳を過ぎた私とルイズは、周囲から見て恐ろしいほど早熟で聰明の様でした。そこでお父様が、「二人とも、来週は王城に赴くことになった。

そして、アンリエッタ姫殿下の遊び相手を勤めてもらいたいのだが……」

「姫様？」

キヨトンとするルイズ。まだまだ歳相応の幼さがあるのですが……。つて、ホッペにクックベリーが付いてますよ？

私はそれをペロリと拭き取ると、

「……お父様、決定事項なのにワザワザ確認しないでください」

「ふむ、ルーは冷たいなあ……」

いや、決定事項を言つてから確認事項つて、ダメですよ？

お父様、ちょっとすねている様ですね。仕方ありませんね、ギューって抱きついてあげます。

まあ、そんなこんなで私達は姫様の遊び相手を務めることになつたのですが、

「ルイズ！ そのケーキは私のよ！」

「むー！ 姫様はもう4個も食べたじゃない！ 私なんてまだ5個しか……」

「私より多いじゃないの！」

ああ～殴り合いを始めちゃいましたよあの一人。髪の毛を引っ張り合つたり頭突きをしたり噛み付いたり……一人ともものすつごく御転婆ですね～。

「あー！ ルーがケーキ食べたー！」

「まあ、本当ですか！」

二人して声を上げる。

なんですか？ 私も巻き込むつもりですか？ ……とにかく逃げましよう！

バタン！！

「「まあてーー！」」

「お待ちください姫様！ それにルイズお嬢様！」

「だれか、その御三方を捕まえてください！」

ヴァリエール邸で繰り広げられた遁走劇が、姫様も加わってより巨大な王城の中で繰り広げられてしまいました。三人で城中の廊下や階段をを走りぬけ、尖塔の窓からロープを使って一気に下まで降りたりもしました。

もちろん、私たちを捕まえるためにいろんな人達が追いかけてきますが……、結果は言わなくともいいですよね？

まあ、毎回毎回そんな事になるわけではありませんよ？ 私も混ざつて喧嘩した事もありましたし……。

閑話休題。

今は、私も含めて三人とも（クランは実家で別の用事を頼んでいるので居ません）王都トリスターから少し離れた離宮でおとなしく遊んでいます。ですが、やはり子供には部屋の中でおとなしく遊んでいなさいって訳には行かないのです。

「お外で遊びましょう！」

「わたしもサンセー！」

アンリエッタとルイズが両手を挙げて同意している。私？ うーん、一日中家の中に居るのも……外は快晴で、家の中に居るのはもつたないですよね？ うん、そうですよね？

あ、でも……、

「ところで二人とも、厳重な監視体制の敷かれたこの部屋から、いつたいどの様にして脱出するおつもりですか？」

「「う”！？」

そうなのだ。私達が城の中を遁走した結果、最初は私だけ捕まる事ができなかつたのですが……。逃げる事に慣れてきたのか、ルイズとアンリエッタ様までメイドさんだけでは捕まえる事ができない様になってしまいました。そして最終的に、城内を見回っていた

魔法衛士隊の隊員までも動員しての捕獲劇……と、暫く事態にまで発展してしまったのです。

その結果、私たち三人がそろって遊ぶ時は通常よりも多くのメイドさんが配置され（逃げられないよう廊下を埋め尽くすためだ）、さらに非番の魔法衛士隊まで警備に駆り出されます。しかも今日は外に出さないようにする為か、警備がいつもより厳重です。私達がこの屋敷の外に出て遊ぶには、某蛇のコードネームで親しまれるオジサンも真っ青な潜入（正確には脱出）作戦を実行する必要があるわけです。

「「「」」

「……しかたありませんね、すみません」

リン、リン

「はい、何でしょうか？」

ドアの向こうで待機しているメイドさん（本当は室内待機が普通なのだが、遠慮なく付き合つために外で待機させている）を呼び出し、

「部屋の中で遊ぶのに飽きましたので、外で遊びたいのですが」「申し訳ありません、お三方を今日は屋敷から出さないことがありますので」

「そうですか……だそうですルイズお姉さまに姫さま」

「「え」！」

「うを！？ 先ほどから思つていましたが、一人とも脅威のシンク口率ですね～。

「すみません、なにか甘い物と飲み物をお願いします。

……あの二人のお腹を一杯にして眠つてもらいましょう。なんなら一服盛つて眠らせてもら……」

「そ、そんな恐れ多い事は……おやつは直ぐに用意をせます」

顔を真っ青にさせて下がつていくメイドさん。さて、

「二人とも……いったいなにをしているのですか？」

「ルー、見て分かりませんか？」

え~と、シーツやらカーテンなんかを結んで長い紐状にしてるね。つて、まさかそれで窓から脱出する気!?

「……姫様、まさかそれで外に出ようと?」

「ええ……。あ、ルイズ、そこはもっとうがつちりと縛つたほうがいいわ」

「はい、姫様!」

おいおい、元気よく答えないでくださいよルイズお姉さま……はあ、仕方ないですね~、

「その長さだと、下まで降りれませんよ?」

そう言いながら机の上に、

『外』で遊んできます。

ちゃんと探しに来てくださいね?

BY・ルーティア』

と、書いた置手紙を置きます。

そして、二人に向き直ると、

「私が連れ出してあげます」

まあ、子供は外で遊ぶのが一番ですよね?

……などと、その時はコレが大変な事になるなどとは微塵も思つても見ませんでした。

「す~いわ! 誰にも見つからずに屋敷の外にまでやつてこれるなんて!」

田隠しを外しながら、アンリエッタとルイズは素直にビックリしています。

“信頼の宝玉”の効果で認識できないようにして、じつそりと屋敷を抜け出してただけなんですか? 念のために『いいですか? 私が良いと言つまで田隠しを外す事も喋る事もしてはいけませんよ? もし一言でも喋つたり、田隠しを外したら……もう外に内緒で連れ出してあげませんからね?』と言つてアイン・ソフ・オウル

の力を見せずに済ませました。

さて、外に出て遊べるようにしたし、あの一人はお花畠で冠でも作つて……いるわけがなかつた。

「さあルイズ、この森を探検しましよう！」

「はい、アンリエッタひ、いえ隊長！」

なんだか愉快な探検隊みたいな乗りで森の中に入つていいく二人、あの～私は日光浴しながら寝てたいんですけど……。

「もう、ルーも早くー！」

はいはい、今行きます。

……ふむ、しかし森を探検するにしても危険が無いわけじゃない。とりあえず、

「こんな事もあるうかと！」

某宇宙船艦で馴染み深いセリフを吐きながら、毛糸を入り口の木に縛りつけ、帰りの道しるべにした。

念のために月衣の中に入れておいたのだ……。ごめんなさい、本当は編み物の後そのまましまったままだつた奴です。

「はやく、置いてくわよー！」

はいはい、今行きます！

*

Another side

「おい、見つかったか!?」

「いや、こっちには逃げてこなかつたぞ

「まづいな。オーク鬼の群れが王都の近く、それも離宮の直ぐ側に現れるなんて前代未聞だ。

姫様たちには申し訳ないが、安全が確認できるまで屋敷の中で……

「グラップ隊長！ ひ、姫様たちが屋敷からいなくななりました！」

「な？ それは本当か！？」

「はい、連絡用に屋敷に待機させていた私の使い魔を通して確認しました。

それと、部屋の中に外に遊びに行つて来ると言つ置手紙が……」「ええーい！ 屋敷に残してきたやつらは何をやつておつたのだ！？ 早く見つけねば！ もし姫様たちがオーク鬼とでも出くわしでもたら……。

王軍に連絡を入れろ！ 直ぐさま姫様の搜索とオーク鬼の駆逐を行わねば！」

「隊長！ ここがいかに王都に近くても、部隊が到達するまで時間が……」

「馬鹿を言つな！ 我々だけでも姫様をお探しするのだ！」

「はい！」

楽しく転生10（後書き）

オリ主のための箱庭、建設開始です。
でもその前に、ちょっと時間を戻して姫様とのHペソードを挟みます。

時間配分とか、キャラたちの年齢が危ない（アヤフヤな）感じですが、これも仕様です。仕様ですから！

最後の部分は、ちょっときなぐさめに。そろそろ戦闘描写を入れたい。

某蛇の……、メタル・ギア・ソリッド（MGU）のスネークです。
彼のように、ダンボール一つで潜入できるような優秀な工作員が
いれば、宗教狂いなロマリアに対しても牽制できるんんですけどね～。
特殊能力持ちのオリ主や転生者って、ロマリアに異端審問されそ
うで怖いですし、やっぱり諜報機関って大切ですよね？

あと、ヴィットーリオが教皇に選ばれるのっていつ位なんだろう？
もしかして、もう代替わりしてるのかな？？

ジュリオ　　ヴィンダールブの召喚時期も気になるところ。もし
もういるならば、何処から見られているか判つた物じゃありません。
特にルイズは、この時点では虚無の扱い手の候補ですから……チエ
ックをされているかも。

うむ……、やはりロマリアは海に沈めるべきか。悩みどころです。

楽しく転生ーー（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと書つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

十万PV、一万ユニーク突破ああああ！
皆様、じっくり愛読ありがとうございます。

楽しく転生11

鬱葱と生い茂る森　　と言つても、既にある程度散策が行える位に舗装された林道の探検を始めて、大体三十分位が経過したと思します。

途中、好奇心旺盛な子供であるアンリエッタとルイーズが道を外れて森の中に入つていつたりもしましたが……今のところ取り立てて問題も発生していなません。だから私も気が緩んでしまったのだろう。

そして、実際に死線を潜つた事も無い子供である私たちには、森が発し始めた変化に気づけませんでした。

「さあ、どんどん行きましょう!」

「はい、姫様!」

「……」

いや、それでも第六感として機能していた蒼い第三の眼　天宙眼がチリチリと私の額が焦がして、私は正体も分からぬ不安を抱えていました。

だが、そんなのは気のせいだと、私は頭を振つて払いのけてしまつた。

そして、それは唐突にやつて來た。

「え……?」

私達が林道の途中に作られた休憩所で休んでいると、のつそりと林道の脇に立ち並ぶ木々の影から外見は一本の足で立つ豚の様な……

「お、オーク、鬼?」

本来、王侯貴族のご息女達が遊べる範囲にはいてはならない存在。人肉を貪るオーク鬼が、それも一匹や一匹ではなく十匹も私達の前

に姿を現した。

「ブギュアアアアア！」

各々が奇声を上げ、手に手に持つた棍棒やら鎧びの浮いたナタの様な物を振り上げるオーク鬼達。外見こそ二足歩行の豚ですが、その身長は2メイル強もある巨体。身長が1メイルにも満たない子供の私達からして、必殺の文字が浮かぶ凶器を振り回しながら迫つてくるオーク鬼達の姿は悪魔のよつに映つたかもしれません。

実質、身を守ろうと杖を抜き習いたての魔法を唱えようとしたアシリエッタは、あまりの恐怖に口がパクパクと動くだけで一向に詠唱が出来ていません。ルイズにいたつては、取り出した杖を落としてしまい、ガタガタと肩を震わせながら地面に手を付いています（たぶん杖を拾おうとしてるんですね）。

私？

私も例に漏れず、ただ立ち尽くしていました。
もう眼前までオーク鬼達は迫つて来ています。

でも、

動けません。

なぜ？

体が震える。

月衣が防御してくれます。

練武だつてしましました。

武器だつてあります。

でも、迫つてくる奴らを見ていいしかできない。

オーク鬼がナタを振り下ろすのを、私はただ見ていいしかできない

い？

二人は？

死ぬ。

そんなの、いやだ。

嫌だ！

動け、

ガツキイイイン！！！

「アーティスト」

一
あ
あ
あ
：

த
வ
க
:

ア
ア
ア
ア
ア

そして、いつの間にか私の手には月衣にしまってあつたはずの剣斧“タケミカヅチ”が握られ、数匹のオーク鬼が振り下ろしたナタを受け止めていた。

オーク鬼どもは、全身の筋力と体重を乗せて攻撃したのでしょうか。なぜこんな子供の腕力で、どうして自分達の攻撃が防がれたか判らない、と言つ顔を彼らは……しているのだろう。

体長が2メイルを超える、高い生命力を持つ彼らオーケ鬼はメイジですら手こずり、ただの剣士では五人がかりでないと倒す事ができないと言われています。

もし、それが複数で襲つてきたら？

「さあ、おまえが『普通死ぬだろ?』と言つたから、

それがこの世界の『常識』だから……。

ハハハ、馬鹿な事を言わないでください。そんな常識は、覆され

新編文選

左の手首、アイン・ソフ・オウルが輝きを増す。発動させる力は

“剛毅”。

私は自然と口の端が持ち上がり、オーク鬼達に不適に笑い返します。そして、

「吹一き一飛一べえええツ！」

一息でタケミカヅチを振りぬき、肉薄したオーク鬼達を吹き飛ばした。

だが、斬撃が浅かつたようです。

振りぬいた一撃に押され、さらにその後ろにいたオーク鬼達を巻き込んで吹き飛ぶオーク鬼達。だが、オーク鬼に脱落者は皆無。ダメージらしいダメージは、タケミカヅチで腹部にかすり傷が出来たくらいか？ 吹き飛ばされたナタも周囲の木に突き刺さつただけで、他のオーク鬼には命中していない。

重さで叩ききる斧形態で、さらにある体勢では、さすがにオーク鬼を一刀両断にする事は出来なかつた様だ。

ならば……。私はタケミカヅチの変形機構を作動させた。

ガツキン！ ガツシャン！

先端にあつた斧の刃が手元にスライドし、折りたたまれていた刃金がソレとつながる。刃と刃の連結部の再結合が終わり、斧から剣の姿に形を変えたタケミカヅチを正段に構えた。

「退路は私が切り開きます！

毛糸の目印を頼りに、屋敷まで逃げてください！」

後ろで震えている二人を逃がす為、私は声を上げた。視線は、体制を建て直して再び襲い掛かってくるオーク鬼へ。未だに身体のどこかが強張り、私は彼らから眼を離す事が出来なかつた。

そして、私は一人が逃げ出す事も確認せずにオーク鬼に向かつて行つてしまつた。

オーク鬼の群れに突撃しながら呪文を詠唱する。

選択した魔法は“ブレイド”。それも普通のブレイドではなく、私の持つ知識から独自のアレンジを加えたモノだ。周囲を飛び交う電子達をかき集め、タケミカヅチの刀身を中心に収束させる。某魔

砲少女（白い悪魔）の嫁のことく魔力刃を発生させたり放電現象でさえ引き起こせてはいないが、強力な雷を刀身に内包させる魔法だ。私に合わせて迫ってきたオーク鬼達に、私は肌が触れるほど懐まで潜り込むとタケミカヅチで薙ぎ払った。

「「「ブギュアアア！？」」

さらに一步踏み込み、刃を返して逆袈裟に別のオーク鬼を切断する。そのままの勢いを保ったまま、今度は上段からの振り下ろし。私が剣を振りぬくと断末魔を上げ、高電圧を纏わせた刃で切られた肉の断面が焼け爛れながら異臭を放ち、オーク鬼達は絶命していつた。

「まず、三……！」

「きやああーー！」

「ルイズ！」

「ツー？」

自身の背後、誰もいないと思っていた後ろから縄を裂いた様な悲鳴が上がった。

私は、まだまだ未熟だと違う事を忘れていた。

本来は生態三次元レーダーとして機能するはずだった蒼い第三の眼

天宙眼は、命の遣り取りを行う実戦の空氣に呑まれその真価を發揮できない。さらに私は、まだ一人が逃げ出していい事に気を回す事ができず、数匹のオーク鬼に後ろに回られてしまうと言う失態まで犯していくのだ。

後ろを向いた眼に映つたのは、オーク鬼に襲われているルイズ達のだった。それは振り下ろされる凶刃と、それをルイズが姫様を庇う形で紙一重で回避する事が出来ていた二人の姿だった。

一人が地面に倒れ、オーク鬼が再びナタを振り上げる。

サ、セ、ル、カアアアアー！！

「はああツー！」

ブオーンッ！！

オーク鬼が一度目の攻撃を開始する前に、私は斧形態に変形させ

たタケミカヅチをオーク鬼に向かつて投げ飛ばし、

ザシユツ！！

そして、寸分違わずオーク鬼の胸板に突き刺さった。瞬動でそのオーク鬼に取り付くと、タケミカヅチを引き抜きダメ押しにさらに力一杯にタケミカヅチで殴り飛ばす。

グシャっと肉と骨の潰れる様な音と共に、眼前のオーク鬼が真つ二つに潰れた。さらに返す刃で、今し方叩き潰したオーク鬼の後ろから出てきたもう一体を葬る。

コレで五つ！

残存するオーク鬼はおそらく後は五匹。振り向くと、その全部が木々の生い茂る森から障害物の少ないこの広場に現れていた。もう二人に一步たりとも近づけさせない！

「ソード・オブ・ガーディアン」！ “ダンシング・エッジ”！

私の声に呼応して、月衣格納されていた12本の長剣達が姿を現す。

それらの長剣は、一瞬その場に留まると半数が急上昇し、残る半数は複雑な軌跡を描きながらオーク鬼達に迫つていった。

“念力”や“レビテーション”と言ったモノを浮かしたり動かしたりする魔法がある。“ダンシング・エッジ”はその応用魔法で、某機動戦士シリーズで花形装備となつてているファンネルレンジアタックを模範した全方位から剣による斬撃。未だ完成の域には程遠く、複雑な障害物のある森の中の対象には使用したくなかった。だが、敵が全て何も無い広い空間に出て来てくれたので容赦なく使用してやろう。この機動を、お前たちは見切れるか！？

「ピュギュアアアアー！？」

「ヒヤギュアアアー！？」

「ピュウウウウアー！？」

前後左右、さらに上から迫つてくる長剣に突き刺され、オーク鬼

達は次々と絶命していく。だが一匹だけ、剣が急所に当たらなかつたのか、私たちに向かつて襲い掛かつてくる傷だらけのオーク鬼がいた。

「……」

私は、静かに剣を手前に引き、構えた。

最後の一匹。生き残つた者に敬意を評し、全力をもつてこれを葬ろつ。

「タケミカヅチ、安全装置解除。バーストモード・セット」

音声認識など組み込んではいない。だが、これはこれから何をするかを自らに言い聞かせる為のモノ。モノに力を宿す為の、言靈だ。ガシヤ！

タケミカヅチが斧から剣に変形し、さらに斧の刃の部分が持ち上がり内部機構を露出させた。

そして、内蔵させた機関が風石が力を解放させはじめ、凄まじい風の力が今か今かと解き放たれる瞬間を待ちわびて唸り声を上げた。だが、まだだ。

まだ。

まだ……今！！

「はあああ！！！」

そして、迫り来るオーク鬼に向けタケミカヅチを突き刺し、内包させた力を開放した。

・・・・・

結果だけ言おう。

最後のオーク鬼は、断末魔を上げる事も出来ずに絶命した。

悲鳴など上げたくても上げられなかつただろつ。何せ、一瞬でひき肉よりも酷い状態になつて消し飛んだんだから……。

タケミカヅチの特殊機構、名を雷撃砲。

風石の力を瞬間的に解放し、スクウェアクラス級の雷を強制的に発生させ、対象に突き刺さつた刀身部から対象内部へとその力を解放する一撃必殺の零距離砲撃。本来は、強固な外殻を持つ竜種などを対象として取り付けていたものだ。しかも一発撃つ度に風石の力一トライシジを取り替える必要まである。

私は、ソード・オブ・ガーディアン達を集結させると周囲の警戒をした。まだ、オーク鬼達が潜んでいるかもしれないからだ。すると、

「姫様ー！」

あの声は……、たぶん捜索隊の人達だらう。林道の方を見ると、グリフオンに乗つた魔法衛士やらメイドちゃんやら色々とやつて来ていたのが見えた。

私は一人に向き直ると　心なしか私を見て怯えているようにも見えてしまつた　ゆっくりと微笑んで、

「ルイズお姉さま、それに姫さま、もうだいじょつ……ッ…？」

安心した瞬間、私は激しい吐き気に襲われ……。そして、胃の中身を吐き戻しながら、私の意識は暗転していった。

楽しく転生11（後書き）

このS.S.Iで、初の戦闘でした。

例えどんなに強力な防御手段を持つても、強力な攻撃手段を持つていても、新参兵が恐慌状態になつて硬直する事だつてあります。他のS.S.Iだと、何の抵抗もなく戦闘を始めちゃう事が多いですが……。やはり口コロはネタの使いどころ。有効に使いましょう。

オリ主が、5歳程度の子供ではありえないような動きをしています……。仕様です。

動け動け～～咆哮。新世纪よりエヴァ 初号機の暴走シング君だつて、最初の出撃は暴れました（笑）。

蒼い第三の瞳 天宙眼は、完全に空氣化してました（すんません）。

オリ主は、機関砲すら跳ね返す砂漠の傭兵（パンツァーアーマント）や巨大毒蜘蛛がウジヤウジヤいるロクゴウ砂漠ではなく、極々安全で快適なヴァリエール家で育ちました。

なので、火乃香（18歳）の様に十分に鍛えられていなかつたのが、今回の失敗の原因です。

あれだけ無双な彼女も、幼少期はトカゲにやられそうになりましたしね。

ファンネル、誰もが考えるであろう変体兵器（まつり）

元ネタはガンダムですが、白兵戦専用なので、00のファンネルと言つべきでしょうか？

仕様武器名は、ソード・オブ・ガーディアン（守護者の剣）。一本で一組の長剣です。元ネタは特になし。

魔法の名称は、ダンシング・エッジ（踊る刃）。名称は、FFXIより短剣のWS、ダンシング・エッジ。

タケミカヅチの特殊機構、雷撃砲。

モンハンの属性開放が取り付けられなかつたので、この様な武装を装備させました。風石を触媒に強力な雷撃を対象の体内で爆発させる、と言つシロモノです。一発撃つのに風石カートリッジを一發使い、リロードは手動操作です。

とうとうPVが十万、ユニークが一万を超えるました！
これも皆様のおかげです。ありがとうございました！

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら「」指
摘ください。

楽しく転生1-2（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SNSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと書つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

一週間ぶりの投稿です。間を空けすぎてしまません。

楽しく転生12

*

Another side

「姫さま！」「無事ですか！？」

「あ、あ、あ……私は、大丈夫です。

それよりも、ルイズが！ ルーティアが！！」

「姫様、落ち着いてください。

お二方は大丈夫です。さあ、私達と一緒に早くココから離れませんと」

「イヤ！ 私より、ルイズとルーティアを！」

「それは成りません！ 私たちは姫様の身を第一に保護せよとのお達しを受けております。

大丈夫です、彼女達は他の隊員が必ずお連れします。
ですからご安心して、屋敷にお戻りください」

「……判つたわ……ヒグ、ヒッグ……」

「……よし、姫様をお連れしろ」

「「はツ！」」

「……それにしても、おい！ ルイズ嬢とルーティア嬢は大丈夫か！？」

「はい！ ルイズお嬢様は気絶なさっているだけで、目立った外傷は見当たりません！」

「こちらも同じです！ 気絶しているだけで外傷はありません。ただ、オーク鬼の返り血が酷くて……」

「詮索は後だ！ 早くお二人を運ぶぞ！」

「隊長！ この沢山の剣はどうしますか？」

「……とりあえず全部拾つておけ！」

「はー！」

Another side out

*

氣だるげな臉を持ち上げ、私が見詰めた先には、

「……知らない天じよ」

『僕のセリフをとらないでよー』

……今一瞬、どこか虚めてオーラ全開の少年の悲痛な叫びを受信した気がしましたが……。まあ、氣のせいでしょう。

「ル、ルーティアお嬢様が眼を覚ました！！」

ん？？

なんだか慌しく部屋を飛び出していったメイドさんがいた様ないなかつた様な……。その後直ぐ、ドタドタと誰かが走つて來た。

「ルーティアーー！」

その声は……お父様？

なんだか、とても氣だるい体に無理やり力を込めて起き上がると、
「ルーティア、身体の方は大丈夫なのか？

もし、何か異常があるようなら……」

「……うーん、なんだか妙に氣だるいです」

その他は……うん、氣を通してみたけど身体に異常はありません。ただ、少々氣だるい……倦怠感と言つのでしょうか、それだけです。

「そうか……」

「お父様！ ルーティアの意識が戻つたって本当ですか！？」

エレオノール姉さま？ それにちい姉様とお母様も、

「えつと……、どうなさつたんでしょうか？」

はて、何で皆勢ぞろいなんでしょうか？

「どうなさつたじやありません！ そんな馬鹿な事を言つのはこの口ですかバカルー！」

アンタが一体どれだけ心配をかけたか……

「やめないかエレオノール！」

「でも！ この大バカには……オーク鬼に襲われて、のん気に一週間も眠り続けて、どれだけ私達を心配させたと思ってるのよ！…！」

スパンッ！

頬がジーンと痛む。エレオノール姉さまが、両目に涙を貯めながら、指を揃えた手の平を振りぬいていた。

ふざけないでと、エレオノール姉さまがもう一度私を叩こうとするが、それはお父様に止められていた。

……オーク、鬼？ ……ツ！？

「ル、ルイズお姉さまは！？ アンリエッタ様は！？」

そうです、私はルイズとアンリエッタ姫様を守るためにオーク鬼と戦つて……。そして、突然気分が悪くなつて氣を失つてしまつた。あの後どうなつた？ オーク鬼は全部倒せたのか？ 二人は無傷だったのか？ 助けは直ぐに来たのか？ 記憶が曖昧で思い出せない。私はベッドから飛び出そうとするが、身体が鉛の様に重い。それでも身体を引きずつてベッドから出ようとすると、お父様に止められました。

「ルーティア、先ずは落ち着きなさい。

二人とも怪我一つ無い、大丈夫だ」

「ほ、本当ですか？」

お父様は、私を安心させるために一ヶ「コ」と肯ってくれた。

「じゃあ、一人に……」

「今は一人ともそろぞれの自室で謹慎中だ。会う事は出来ないんだよルーティア」

会えないじゃなくて、会う事が出来ない？ 私は嫌な予感がしてならず、顔を青くしてお父様に詰め寄つた。

「会う事が出来ないって……お父様、本当に一人は無事なんですか？」

まさか、取り返しのつかない怪我を……もしゃ死……！？」

「落ち着いてちいさなルーティア。一人とも本当に大丈夫よ？」

ただ、いろんな事情があつて一人に会う事が出来ないの」

「事情、ですか？」

「ええ。アンリエッタちゃんは、お城の人達が一人と会わせたくないって言つて会う事が出来ないの」

……お城の人達。なるほど、おそらく反ヴァリエール派とか、私達にこれ以上王家と親密になつて力を持つて欲しくない人達が邪魔しているのですね？

「それでね、ルイズの事なんだけど……ちょっと言いつらう事があつて」

「言いつらう事？」

言いつらう事つて何でしょうか？？

「うん、それは……」

「ルーティア」

するとちい姉様の言葉を遮る様に、今まで一言も言葉を発していなかつたお母様が口を開いた。

「は、はい！」

「まず、何よりもアナタは私たちに言つべき事があるのでなくて

？」

母さんの厳しい視線、私は、

「……心配をかけて、申し訳ありませんでした」

私は頭を垂れて、謝った。誰に、ではなく。この場に集まつた全員に向かつて。

「……アナタには、言いたい事も、聴きたい事が山ほどあります。ですが……」

「厳しい表情のまま、お母様はそつと私の寝てゐるベッドに座ると、「アナタも無事でよかつた」

お母様は、私を力一杯抱きしめた。

「お、お母様！？」

いきなりなのでビックリしました。……そう言えれば、こいつの風にお母様に抱きしめもらつたのはいつ以来でしょう？　この歳の子供でこんな事を思えてしまつて、やっぱりヴァリエール家の教育環境は異常なんでしょうか？

「気分は？」

「はい、大丈夫です」

「もう、立ち上がりなさい？」

「はい……とつとー？」

お母様に言われ、ベッドから抜け出して床に立とうとしたが、急にクラシと眩暈に襲われた。ヤバイと思つて踏ん張つてみるけど、ダメ……ん？

「お、かあさま？」

いつの間にか、私の側までやつて來ていたお母様が倒れそうになつていて私を支えてくれていた。

「無理は、しなくて良いのですよ？」

アナタは病み上がりのような身体なのですか？

……クラン

「はい、何でしようか奥様？」

お母様に呼ばれて、外で待機していたクランさんが部屋中に入ってきた。

「何か暖かい飲み物、それに軽く抓める物を用意しなさい」

「はい、畏まりました奥様。少々お待ちください」

クランはそう言つと、一礼をして部屋から出て行つた。そしてしばらくすると、人数分の紅茶とお菓子、それから私のためにスープをカートに乗せて戻ってきた。

「どうぞ、ルーティアお嬢様」

「まずは食べる事、何をするにしても空腹では始められませんからね」

・・・・・

お母様やエレオノール姉様、それにお父様やちい姉様の視線が痛いです。いや、痛いの意味が違うのでなんと言えばいいか……。とにかく、そんなに見られるトテモトテモ食べにくいです。
とにかく、私はクランが用意してくれたスープを食べて……いつの間にか気づいたら鍋を空にしていました。空腹には敵いません。

「お、落ち着きましたかルーティア？」

お母様が少し引いています。なんだか珍しいモノを見れた気がして役得（？）です。

そう言えば……このまま今までの日常復帰していいのでしょうか？ やっぱり、このまま何も無かつた事で済ませてしまつものいけない気がします。

「……お母様」

「なにかしら、ルーティア？」

「……今回の件、私は何から話すべきなのでしょうか？」

空になつた皿とスプーンをクランに渡すと、私はお母様を真っ直ぐと見据えて聞いた。正直に言つと怖すぎて心臓に悪い。

「そうですね」

そう一拍置くと、お母様はティーカップを置く。

「ルーティア、アナタが話せる範囲でかまいません。

あの日、何があつたのか詳しく説明しなさい」

私が話せる範囲……、

「ですが、嘘偽りは許しませんよ？ それだけは心しなさい」

「……はい、判りましたお母様」

私が今話せる事、何処まで話していいか正直に言つと判断に困つた。だけど、それでも私は“家族”に話せる事を探してユックリと話していく。

「まずあの日、私達は三人で屋敷を抜け出しました。どの様にして抜け出したのか……その手段を今言つ事はできません」

「な！？ バカルー、アナタ！？」

「エレオノール黙りなさい。……かまいませんルーティア、続けなさい」

「はい、そして屋敷を出た私達は……」

それから森に目印の毛糸を結びながら進んだ事、途中の休憩所で休んでいるとオーク鬼に襲われ、私がタケミカヅチとソード・オブ・ガーディアンを使ってどの様に倒したのかを説明した。

エレオノールお姉さんは終始眉を顰めていましたが、私が使う聞きなれない単語とオーク鬼との戦闘に、

「タケミカヅチ？ ソード・オブ・ガーディアン？

アンタみたいな細腕で、どうやつたら剣でオーク鬼を十体も倒せるって言つのよ！ 嘘を言つにしてももつとまともな嘘を言いなさい！」

と、食いかかつてきました。

こういう場合は、実物を見せた方が説明しやすい。私は、月衣からソード・オブ・ガーディアンを呼び出し……そう言えばあの時、どの剣も月衣の中にしまつていませんでした。

うん不味い。基本的に、剣は平民の使う武器で魔法衛士隊の誰かが回収してくれている可能性は低い。最悪オーク鬼の持つ

ていた武器として処分された可能性もある。私がそう思つてはいるが、ルーティアお嬢様、ご安心ください。すでに両者とも回収が済んで、こちらに……」

クランさんが、カラカラと 機械仕掛けの剣斧、タケミカヅチと十一本一組の剣、ソード・オブ・ガーディアン、合計十三本の剣を立てかけた台車を押して部屋に入つてきました。

「オーケー鬼の返り血が酷かつたので、一旦分解洗浄を行いました。お確かめください」

「おー、さすがクランさん。良い仕事です、気が利きますね。」

私は、早速一番手前にあつた私の身の丈よりも大きなタケミカヅチを片手で軽々と持ち上げた。そして、ひっくり返したり刃の部分を見て刃こぼれをしていなのを確認し、

「ガツジヤ！ ガツシャン！！ ガツキン！！」

うん、変形動作も問題無し。って、あれ？

「「「「……」「」」

その場にいた（クランさんを除く）全員が、私を見て驚いた様に口を開いていました。……エレオノール姉さま、ちょっとアホっぽいですよ？

「ちょ、ルーティア！？」色々言いたい事があるけど、まずなんなのよそれ！？」

「先ほど説明した機械剣斧“タケミカヅチ”ですよ？」

まあ、エレオノールお姉さまが驚くのも無理はありません。この世界でも（もちろん地球でも）この様なカラクリが仕込まれた剣は無いでしょう。エレオノール姉様はマジマジとタケミカヅチを見ていきます。すると、

「これは、斧と剣を両立させた武器？」

「はい、重心を先端に集中させる事で集中した重さで対象を磨り潰す斧の形態。

刀身を一方向に集中させ、重心を手元に落とす事で素早い斬撃を繰り出す為の剣の形態。

この両者を両立させた武器です、「

バーストモードの説明は省きます。あの機構を説明するのは別の意味で厄介な事になると思うので。

エレオノール姉さまは私の説明とタケミカヅチを物珍しそうに見詰めて、ある事に気がついた様にこちらを向くと、

「ねえ、ルー……コレだけの量の剣を全部持つてたの？」

そう言つて、お姉さまが危なげにソードの一本を手に取ります。確かに、それも気になりますよね？ この世界の刀剣は主に重さで叩き切る直剣、ソードの長さが私との身の丈と殆ど同じ（約80センチ）なので一本辺り約2kgだと思します。それが十一本、合計で24kg さらにタケミカヅチの重さはソードの数倍、約10kgだと思います。全部合わせるとだいたい子供一人分、コレを子供が全部持ち歩いていた何て言つても信じられないですね……、「はい、実家を出る時からこれらの剣を全て、常に持っていました」「嘘おつしゃい。こんなに沢山、どうやって隠し持っていたって言うのよ？ そんな事できつこないわ！」

「……出来ない。

無理。

不可能。

そんな言葉を並べるだけでは、“魔法使い”とは言えませんよエレオノール姉さま？

そう言つて、私はタケミカヅチを待機形態に戻すと、そのまま皆の前で空中に 月衣の中に収納してみせた。

それを見て、またもエレオノール姉様が驚いた声を上げる。さらに私は、ソード・オブ・ガーディアンを浮遊させ翼の様に広げると、コレもまた皆の前で月衣の中に収納していった。

「……今お見せしたとおり、この様にして全ての剣を持ち運んでいますエレオノール姉さま」

月衣の中に消えてしまった剣を触ろうと、消えた辺りを手探りしているエレオノール姉様。そんな事をしても月衣の中には手を入れ

られませんよ？

「ル、ルーティア、一体どこに隠したの？ 正直に答えなさい」

「どこ、ではありません。ココにあるんです」

それから、タケミカヅチとソード・オブ・ガーディアンの出し入れを数回行つてみせた。エレオノールお姉さまはどうやつているのか判らず、杖を取り出してディテクトマジックをかけてみる。が、ダンシングエッジの魔力は分かっても、月衣の存在は探知できないようだつた。最終的にお父様とお母様も杖を取り出してディテクトマジックをかけた。それでも結果は変わりませんでしたが、

「ルーティア、これは一体？」

さすがのお父様も驚いています。お母様もすこし顔が引きつっている気がします。

「上手く説明は出来ませんが、この力は結界の一種です」

「結界？ 風や土、火や水の魔法で作る防御の事か？」

「……一般的なメイジが使つてている結界と読んでいるモノは、先ほどお父様があつしゃつたとおりの防御に使われるものです。

ですが、私が身に纏つてている結果は少し特殊で……発動させる必要がなく、常に身に纏っています。そして、今し方見せた様にモノを収納する能力を持つています」

「い、いろいろと、疲れたわ……」

エレオノール姉さまは、すっかり冷めてしまった紅茶を一口で飲み干すとそう呟いてソファーに腰を沈めた。お父様もお母様も同じようにソファーに腰を下ろし、とても疲れたようにしている。

やっぱり自分の娘が訳の分からぬ力を持っていたなんて、実際に田の当たりにしても信じきれないし、受け入れ切れない事態ですよね……。

「ルーティアちゃんは、とっても便利なクローゼットを持っているのね

ちいねえさまは、けつこう柔軟な頭をしているようです。でも、クローゼットですか……あながち間違いでもありません。ある少女は月衣を冷蔵庫か食糧庫にしていましたし、私の場合も半分は物置の様な状態だし。

「大体のことは分かりましたルーティア。

ですが、なぜ今まで家族である私たちにですら黙っていたのですか？」

「……他人と違う力は、奇異の目を向けられます。

そして、この様に理解できない力は教会から異端として見られるかも知れません。

そうした場合、私に関わった全ての人々が不幸になると考えましたお母様」

私が言つた事に、一瞬だがお母様の眉が動く。だが直ぐにそれも消え、

「そんな事はさせません、アナタは私達の娘です」

「大丈夫よルー、そんな心配なんてしなくていいのよ」

「そうね、ちいさいくせにマセタ事考えてるんじゃないわよ、ちびルー」

私は、それを聞いて顔を崩した。もちろん、皆がそう言つてくれると信じて教えたんですけど……。やつぱりそう言つてももらえると、とても嬉しいです。

私のこの力については、私が教えても良いと言う人意外には誰にも言わないという事で取り決められました。こう言つ事はお母様が徹底してくれるので、余計な心配をする必要はありません。

「今日は、もう終わりにしよう。ルーティアも疲れただろう?」

お父様がそう言つて立ち上がる。

たしかに、私もずっと話しつぱなしで少し疲れてしまいました。

それに、私の事情をそれぞれの中で消化する時間も必要です。

……やつには、ルイズお姉さまはこいつたいがりしたんでしょ？

か？

楽しく転生1-2（後書き）

今回は、ルーティアが自分の異能を家族に教える話でした。

こいついうイベントは、本来かなり後に入れて一悶着起こすのが定番ですが、このSSでは今後オリ主が動きやすくなるようにこのタイミングで明かしてしまいます。

娘に甘いルイズパパや、ああ見えて結構子供思いなカリーヌさんなら、幼少期のうちに異能持ちであると教えた方が後々プラスになると考えました。

ついでに、エレオノールさんも自分の妹を実験台にするとか言い出す前の段階で認知して欲しかったのでこいつしました。

しかし、会話メインの話は疲れます。

遅れた理由ですが、ストックしていた作品の内容が気に入らなくなつたので、大幅に加筆修正をしていました。

会話の内容とか演出とか、色々と無理があつたんですね。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたらぜひ指摘ください。

感想も待っています。どしどしお願いします。

楽しく転生～（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

楽しく転生13

「それでは、ルーティアも疲れただろうし、我々も休むとしよう」
お父様がそう言って立ち上がり、他の皆もそれに賛同する。たしかに、あれからずっと話しつぱなしで少し疲れてしまった。

そして皆が部屋を出て行く中、ふと気になる事を思い出しました。

「そう言えば、ルイズお姉さまはどうされましたか？」

私の発言に場が一瞬凍る。だけど、ちいねえさま達はそんなのは気のせいだと呟つ風に装つて、

「ルイズは……」

「ルイズは今、別室で謹慎中です。

しばらくの間、遊ぶ事を忘れたいほど勉強をするのだと自ら申し出たので、そのようにしています」

「そうなんですか……。遊ぶ事を忘れたって、ハッキリ言つてこの歳の子供では異常ですが、それなら仕方ありません。

「解りました。それではお休みなさい」

明日の朝食にでも、ルイズお姉さまの顔を見れるといいなあ。

そう思いながら、私はまどろみに沈んでいった。

でも、なんだか胸の奥でモヤモヤとした気分の悪くなる様なモノが渦巻いている気がした。

*

Another side

「私は、無力ですね……。実の娘達に何一つしてあげられない。

アナタ、私は母親失格なのでしょうか？」

「……いや、そんな事はないさ。

それよりも、早くルイズを説得しないと……」

「ごめんなさい、私は行けません。

私が行つても、ルイズに手を上げる事しかやり方が分からないので……」

「分かつた……。カリーヌや、氣を落とさないでくれ。誰にだつて不得意な事はあるさ」

「ええ……。そう言つてくれると助かります」

Another side out

*

次の日、目を覚ました私は、直ぐに寝間着から普段着に着替えると食堂に向かつた。

ここは王都の別宅。私自身、ここを使った事がなかつたので道に迷いそうになりましたが、蒼い天亩眼の力でちいねえさま達が集まつている場所を特定し、その場所に向かいました。うん、しかもルイズお姉さまも一緒にいます。

私は、弾む気持ちを抑えながら歩みを進めました。……でも、何でしょう？　さつきからモヤモヤとしたやな感じがします。

「ルイズ、いい加減にしてここから出てきなさい！

ルーティアが目を覚ましたんだから、顔くらい出して上げなさい！」

おや？　皆が集まつているから食堂だと思っていましたが、……これは廊下です。

……なんだか、いやな予感がします。

「イヤ！ ルーなんかと顔も合わせたくない……」

「つー？ ルイズお姉さま……」

「ルーティア！？ も、もう起きて大丈夫なのか？」

お父様たちが、私の身体の事を心配して声をかけてきます。ですが、私はそれに一切耳を傾ける事なくルイズお姉さまのいる部屋のドアの前に立つた。

「ルイズお姉さま、ルーティアです！ このドアを開けてください……！」

「……」

返答は無言。何の声も返っては来ない。

ギイイ……。

そして、コックリと僅かに飽いたドアからルイズが顔を出した。私は、嬉しくなって一步前に出ようとして、その足を止めた。ドアから顔を覗かせているルイズの表情はとても険しく、まるで憎むべき敵を見ているよな目を私に向けていた。私は、ルイズお姉さまが発する気に足を止めてしまったのだ。

「ねえ、ルー。

なんでルーは魔法使えないふり、してたの？」

そしてルイズが、誰も聞かなかつた魔法を使えない振りをしていた理由を聞いてきた。

私は、

「……」

それに答えられなかつた。

ただ、ルイズにこれ以上魔法が使えない事に苦しんでほしくなかつた。ただ、それだけが理由なのに……。

「キライ、ルーなんてダイツキライ！」

ルイズはそう言つと、私を突き飛ばして再び部屋の中に戻つていった。バタンと、ルイズお姉さまによつて閉められたドアがまるで今生の別れを告げる音の様に私は聞こえた……。

ペタンと、私は成す術もない様に廊下に倒れ、そのまま崩れ落ちた。

「ポタポタと、何かが零れ落ちています。これは何？」

「…………」

「ルーティア、ルイズの事は……」

お母様にお父様、それにお姉さま方が何かを言っていますが……

私の耳には何を言っているのか入ってきません。

ただ私の中では、

キライ。

ダイツキライ。

ルイズの言葉が、終わる事無く木靈していた。

その後、私はクランさん他メイドさん達に運ばれ、気がつくとベッドの上でました。そして、私は美味しいのか不味いのか解らなくなつた食事を胃に流し込むと、意識は次第に闇に沈んでいきました。

Another side

「コラ！ いい加減に開けなさいおちび！！！」

もう何度も口が解らない。このバカを部屋から出す為に何度も説得したが、結局私達は間に合わなかつた。

「あーもう！」

私は、杖を抜いてドアを破壊しようとする。だけど、カトレアがそれはダメだと止めてくる。

「それじゃ、ダメなの。そんな事をして、ルイズちゃん達の為にはならないわ」

分かつてゐる。分かつてゐるけど……、

「それでもねカトレア、無理やりにでも引っ張り出して顔を付き合わせないと分からぬ事もあるのよ！」

杖を抜き、硬く閉じたドアを無理やりにこじ開ける。さあ、あのバカには……！？

「い、いない！？」

「なんで？ つ！？ 窓が開いてる！」

「外に出ちゃったみたいね」

「のん気な事言つてないの！？」

カトリアは、お母様とお父様に連絡して！ 私は一足先にルイズを探しに行くから！」

「分かつたわ」

まつたく世話が焼ける妹ね！… 变などころに行く前に捕まえないと……、

「と、そのアナタ、口々をピンクの髪の貴族の子供が通らなかつ…… ジヤン坊や？」

「？ エ、エレオノール姉さんじやないですか！ 久しぶりですねグリフォンに乗つっていた衛士がいたから声をかけて見たけど、まさかジヤン坊やだとは思つても見なかつたわ。

「ええ……、そう言えば魔法衛士隊に入つたって聞いたわね？」

「はい、自分に適正があつたのか、グリフォンが懐いてくれましたので先週から見習いをやつっています」

「グリフォンねえ…… そうだわ！」

「ジヤン、ちょっと借りるわよ」

「は？」

呆けてないで、邪魔よ！…

私は、ジヤン坊やをグリフォンから引き釣り下ろすと、乗馬の要領でグリフォンに跨つた。

「ぐ、大人しくしなさい！…」

グリ！… 急に暴れだしたので、首根っこを思いつきりひねつてやつた。そしたら一気に静かになり従順になる。そ、それでいいのよ！…

「私の言う事を聞きなさい、良いわね？」

「ちょ、こまります！私はこの辺りの警邏を……」

「アナタの婚約者が行方不明なのよ？そんな事言つてないで探すのを手伝いなさい！」

「ルイズが！？……それならグリフロンから引き釣り下ろしたりしないでください！僕もお供しますから！！」

「ああ、こんなにでつかい手形まで作つて……大丈夫かい？」

「さつさと行く！！」

……あの娘、変なところに入つて取り返しの付かない事になつてなきやいいんだけど」

Another side out

*

なんだか、外が騒がしい。

私は、ぼんやりとする頭を搔さぶりながら起き上がつた。

……いつの間にか、眠つてしまつていたようですね。

頬が妙に力サつく感じがする。手を当てて見ると、パリパリとしていました。

……そつか、私は、ルイズに『キライ』って言われて……泣いたんだ。

そう思つていると、ガチャリとドアが開いた。

「目を覚ましたかルー・ティアお嬢様？」

「クラン？ アナタ、まさかずっと？」

クランは静かに頷いた。

「はい、お嬢様が泣き疲れて眠られてからずつと。

もうお昼を過ぎましたが、何か口になさりますか？」

「……いえ、それよりもルイズお姉さまは？」

クランは、なにか言いづらそうに首を横に向けると、

「現在、ルイズお嬢様は行方不明です」

な……！？

「どういう事ですか！？」

「それは……」

「理由の説明は後です！」

それよりも、ルイズお姉さまがいなくなつてどれ位経つたのですか！？」

「今朝、お嬢様と会われて直ぐに……」

「そんなに！？」

それから、お父様とお母様それにエレオノール姉様達が捜索しているが、いまだルイズお姉さまを発見できていないとクランから説明を受けた。

おかしい。ルイズお姉さまがいなくなつて、お母様達は直ぐに捜索を開始したと聞いた。子供の足では、貴族の別宅の並ぶこの一等地区画から別の区画に行くにしても相当な時間がかかるはずだ。例え短期間で抜けたとしても、その後、治安の悪い区画までまだかなりの距離がある。その間にお母様方が見つけられないわけがない。

「……胸騒ぎがします」

そう、とても嫌なモヤモヤとした感じがします。

「なんじょう……？」

そう、もうお姉さまと会えなくなる様な……、

「つ！？」

そんな事、絶対に認めない！！ 私は、左手のAIN・ソフ・オウルを見詰めた。

「クラン、私もルイズお姉さまを探しに行きます」

「でわ、私も供します」

「いえ、クランはちいねえさまと一緒に残つていてください。帰つてきたら、美味しいご飯が食べたいので」

私はそう言うと、AIN・ソフ・オウルを開いた。

そして、

「私の光よ……」

Another side

「エグツ！ ヒグツ！」

私は、どこか分からぬ場所を歩いていた。
ううん、ココが何処なのかは知つてゐる。

「ココは、王都の別宅だ。

だけど、誰にも会うことが出来ない。
「ねえ、誰かいの？」

どのドアを開けても、誰もいない。

ちい姉様もエレオノール姉様も……。
お父様もお母様も……。

そして、ルーティアも……。

まるで、はじめから誰もいなかつた様な屋敷……。そこまで考へて、私は体の震えが止まらなくなつた。

怖い、怖いよ！

誰もいなかつた。それが怖いのだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！」

家族なんていなくなれば良いなんて思つたりして「ごめんなさい！」

「憎かつた訳じやないの。ただ、許せなかつただけ……。

使えない振りしていたルーが、許せなかつただけなの」

なんで、私は魔法が使えないの？

なんで、お母様は私に優しくしてくれないの？

なんで、お母様はルーにあんな優しい目をするの？

「優しくしてくれたルーが、許せなかつたの。

優しくされる資格のない私が、許せなかつたの……！」

優しくしてくれないお母様から、ルーはいつも私を守ってくれた。
そして、私に懐いてくれた。慕つてくれた。

でも……、

「なんで、嘘ついてたのよお……」

嘘をつかれたのが、ショックだつた。

あんなに綺麗なルー笑顔が、私を嘲り笑つているように見えてしまつた。

だからか、私は『嘘、消えてしまえ』と願つてしまつた。

「……ルイズお姉さま！」

そして、一番聞きたかった。それでいて、一番聞きたくなかった人の声が聞こえた気がした。

Another side out

そこは、隔離世。現世の世界と隔絶された場所……。

「……ルイズお姉さま！」

“希望の宝玉”的力で、ルイズお姉さまの場所に赴いた私が見たのは、床に蹲り恐怖に震えているルイズお姉さまでした。

「ルイズお姉さま！」

ルイズお姉さまの肩を両手で掴み、搖さぶる。だけど。ルイズお姉さまは私の手を振りほどくと再び蹲り、

「ルーなんかと顔を合わせたくない！」

拒絶される。

それでも私は、ルイズお姉さまの肩に手を伸ばし、

「ルイズお姉さま……」

「離して……」

ルイズお姉さまを揺さぶる。

「ルイズお姉さま！」

お願いです、こっちを見てください！

そんな私の願いが通じたのか、ルイズお姉さまが顔をコックリと持ち上げて私を……虚ろになつた薺色の目で見つめてきます。

「……なによ、嘘付き」

「う……、

「……確かに、私は魔法の才能を偽つていましいた」

「なんで？」

「それは……」

「私を影でバカにするため？ いつつも私の魔法が爆発する私を見て」

「それは違います！」

違います！ そんなつもりはありません！

「じゃあなんでよ!? なんでだましてたのよ!-!-」

ルイズお姉さまの言葉に、私の喉の奥はカラカラに乾いていく気がします。言うべき答えは、分かっている。でも言えない。言える訳がない。

真実を教えてしまえば、ルイズお姉さまに待つているのは、二度と心から笑う事の出来なくなる未来。ただの珍しい系統で済ませられない“力”だ。

「……あの笑顔も、全部嘘だつたのルー？」

「つ！？ 違います！」

私が、魔法を使えないように装つていた理由は……。

……ルイズお姉さまが『妹に見本を見せて上げられない姉』と呼ばれないようにするためです

それが、私が今出せる精一杯の答え。原初の思い、一人で辛い思いをして欲しくない。

ギリッと、まだ生えそろつたばかりの歯を軋ませながら、ルイズは私を睨みつけてくる。そして、

「ふざけないでよ！　なによ！　なによ！　なによ！　なによ！」

いきなり立ち上がると、ルイズは私を叩きだした。

「なにが、『妹に見本を見せて上げられない姉』よ…　ふざけた事、言つてんじやないわよ！」

イタイ！　イタイ！

……ただ我武者羅に振り回すだけ、ただそれだけの拳は私を何度も叩いてくる。でも、私はただただ身を折りたたみ、ルイズお姉さまに謝る事しかできない。

そして、私を叩いていたルイズお姉さまは、拳を振り上げるだけの力も無くなり、とうとうその場で泣き出しちゃった。

「ルーティアのバカアアア！！！」

「はい、わたしはバカです……お姉さまを助けようとして、逆に傷つけてしまう愚か者です」

泣き崩れるルイズお姉さまを、私も泣きながら抱きしめた。

楽しく転生1-3（後書き）

皆様、大変長らくお待たせしました oren
前回の更新からもう半月近くもたつていきましたね……。

今回も会話がメインの話でした。
タイトルに楽しく♪と、書いているのに主人公達は泣いてばつかりです。

本当はこの話でルイズと仲直りさせる予定でしたが……。気づいたらいつもの倍以上の内容になっていたので、内容を半分に切りました。ですのでもう一話ほどルイズとの和解イベントが続きます。
ごめんなさい oren

本当は、会話だけじゃなくてバトルも考えていましたが……安直過ぎると考へてこうしました。
次の話は、比較的早く出せるかと……。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたら、指摘ください。
感想もお待ちしております。

楽しく転生14（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云ひ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

そろそろ、オリ主の周囲がチート力を持ち始めます。
手始めは……。

楽しく転生14

「……落ち着いたかしら2人とも？」

！？

「ちい姉様？？」

私達が泣き疲れ、落ち着いたところでちい姉様がそつと私たちを抱きしめてくれた。

いつの間に……と言つより、どうやつて口に来たんですか？？

「ふふふ、いつの間にかココに来ちゃつてたの」

いつの間について、ありえませんよ？？ 口は、あつちとは隔離された世界。いわば異世界です。生半可な迷子スキルでは迷い込めないような場所なのに……。

「ちい姉様、その手！？」

ルイズが、カトレアお姉さまの手の平を見て顔色を変える。私もその手の平を見て見ると、お姉さまの手の平は爪が深く食い込んだのか所々から血を滲ませていた。

「大丈夫よ、コレくらいなら薬を塗つておけば直ぐに治るから」

いつたい、いつから私たちの事を見ていてくれたのだろう。その手は、ナニ力を堪えて傷ついたように見えました。

私は、そつと左手を傷ついた手に添えると、“慈愛の宝玉”的力で傷を癒します。

「ありがとう、ルーティアちゃん。

ねえ、ルーティアちゃん。ルーティアちゃんは、ルイズちゃんにだけ辛い思いをして欲しくなくて、自分も辛い思いをしてあげたのよね？」

「……」

「でもね……辛い思いをしている人は、その気持ちを共有して欲しいって思つてているだけじゃないの。その辛さから助けて欲しいって思つてもいるのよ？」

私もそうだつたから……」

ちい姉様……辛い思いをしている人は、その気持ちを共有して欲しいって思つて思つてているだけではない。その辛さから助けて欲しいとも思つてゐる、か……。そう言えれば某元908ATTの人も言つていましたね『病人は、医者に同じ病気にかかつて苦しんで欲しいんじゃない。この病気を一刻も早く治して欲しいんだ』って、

「はい、ちい姉さま」

「じゃあ、ルイズちゃんにもうちょっと本当の事、教えてあげてもいいんじゃないかな？」

……なんか、ちい姉様にはめられた気がします。絶対に気づいていますよね？ 色々と。

「ちい姉様、私にだけ言わせるのはずるいですよ？」

ちい姉様は微笑むだけです。ルイズお姉様は、自分が仲間はずれにされていると怒ります。でも、なんだか、笑つているように見えました

「ふふふ。私とルーティアちゃんは、ルイズちゃんが出来の悪い子だなんて思つていないつて確認しあつたの」

?? と、ルイズお姉様は不思議そうに首をかしげました。

正直に言つてココで虚無の系統の事を教えるのは、今後のルイズお姉さまに悪影響を与えるだけだと考えています。だから、

「ルイズお姉さまの魔法は、完全な失敗ではありません。

なぜなら、原因と結果を繋ぐ法則が完全に崩壊しているからです」「それって、どう言う事？」

「魔法は、本来は失敗しても爆発はしません。

何故なら、熱を集めて火を起こす魔法でも、制御が出来なければ熱が逃げて形になりません。

風を起こす魔法なら、空気の流れを操るだけの魔法で、操作に失敗したら見当はずれな場所に風を吹かせるだけです。

土を操る魔法も、制御に失敗しても形が定まらないか動かせないだけです。

水の魔法も、そもそも水を燃えさせるには、水を一旦油に変える必要があります。

「モモンマジックに関しても、爆発するなどという因果関係が入る余地はありません。

ならば、お姉さまの魔法は、全て“爆発”という結果に置き換わつていると言う仮説が立てられます」

「……全部、爆発に置き換わつてている?」

「仮説の段階ですが、そう考えるのが妥当だと……ただ一つ言える

事は、お姉さまは確かに魔法を使っているという事です」

「……魔法は、使っているよね? 爆発になっちゃうけど」

「それが、ルイズお姉さまの“魔法”です。

だから信じてあげてください、自分の“魔法”を。私たちが信じるアナタの“魔法”を信じてください」

「ちょっと、臭いセリフでしたね。

でも、ルイズお姉さまは戸惑っています。事実を消化しきれないのか、拒絶しているのか……。

「お姉さま方、今からまだ誰にも教えていない私の異能（力）の一つをお見せします」

そう言つと、私は眼を瞑つて深く深呼吸をした。そう、私にはルイズが魔法を使つてている事を理解させるための手段があります。

「「え!?」」

私は今、蒼く輝く魔力の海を“蒼い天宙眼”を通じてお姉さま方に見せています。そして、“蒼い天宙眼”は私の額に文様として象眼されているのが見えるでしょ?。でも、そんな事より、

「お姉さま方が今見ているのは、私達が普段使つている魔法を使うための力です。

試しに、杖を持つて魔法を唱えて見てください」

私がそう言つと、カトレアお姉さまは恐る恐る杖を取り出し“ライト”の魔法を唱えた。周囲を漂う魔力素が術者であるカトレアお姉さまに吸収され、杖を介して固有魔力色に変換され、魔方陣の形

になつて杖の先で明かりという形に収束する。

「すごい……」

「ルイズお姉さまも」

「で、でも私が魔法を唱えると……」

「魔法を完成させなければいいのです。その時に何が見えるか、し

っかりと見てください」

ルイズは肯くと、少し詠唱が長い魔法を唱えた。だが、それも直ぐに止まる。魔力素の動きはカトリアお姉さまと同じだが、その際に動く魔力の姿が、まるで某魔砲少女のS・L・Bの様にルイズお姉さまに収束していく。そして、形の定まらないボロボロで幾何学な魔方陣へと注がれて行つた。

「……これが、私の使つている“魔法”」

「はい、それがお姉さまの“魔法”です」

それからルイズお姉様は、何度も魔方陣を出して自分が魔法を使つているんだと確認しました。

ルイズが自分の魔法に夢中になつていていた傍ら、

「さて、ちい姉様」

「なにかしら、ルー？」

「いえ、そろそろ口から出で、クランさんの用意してくれた美味しいご飯を食べたいと思いまして」

「そうね~、でもどうやって出ましょつか??」

「……ちい姉様、とぼけなくともいいですよ? 口を作つてのつて、ちい姉様ですよね?」

私は確信を込めて、ちい姉様に聞いた。

「あら、なんでそう思つたの?」

「簡単です。先程の力で、この世界を作つている力の流れがちい姉様から流れて来ているのを確認できました」

ふふふ、落ち着ける環境さえあれば未熟な私でも“蒼い天亩眼”

の効果を十一分に発揮できるのです。ちなみに、ここにいるちい姉様が本物かどうかすでに確認済みです。

「あら、もうばれちゃった」

チロッと、悪戯がばれた子供のように舌を出すちい姉様。なんだか最近、性格の方がとっても活発になったというか……。

ちい姉様は、胸元から若草色の丸い宝石の付いたネックレスを取り出すと、

「アストレアさん、セットアップですよ
つて、ええ??

一瞬、そのネックレスが光ったかと思うと、ちい姉様の手には姉様の身長と同じくらいの長さの杖……いえ、戦斧が握られていました。

り、リリなのデバイスですかちい姉様？ 外見は、フレームで防衛された若草色のクリスタルの横に刀剣の様な物と一つの筒がついた様な バルティッシュの様な格好です。色は白、青、赤のトリコロールカラーですが……。

「ルーティアちゃんが寝ている間に、こっそり“使い魔を召喚”しちゃったの。

アストレアさんって言うのよ？」

「マスター、気軽にアストレアって呼んで下さいよ~
しかもインテリジェンスですか……。もういいです。“自称天使様”的お告げの通り、パワーUPしてます。

「だ、大丈夫ルーティア？」

「だ、大丈夫ですちい姉様。ちょっと頭痛がしただけです」

“慈愛の宝玉”で症状を緩和。よし、大丈夫です。

そうです、ちい姉様がリリカルな魔法（砲）少女になっただけです。今、ピ一歳なので、あと何年魔法少女をやっていられるか……ギ

ュム！

「ルーチayan、いますごく失礼な事考えてたでしょ？」

「イタイイタイイタイ！」

顔は止めてー！

「ま、いいでしょ。それじゃアストレアさん。結界を解いてください」

「いい

「イエス、マム」

*

それから数日が経ちました。

あの後、屋敷に戻った私たちはお父様にお母様、グリフィオンに乗つたエレオノール姉様からコツテリとお叱りを受けました。でも、いいんです。ルイズお姉さまと、もう一度仲良くなれたんですから。

そうそう、エレオノールお姉さまは無理やり王立魔法アカデミーを休んでいたらしく、師事している師匠に速く戻つてくるようにと言われて血相を変えてアカデミーに戻つていきました。あと、グリフィオンを街中で乗り回したとかでお母様から何か言われていたようですが……。

ルイズお姉さまとちいお姉さまは、お父様と共にヴァリエール領の実家に一足先に帰りました。姫様との交友の件については、後で色々と根回してくれるそうです。

そして残つた私達は、もう少し王都の別宅で休養を取る事になりました。

「ふつ、ふつ！」

私は別宅の庭先で、使える魔法を一通り唱えて、ソード・オブ・ガーディアンを動かして、タケミカヅチを振るいながら、どこか身体に異常がないかの確認をしていた。

さすがに数日間、何もせずにベッドに倒れていただけあって体中が鈍つてる感じがしますが……それ以外はいたって正常です。

「もう、魔法を使えないふりはしないのですね……？」

「はい、ルイズお姉さまが『必ずアナタに相応しい姉になつて見せる』って約束してくれたんです。

だから、私はもう一度と、魔法が使えない振りなどしないと約束しました」

お母様にそう言つと、タケミカヅチを用衣にしまい、クランが持つてきてくれたタオルで汗を拭き取ります。ふと見ると、心持ですがお母様が笑つていてる気がしました。

「ルーティア、身体の方は大丈夫ですか？」

「はい、多少鈍つた感じがしますが、それだけです」

よかつたと、お母様は安心したようにする。

「お嬢様、奥様、朝食の用意が出来ております」

もうそんな時間でしたか、

「ええ、すぐに行きます」

ちなみに、その後お母様から模擬戦の誘いを受けてしまいました。

……拒否権つてありますか？？

Reverse time side end

*

さてと……、時間は戻つてフォンティース領は再開拓地区です。
私が伐採した森の木々は、木炭の材料として売れるように枝葉を取り除き 枝葉は土と合わせて鍊金で肥料を作り変えました。建材だと、歪んでたりひび割れていたりして安く買い叩かれますからね。それまでの間は、地域の片隅に積み上げておきます。

でも、一本一本レビューションで運んでたら魔力（精神力）が持ちません。なので、私はゴーレムを作りました。

「名づけて建設重機型多脚ゴーレム、クラブマン・ハイレッグです！」

卵の様なボディーに、でつかいフォークの付いた四本の脚。そう、あのクラブマン・ハイレッグです！……判る人がこの世界にいません。

「パトレイバーですか？ チョイスがマイナーですね」

アストレアさんありがとうございます。でも、一言余計です。

これは本物の建設用重機が用意できないので、クリエイト・ゴーレムで再現した代用品です。キヤタピラ式の重機にせず四脚なのは、切り倒しただけなので未だ切り株が沢山残った平野が姿をさらしているから……。あとは、キヤタピラの動かし方を私以外知らない事ですね。

数百本単位の切り株を手作業で掘り起こすのは重労働でしたが、「なるほど……これは作業がはかどりますね！」

久しぶりに登場したアリシェル先生が、面白い玩具を与えられた子供の様にクラブマンを操作しています。切り株の撤去と整地作業、急けないでくださいね……って、

「もう、ダメです……」

などと黙つて倒れてしまった。はしゃぎ過ぎて魔法を使いすぎたんですね。

その後、ぶつ倒れたミス・アリシェル先生はクランに頼んでベッドに運んでもらいました。

楽しく転生14（後書き）

やつと過去編終了です。

無理やり感はありましたが……つて、ルーティアさんタケミカヅチでドツかないでください！　「めんなさいー！」

で、チート力補正です。手始めに、カトレアさんにはリリカルな魔法（砲）少女になつてもらいました。もともと敵役が持っている武器として考えた案でしたが、ただやられちゃうのももつたいたいのです。

名前は、アストレア。レイハさんと同じくインテリジェンスなデバイスです。

形状はバルディッシュュに似ていると表現しましたが、まったくの別物です。ちなみに転生者で、原作知識はありません。守備範囲外だつたんです。

能力的には、ミッド式魔法が使えるようになります。

ちなみに、オプションの武装としてGNソード（柄が長いからランス？）にGNスナイパーライフル、GNバズーカにGNシールド等々のオプションと余剰パーツがあります。

そうです、ガンダムです。きっと本人は、リリなのかの世界で暴れたかつたんでしょう。ちなみに全部魔法です。
カトレアさんは、打ち落とせつな……ザシユ！！

クラブマン・ハイレッグ。

元ネタは機動警察パトレイバーより、篠原重工が誇る量産機ことクラブマンです。ちょっと手を加えて、作業具を取り付けるハードポイントが追加されていますが、おおむね原作と同じ形です。

この作品中での大きさは、原作より小さめです。小型重機に足がついた位なので、だいたい三メートルくらいでしょうか？ちなみに、普通にクリエイト・ゴーレムで作つただけなので油圧シリンダーとか重機に必要な物は付いていません。重機って呼んでいいのか？？

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたら「」指摘ください。
感想もお待ちしております。

楽しく転生1-5（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

「すゞいわねえ……、もうコレだけの森を伐採しちゃうなんて「素直に感心する力トレアお姉さまにルイズお姉さま。

「はい、ちい姉様。凄いでしょ？」

まだ無い胸を精一杯に張つて自慢します。

用途に合つた形の道具を使い、効率よく作業を行う事で作業時間は短く出来ます。

それと、魔法は複雑な事をしようとすればするほど消耗が激しくなります。ですので、単純な操作だけに絞る事で長期間の作業も可能になりましたため、「レだけ短期間のうちに作業が終えられたのです。」そう教えると、また感心してくれます。その側でルイズお姉さまが、私が言つた事のノートを必死に取つています。お勉強ですね？

そうそう、カトレアお姉さまの病気は“慈愛の宝玉”的力で完治しました。今では、こうして普通に外を歩き回つたり、領地の視察も出来るまで回復しています。そう言えば、アストレアさんも何か補助をしているようです。変な事はしていませんよね？もししていたらお母様と私が肅清しますが……。

そうそう、このまま何事も無ければ来年には一年遅れてトリステイン魔法学園に入学する予定だとお父様は言つていました。

閑話休題。

「さてと……」

これで開拓の第一段階はおおむね完了しました。

私はクラブマンから降りて、休憩に使つている小屋に戻ります。

これまでほぼワンマンプレーでしたので、これから作業工程を他の人と確認する必要があります。

一番最初に開拓に携わるのは、私にクラン、アリシェル先生の三人です。ちい姉様とルイズお姉さまは一応部外者なんです。他にも、お父様から借り受けた衛士達と大工など必要になるだろう人材を2

0名ほど……。私は、全員がそろつていいのを確認すると、「お待たせしました。では、始めましょう」

「そう言って、開拓会議を始めます。

「まず、開拓範囲の森林の伐採と整地が終わりました」

そう言って、テーブルの上に乗せた領地の模型から作業が終わった範囲の木々を消します。

「次の作業は、ココを流れている川の整備を行おうと考えています。上流にある源泉を石垣で囲い、川そのものを完全に作り変えて……」

模型の川の源泉を囲む様に石垣が築かれ、そこから石で囲われた水路が平野部に向かって伸ばしていく。さらにその一部が地上を離れると、水道橋となつて川の合流地点まで真っ直ぐ伸びていきます。

「そして……」

山間部を中心に、住宅街を模した家屋の模型。平野部には大規模な農地の模型を次々と配置していきます。

「……ココまでが、今現在私が考えているフォンティーヌ領の開拓計画の案です」

「えっと……こんなすごい事、本当にしちゃうの？」

それを見て、ルイズお姉さまがコレが実現できる物かと聞いてきました。

「はい、お姉さま。

治水は、火災などを迅速に消化するのに絶対に必要になります。それと、街の衛生面でも必要になります。なので絶対に必要です。

それに、この領地は山間部が多くて農作業に向いた平野部が少ないのです。ですので、この様にしないといけないと考えました。平野部で大規模な農作業が可能になれば飢える事ありません。

それと、山間部で農業をするとどうしてもクラブマンの様な重機型ゴーレムが使いにくくなります。なので、手作業でやらなければいけない作業が増えてしまつて、人手が沢山必要になります」

「そう……でも、肝心の領民はどうするの？」

ヴァリエール領から有志を募るとかかしら?」

「いいえ。初期移住者は、ヴァリエール領からは募りません。

ですが、もう移住者の大体の日処は立っています」

それを聞いて、ちい姉様はビックリしますが、直ぐに冷静さを取り戻します。

「いつの間に?」

「それは秘密です。

それに、もうその第一陣がこちらに向かつてきています。

彼女達の到着は、まだ半月程先になりますが……」

*

それから一週間後、私達は、発注しておいた食料品や生活必需品、建材などを積んだ荷馬車を出迎えています。荷物を下ろし終わつた馬車から、伐採した木を積み込む命令を出し、クラブマンたちが作業を開始していく。

あの後、私は自分の立てた計画に修正を入れました。

それは、入居者第一陣が来る前に私達は彼らが住む場所を作る必要があったのです。でも、さすがに最初から立派な住宅街を作つて住民を割り振る事はしません。私もそこまで慈善家ではないので……。

それと、いまだにオーケ鬼などの危険を十分に排除出来ていません事もあります。なので、一旦全員が集団で住める場所を作る事にしました。

その場所とは……。ずばり、学校です。

「……お嬢様もやっぱり貴族なんですね。最初に作るのが自分の屋敷なんですから

と、ミス・アリシェル先生が言いますが……心外ですね。

最初は、いきなり屋敷の様な物を建設し始めたのでビックリされました。学校を作つてると教えるとさらにビックリされた。そんなに驚く事ですか？？

「学校ですか？ですが、平民に教養を付けても……」「無意味ではないですよ？」

先生、ここで経済活動についての問題です。

人間の生活には衣食住が必要になります。

その中で住む場所は一度作つてしまえば、それ以降に何か大事が無ければ立て直すなどをせず、大工などの需要は生まれません。それを前提として、着るもの……これは嗜好品も含みます。そして食べる物……これは生きていく上で絶対に必要な食料を表します。さらにこれらに収入と消費のグラフを当てはめると……この様な曲線図になります

私は、黒板を取り出すとグラフを書き込みます。

「え、ええ……？？」

「口からが問題です。ハルケギニアの国々に住む人々は、このグラフのどの辺りにいると思いますか？」

「えっと……ここでしちゃうか？」

先生が指した場所は、ちょうどグラフの中心付

「不正解です。彼らのいる場所は……口です」

私は、収入と消費の曲線がかなり近づいている場所に印をつけました。

「こんな状態では、消費は全て生きるために必要な食費に変わつて行きます。

コレでは、生活に絶対必要ではない嗜好品……例えばこの様な本は売れません」

そう言って、イーヴァルディの勇者やノタルディー令嬢の休日などと言つた娯楽本を取り出します。

「えっと……じゃあ、お嬢様はどの様にしたいとお考えなのですか？」

……まだ判らないんですね？

私は曲線のちょうど真ん中を指差した。

「平民達の生活レベルをこの位置にまで押し上げる。

この状態にするためには、平民に十分な教養が必要になります。そうでなければ、この様な本をいくら店先に並べても売れません。

ついでに言ひうと、お金の勘定も出来ません。」

「な、なるほど……」

ほんとは、もう一つ思惑があります。それは、帰属意識を芽生えさせれる事です。

歴史観や道徳、文化を国民に広めていく事で帰属意識を芽生えさせられるのに、この世界のバカ貴族どもは気づいていません。本来その役目を担えるはずの教会も、ボロボロに腐っています。だから学校を作るのです！――

閑話休題。

「さて、お話はここまでにして……作業を再開しましょ？」

私は、手を叩いてアリシェル先生や一緒に休んでいた人達に作業再開を促した。休んでいた人達は、もうそんな時間がと腰を上げて自分達の持ち場に戻ります。私も杖を握り直し、鍊金を再会します。作っているのは、直径一セント程度の鉄棒です。

制作方法は、円筒の型に鉄分を多く含んだ土を入れ、できあがつた丸棒をそのまま鍊金で鉄に変えます。その後、簡単な焼入れ（精霊魔法の方じやなくて、工学的な熱処理）を加えて固定化をかけばできあがりです。

決まった形、長さの物を量産する概念が無いこの世界で、どんどん積み上げられていく鉄の棒は、アリシェル先生やクラン、それにお姉さま方の目には異様に映つた事でしょう。ほとんどの人が、鍊金をしながら形状を変える作業を行いますが、決まった物の材質を交換したほうが楽なんです。

この要領で、クランと先生にはレンガ作りをお願いしています。型に嵌めて決まった形の土を、鍊金でどんどんレンガに変えていく

作業です。資材置き場に、おんなんじ形と大きさのレンガがドントン積み重なつていきます。

閑話休題。

それから、カトレアお姉さまとルイズお姉さまは実家に戻られることになりました。本来は、数日だけの視察だけの予定だったらしいですが半月もいましたね。あと、ルイズお姉さまは向こうで色々とやるべき事（覚えるべき事）が沢山たまっているらしいです。

それと、迎えに来たお母様は、ついでにと追加の大工達をヴァリエル領から連れて来てくれました。

「え～っと……」

「さすがにあなた達だけでは大変でしょう？」

それと、この辺りにいるオーク鬼などの害獣はあらかた駆逐しましたが、安全であるとはいえない。私達の領地は隣国との争いが絶えないため屈強な者達がとても多い、安心して作業を任せられますよ？」

まあ、それには一理あります。

それから大工さんたちに工法を説明し、専門家である彼らの提案も入れて、学校作りを再開しました。

それから数日後、

「いや～コレだけ早くできるとは……やはりメイジは違いますねー…」
私達の前には、レンガ作りの立派な三階建ての学校が出来上がつてた。

「いえいえ、私は作業を単調な物に変えただけですよ?」

大工さんたちが私たちを賞賛してくれます。でも、私たちだけじゃもつと時間がかかるかもせんね～。

一見して下級貴族の屋敷の様にも見えますが、内装は地球の日本の学校を髪髪させる様な作りになっています。しかも、校舎には鉄筋を仕込んでいるので簡単には壊れません。300人位なら楽に収容できそうな体育館に食堂も兼ねている講堂と、200メイルの周回コースが作られたグラウンドまで完備させた一品です。

コレだけの事が短期間に出来たのは、ひとえに大工さんたちの功績が大きい。元貴族で魔法が使える者がいたのも助かつた理由の一つになります。

「皆さん、本当に」「苦労様でした」
貴族が、それも公爵家人間がただの平民に頭を下げるなど考えられなかつたのですね。皆さん驚いていました。
さて、完成祝いにパートと飲みましょう！

*

そろそろ来るはずですが……あ、来た来た！！

「こっちですよ～！」

私は、街道に立つて両手を上げ、街道を走つてくる数両の馬車に向かう場所はココだと知らせます。

馬車の方も、手を上げてそれに答えてくれました。

「お疲れ様です。皆さん大事は無いですか？」

「はい、ミス・フォンティーヌ嬢。

全員、病気や怪我などはしておりません」

そう言つて、隊長を表す紋章を刻んだ衛士が私に敬礼します。彼らは、ヴァリエールの衛士ではなく王宮の衛士です。アンリエッタ様を助けた褒美で、衛士（見習いクラス）のレンタルが出来るようになりました。

それから、馬車の幌のからゾロゾロと降りてくる人達……いや、子供たちを一人一人確認していきます。
皆、不安そうな顔をしている。やはり戸惑いや不安があるのでしょ。時折キヨロキヨロと辺りを見回している人がちらほらといます。

「は～い、立ち止まらないでください！」

馬車を降りた人は、あちらの建物に行つてください！！」
建てられたばかりの学校を指しながら、私は大きな声を上げて誘導する。

それを見て馬車を護衛してきた衛士達がいぶかしげな視線を送つて来ます。だが、そんものは気にしていられません。何分手が足りないのです！

「……もう、誰も残つてませんね？」

「はい、もう誰も乗つていません」

「はい、分かりました。

彼らの護送の任務、ご苦労様です。

また何か用がありましたら声をかけさせてもらう機会があるかもしれません。その時はまた、よろしくお願ひしますね？

では、帰りの道も気をつけてください

社交辞令と帰路の無事を衛士達に言い馬車を見送る。

さて、ボチボチ次の仕事を始めますか！！

気合を入れて、私は食堂へと足を運んだ。

楽しく転生15（後書き）

オリ主のための箱庭、フォンティーヌ領の開拓作業でした。そして、手始めに学校を建設しました。

学校って結構重要なんですね。私は嫌いですが（おいシムシティやシヴィライゼーションでも、科学力や文化力を上げるための重要な施設です。

ほんとは、神社とか教会が積極的にしなきゃいけないのにね）。ハルケギニアだと、平民の殆どが家畜扱いなのでその殆どが無教養。他国に占領されても帰属意識が希薄なので、飼い主が変わる程度にしか感じていないと考えています。

最初は、住民の仮住まいとして役に立つてもらい、住む場所を確保したら学校としての機能を果たしてもらひつもりです。

鉄筋やレンガ作りでの鍊金は、ハルケギニアでは変則的な使い方だと思います。

同じ形状を保ったまま、寸分たがわずに材質を変化させる事ができると言う設定です（あっちこっちで使われていますね）。たいていの人は、鍊金しながら加工作業をするようですが、一旦加工やすい材料で整形して鍊金する方法もありかと考えました。なんでも誰もやらないんですかね？　あ、ギーシュがサイトの銅像作りでやってたか。

さて、ルイズをどうこう風にしたら原作みたいにシンデレに出来るか考え中です。「つむ、ビツやつたらああいう風になるんだろ？」

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたら「指

摘要ください。

感想もお待ちしております。

楽しく転生ー6（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

楽しく転生16

そこは、戦場と化していた。

各々が、手渡された食器を片手に用意された食事を可能な限り口の胃に詰め込むだけの戦場……。

「押さないでください！　まだお代わりは沢山用意していますから！」

「ミス・アリシェル！　」うちの鍋が空になりました！」

「分かりました。直ぐに次を持つてきます！」

「はい、割り込まないで列の最後に並んでください！」

彼らがいかに酷い扱いを受けていたか、判る様な光景でした。着の身着のまま、と言つよりぼろ布を巻きつけただけの人もいる。汚れる事など気にせず、零した食事を顔中に貼り付けて……ううん、さすがにすごい光景ですね。最低でも途中で着替えさせておくんでした。

「あ、ルーティアお嬢様！」

「私の事はいいですから、あなたはあなたの仕事を続けなさい！」

「は、はい！」

ふう……。

私は、クランさんに全員が落ち着いたら一日お風呂に入れるように頼むと……あ、あと新鮮で清潔な衣服も用意してあげてください！……頼むと、自室に戻り次の仕事に取り掛かる事にしました

月衣に手を突つ込み、びっしりと文字の書かれた紙束を取り出します。

……彼女らは、元々奴隸市で売られそうになつていった子供たちでした。この書類には、彼女らの名前や身体的特徴が事細かに書かれています。……どうやつて口に書かれている事を調べたのかを想像すると、燃やしてやりたくなる様な内容の代物と言えば分かつてくれるでしょうか？？他にも彼女らが何処に売れるのか、または既に売られた先を記した 取引の契約書もあります。

私は、当初の入植者の當てとして帰る當ての無い者 経済的な理由で親に捨てられた。または、お隣のガリアやゲルマニアで起つている権力争いで没落させられた元貴族などを確保しようとしました。特に、魔法資質保有者の確保が出来ればこちらとしても大いにプラスになります。なので私は、そう言つた人達を比較的多く扱つてゐるであろう奴隸商を襲撃する事にしました。

最初は、小規模な奴隸商を捕まえて住民を少しずつ確保していくと考へました。ですが……、最初に見つけた奴隸商をこつそり尾行すると、なにやらかなりの数の奴隸商達が集まる奴隸市にたどり着いてしまいました。

そこからは、あまり語る必要はありません。語りたくもありません。

いえ、彼らがあまりにも外道だつたのでつい……。

……月匣を開いて、その場にいた奴隸商全員をフルボッコにしただけです。
その後はもちろん、金目の物と身包みを全部引っ張がして最寄の街の衛士詰め所に貼り付けにして差し上げました。後は、治安を預かっている衛兵の仕事です。煮るなり焼くなり、好きに処理してください。

ちなみに、あの奴隸市はかなり大掛かりなグループだつた様で、かなりの額の売上金や彼らの顧客リスト つまり今持つてゐる口も手に入つてしまつたわけなのですが……、

「コレは、とんでもない爆弾ですね。

……モット伯にリツシユモン、アナタ達には一刻も早くトリステインから消えてもらう必要がありますね」

“賢明の宝玉”が瞬く。どの様にして彼らを謀殺すればいいのか、自然と頭の中に浮かんできます。でも、どれも面白くない様なモノばかりです。生半可な地獄では、彼らが啜つてきた命の代価と釣り合わないんですよ……。それに、この一人以外にも色々と腐つている貴族が沢山います。この人達もどうにかしないといけませんね。この様な事になつていてるにもかかわらず国内が荒れないのは、現王ががんばってそういう貴族（自称）ども潰しているからでしょうね。うか？…………たぶんそうですね。

後でお父様に頼んで、國の大掃除をしてもらいましょう。私たちの未来の為に……。

閑話休題。

私個人で製作した名簿では、初期入植者数、67名。内12名が男性、残りの55名は女性です。かしましいですねと、素直に笑えればいいんですが……、

「当面の問題は彼らの住居の建設と、自立のための職案、それに精神的治療も……ですか」

こうして考えて見ると、人手が決定的に足りません。

この領の入居者は、色々と抱えている人が多いので（権力争いで貶められたとか）信頼できる人しか使えません。その辺もお父様かお母様に頼んで補佐官とかの追加もしてもらわないと……。

私は、書類に必要になるモノをどんどん書き込んでいきました。

*

まったく、期待していた娘どもが全員ダメになつてしまつとは……。

ワシは、大枚をはたいて5人も、5人もだぞ！？ 奴らが、

『もう直ぐ1歳に満たないガキ、それも調教しがいのある元貴族の上玉が少なくとも5人は入荷しますぜ？』

などと言うから、前金をたんまりとやつたというのに……、「捕まるとは何事だ！？」

大規模な奴隸商グループの一斉摘発の報告を聞いたときは、我が耳を疑つたほどだ。せっかく大金を注ぎ込んで新しい娘達専用の調教室までこしらえてやつたのに、

「あの奴隸商共め、なにが『我々に任せただけば万事安心』だ！」

こうも簡単に捕まりおつて……！」

クソツッ！……仕方がない、先週待ちきれずに街から連れてきた平民のガキでこの鬱憤を払うとするか。何度も痛めつけてやつたのに、一向に大人しくならん小娘だが……そこがまたよい。屈服させがいがある。

「……んん？」

妙だ。部屋から出て、地下まで来たというのに誰にも出会わない。夜回りをしているメイドも高い金と女（使い古し）を与えている衛兵共も……、

「おい、誰かおらんのか！？？」

呼びかけても、誰かが来る気配もしない。……そう言えば、なぜこの屋敷はこんなにも紅いのだ？？

ワシは、たまたま会えないだけだと自分に言い聞かせ、特殊な仕掛けで隠した地下室へと足を急がせた。

さつさとあのガキを鳴かせて楽しもつ。そつ思つてドアを開けると……。

バツ、バツバツ！！

暗かつた部屋が、いきなり明るくなる。はて、こんな仕掛けを施したか？？ そして、部屋のもつとも奥が照らし出されると……、

「ラ～ブ、ア～ンドウ、ピ～ス！

愛、知つているかしら？？」

化け物がいた。

「な、な……！？」

何だコレは！？」

暑苦しいほどに鍛え抜かれた筋肉が、呻りを上げて汗を迸らせている。下着と呼べばいいのか判らんようなモノを着込み、それが鍛え抜かれた筋肉をさらに強調している。つて、そのモツコリはなんだ！？

「き、キサマ翼人か！？」

元は白かったのか、紫のグラデーションのかかった申し訳程度の小さな翼が見て取れる。ワシは杖を引き抜き構えるが、「ん～もう、せつかちさんねえ～」

ゾクゾクッ！ い、今嫌な悪寒がしたぞ！？

「こ、コレでも食らえ！！」

ワシは、悪寒を払いのけるように氷の飛礫をヤツに投げつけてやつた。よし、今のうちに……。

キー、ガシャーン！ ガチヤン！！

「な！？」

鋼鉄製のドアが勝手に閉まつた。しかも、じ丁寧に鍵までかけるとは！

「れ、鍊金！？」

鍵は外からしか開かない。仕方なく鍵を破壊してドアを開ける。

「な……！？」

れ、レンガだと？ なぜレンガで塞がつていい！？ コレでは出れないではないか！？

「クソ！ 鍊き……」

「もう、積極的ねえ～」

再び悪寒が走る。ダメだ。振り向いてはいけない。だが……、

「さあ、我輩の愛を！」

ガシッと、ヤツの両手でワシの頭は固定される。そして、毒々し
今までの紫色をした唇が……、

「い、イヤだ！ 助けて！ 助けてくれ！！ アー！！！」

ブチュー！！！ ジュッポン！！！

「フハー……汝に、さ・ち・あ・れ。

今宵は、トコトン逝くわよー」

…………そして、宴が始まった。

その様子を、調教部屋に備え付けられていた巨大な姿見に昇った
紅い月と、鏡越しに屋敷中の使用人たちが見届けていた。

そして、翌日以降……モット伯の屋敷では年端も行かぬ女子の嬌
声ではなく、
「も、もつとだー！」
「ああ！ もつとだー！」
暑苦しい漢どもの嬌声が響くようになり、メイドさん達に平和が
訪れた。

そしてさらにその後、それを知った王宮の者達によりモット伯は
肅清され、トリステインの歴史からその姿を消した。

……………

『紅い月が昇る。

紅い月が昇る。

白い魔がやつてくる。

悪夢をしてるとやつてくる。

悪夢を見せ、

終わりを見せて、

白い魔がやつてくる。

七つの翼をはためかせ、

紅い月を引き連れて、

白い魔がやってくる』

……その日を境に、トリステインで一つの歌が紡がれるようになつた。全ては、本人達のあざかり知らぬままに歩き始めていく都市伝説……。

Another side end

*

楽しく転生16（後書き）

未だに領民を迎えるお話をした。
ついでにモット伯をフルボッコにして、性癖も変換してやりました
(笑い)！

今回は『まじしゃんずあかでみい』より、ラブ・テロリストこと能天使ハプシエルを召喚。そして、モット伯にぶつけました。認知度と危険度的には、アベさんの方が有名ですが……見た目の衝撃はこちらの方がはるかに上でしょう。

ちなみに、ご本人様ではありません。オリ主が“信頼の宝玉”で見せた幻です。ですので、いくら熱いベーゼを浴びせられ、「汝に幸あれ」と、言われても、祝福されません。むごいですね。

オリ主の集めた領民は、奴隸商からブン捕つてきました。治安が悪いとはびこりますからね、こういう奴らは。悪党に人権は無いとドラマタ様も言つておりましたので、好きなだけ襲います。ちなみにコレは、魔法が使える領民が増えるようにするための処置です。

原作開始時点で、オリ主の領では魔法使いだらけになる予定です。

6000年間続いたパワー・バランスを崩し始めたオリ主に、各勢力はどう対応するのでしょうか？？
まあ、攻めてきたら天使様の熱いベーゼが待っていますがね……。
ラブ・テロリスト

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら、指
摘ください。

感想もお待ちしております。

楽しく転生17（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

さて……、最初の入居者さん達を受け入れてから3ヶ月程が経ちました。

この間にいくつかの問題が起きました。
ですがそれは、入居者同士の部屋割りだつたり慣れない畠仕事等
でへばつたり……あとはご飯の奪い合いですね。皆さん、もう少し
ゆっくり食べたほうがいいですよ??

あ、そうそう。お風呂はとても好評でした。平民でもサウナじゃ
なくて湯船に浸かれるのが嬉しいようです。

私も皆さんと仲良くしたいと思い、一緒にお風呂に入らうとする
のですが……皆さんに萎縮されてしまします。……ですので、今は
“信頼の宝玉”で認識阻害をかけて一緒に入っています。私が誰か
なのか分からぬので、皆さん愚痴とか今後の事とか色々腹を割つ
て話してくれるので助かったりもします。

……最初は、平民と元貴族がごっちゃになつてているので心配しま
したが杞憂に終わりました。皆さん、奴隸として捕まっていたので
仲間意識が芽生えていたのでしょうか??

現在のところ、彼らの本格的な衝突（闘争）の兆しは確認できま
せん。いい事です。

閑話休題。

現在の領地の開拓状況は、当初予定していた水源と水路の整備が
五日遅れで完了。まあ、作業員を削つたのでコレ位は想定の範囲内
です。

作業員を削つたのは、住民（彼ら）が住む住宅を作るためです。
もちろん個別の住宅ではなく、学校の寮の様な形式で現在学校の直
ぐ横に建設。寮と言うヤツですね。

農業地に関しては、クラブマンに耕耘機のアタッチメントを着け
たモノを総動員して一気に耕しました。その後は、ラ・ヴァリエー

ル領から呼んだ農家の人们に指導してもらひながら比較的栽培が簡単な野菜類の栽培をさせています。

もつとも、全ての農業区画を農地にする事が出来ませんでした。この人数では、畑全体に手入れが行き届かないのです。……一旦、放牧用に草原でも整備しましょうか？？

そう言つわけで、学校の隣に水路と水道橋を挟んで寮を建設。学校の目の前には、農地を整備。裏側は、さら地にしたままの山間部（鍊金で表面を硬化させて土砂崩れを防いでいます）となっています。

閑話休題。

それと、市街地へのオーク鬼や竜などの害獣の被害は今のところ発生していません。

ですが、警戒を怠つた瞬間に大災害に見舞われるのはいつの世も同じです。現にちらほらと彼らの目撃例が上がつて来ていました。……、「と、言つ訳で……あなたたちはこの領地を巡回警邏してもらつために派遣されました。

何か質問は？」

私は、目の前に立つ5名の魔法衛士隊員達（見習い）を一瞥しながら質問はないかと尋ねた。

なんと、私は王様から普通の衛兵だけでなく魔法衛士（見習い）の貸し出しも出来るようになりました。姫様を助けた報酬……なんでしょうか？？

彼らは幻獣に騎乗できない、または爵位が低すぎたため昇格できなかつた者達です。ですが、十分に使える下地を持つ者達です。……最初は他の領から、スパイや破壊工作員が紛れ込んでないかと少し心配しましたが、お母様が下調べしてくれたみたいですね。これで、下手に弱い人を無造作に雇い入れるよりは幾分かはマシになりました。

それから、一応彼らがここにいる畠は、“実戦に一番近い環境で

の警邏訓練”となっています。

「はい、よろしいでしょうかミス？」

「何でしょうか隊長殿？」

今回、領地警邏訓練のために派遣された衛士見習い達の隊長が一步前に出て聞いて来た。

「先ほどなされた説明では、最優先事項は領民の安全……でしょうか？」

「はい、そうなります。

迎撃対象（襲ってきたオーク鬼やワイルド・ワード等）の近くに領民がいた場合、撃退よりも領民の保護を優先してもらいます。

領民の生命、財産を守るのがあなた達に与えられたこの領での責務です。

この行動に関しては、異議は認めません

「……判りました」

「もちろん、あなた達に無駄に死ねとは言いません。戦力が減ればこちらが不利になりますからね。

その辺りの対応は、ケース・バイ・ケース臨機応変でお願いします」

隊長さんは了承したと肯く。すると端っこにいた人がおずおずと手を上げた。

「あの、わたしも質問してよいでしょうか？」

「なんでしょうか？」

「はい、先ほどこの建物で翼人や猫人を見かけたのですが……」

「ああ、そつちの説明も必要でしたね。」

彼らは、最初の入居者達を向かい入れた後に流れ着いてきました。翼人達の方は、私が巡回中にオーカー鬼に襲われている幼い姉妹を見つけて助けたのが最初の切欠です。

彼らは、少し前まで山を挟んだ向こう側の森に集落を作つて住んでいました。ですが、その一帯には獰猛なオーカー鬼が多くため安全な生活が望めませんでした。なので別の場所に引越そうしましたが、それよりも前に凶暴なワイルド・ワードに襲撃されたのです。そして、家

族とは別れ離れになつてしまい……今まで孤軍奮闘していたのを私が救助したというわけです。

最終的に、私が蒼い天宙眼の力を使って領地内を駆け回り、生き残っていた翼人達を保護して領民として迎え入れました。口なら安全ですし、お話の出来る亜人の方とは仲良くしたいと思つていましたので「一石二鳥」です。

猫人達は、食料庫を荒らしているのを見つけてとつ捕まえました。彼らは、安住の地を求めて迷つていたところお腹がどうしても空いたらしく、美味しい匂いのした食糧庫からご飯を失敬したようだ。しかも幼い子供（兄妹でした）を数人連れていきました。

まつたく……、仕方ないので食べた分は働かせるために弟達を盾（人質）にとつて無理やり領民として迎え入れさせた。もつとも、今では雨風がしのげて安全に暮らす事のできる環境に順応して永住する気のようですが……。たくましいですね。

「彼らも我が領地の領民です。必ず保護してください。

現在は、何の問題も発生していませんが……何かあつた場合には、間に入つてもうのもあなた達の仕事になります。

異論は認めませんよ？

それでは、後ほど警邏のメンバーシフト表、巡回ルートの計画書類を提出してください

判りましたか？ と、にこやかに……だが決して有無を言わせぬように確認します。

……ふう、疲れました。

「……治安維持のための自警団の設営が今後の課題ですね？」

いつまでもリースできる訳じゃないですからね。これもメモしておきましょう……。

ガチャ、

「ルーティアお嬢様、先日徴収した金銭類の集計が終わりました」「あ、ご苦労様です」

クラランが渡してきた書類に目を通して金額を確認する。ううむ、

これで貯蓄額がかなりの量になりましたね。え？ 悪党に人権なんか無いってドラマタも言つてますよ？ 私と遭遇した人は、消されないだけ儲けもんだと思ってください。

「それじゃ、会計簿にこの金額を臨時収入（盜賊討伐の報奨金）として計上して置いてください」

「はい、判りましたお嬢様。」

「それと、根をつめてばかりではダメですよ。コレを飲んで少しは休まれた方がいいです」

そう言つて、クランさんはホットミルクをカップに注いでくれた。「ありがとうございますクランさん」

あ～温まりますね～。

グワツシャアアン！！

「ブフツ！？ い、一体何事ですか！？」

「……え～と見れば判りますね」

そう言われて外を見て見ると……ありやまあ、

「大丈夫ですかーー？」

どうやら建設中の集合住宅で、外側に建ててある足場の一部が崩れてしまつたようです。幸いにも怪我人は出なかつたようですが……作業面に関しての安全意識の改革も必要ですね。

*

ビュービューと、頬を撫でる風が気持ちいです。

「ルーティアお嬢様、もう直ぐラ・ヴァリエール邸上空に到達します！」

「と、もうそんな所まで来ましたか。

眼下に広がる光景に眼を向けると、最速屋敷と言つよりも要塞か城といった規模の建造物 ラ・ヴァリエール邸が見えてきました。

なぜ私たちがこんな所にいるかと言つと……、先日届いたちい姉さまからの一通の手紙が切欠でした。

フォンティース領の開拓を始めてから、殆ど　いえ、まったくですね。実家に帰つていませんでした。おかげでお父様が色々と危ない感じに拳動不審になつてしまつたり、そんなお父様をお母様が激しく折檻したり……。でも、そんな事よりも心配な事が書かれていました。それは、ルイズお姉さまの事です。

どうもルイズお姉様は、ちい姉様曰くがんばりすぎている節があるとの事だ。そして、それに拍車をかける様にお母様の教育が厳しくなっているとか……。世界の修正力つてヤツですか??　まつたく、面倒な力です。

「それじゃ、降りますよクランさん!!」

風の力を吐き出す[動力機関](#)(マジックアイテム)

結界炉(私、命名)[の出力を](#)ユックリと絞りながら、私達は円を描くように“魔女のウイッチ・ブルーム”をラ・ヴァリエール邸へと向けて降下させていった。

この魔女の箒、私が作った自信作の一つです。やっぱり魔法使いは箒に乗つて空を飛ばないとね、うん。箒といつても、さすがに普通の竹箒に跨つていいわけではないですよ? 持ち手と座席を兼ねた基礎フレームに結界炉　風石を燃料とした[機関部](#)(マジックアイテム)を装備し、末尾に複数の制御用の翼と大型の安定翼を取り付けて外見を箒の様にしているものです。まあ、魔法版空飛ぶバイクの様な物を想像してほしい。

そして、そのまま屋敷の前にスタンツと降り立ちました。

「な、なにや……ああ!?　」「これはルーティアお嬢様ではありますか!!」

「」苦労様ですジェロームさん。ルーティア・ルシェル、ただいま
帰りました!」

楽しく転生17（後書き）

なんだか、詰め込んだ感がありましたが、開拓状況などはこんな感じです。

領民の割合は、ヴァリエール領からの手伝いが約40名。レンタルの衛兵や衛士達が約20名。元奴隸の子供が約50名。友好的な亜人が約20名となっています。

たいていの人は、学校で寝泊りしてもらっています。学校が機能しだすのはまだまだ先になるので……。

水路と水道橋も整備しました。本当は上下水道の整備をさせたかったんですけど……下水道はもう少し後で整備しましょう。

水道橋はポンプの代わりです。上から水を落として水圧を確保し、各家庭に送ります。水道技術その物は、地球でも中世くらいで実用している地域もありましたし、妙に発展していたりするハルケギニアでも比較的簡単に整備できると考えました。

じついう街の発展とかを考えていると、無性にシムがやりたくないります。なぜでしょうか？？

魔法使いは箒に乗つて空を飛ぶ。NWだけでなく、古今東西の魔法使い物ではポピュラーなミニックです（一部例外もありますが）。オリ主は、000を使えば楽に飛べますが、ルイズは自力で飛べません。ですので、“賢明の宝玉”とか夢幻書庫の知識を総動員してこの箒を作っちゃいました。

次回は、世界の修正力が働くラ・ヴァリエール邸です。ルイズツンデレ（初期外道）化を止める為、オリ主はがんばります。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら「」指摘ください。

感想もお待ちしております。

楽しく転生～（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

「どうやら、予定よりも少し早く着いてしまったようです。

屋敷の中が（メイドさん達によつて）かなり大慌ての様相と化していました。

やっぱり、夕方に着く予定だったのがお昼ごろに着いてしまったのが原因でしょうか？？ 仕方ありませんよ、風に乗っちゃつたんですから……。

う～む、どうやらお父様は気晴らしに狩に出かけ、お母様は領地の視察に行っていて一人ともまだ帰っていないようです。エレオノール姉さまにちい姉様もいません。後は……ルイズお姉さまですね。「ルイズお姉様は、ただいま家庭教師の方とお勉強の時間です」

……そうでしたか。

トントン。

ん？

「ルーティアお嬢様、待ち時間を利用して一日お風呂に入られてはどうでしょうか？」

その……フォンティーヌ領での開拓作業や魔法具の研究、さらにご自身の鍛錬に時間を取られてまともに休まれている所を久しく見ません。

一旦、休息も含めて身を清めましょう

「う～ん、そんなに汚いでしそうか？？」

「……お嬢様、そんな風に嗅がないでください！……はしたないです」

あつと、いけませんいけません。

確かに、フォンティーヌ領に作ったお風呂は大人數に入るいわゆる大浴場で、備え付けの石鹼とともに市場で貧乏な平民でも購入できるようであまり質の良くない物でした。今度、もうちょっと質のいいのに変えましょう。

「そうですね、久々に手足をのびのびと伸ばして入れるお風呂に入つて疲れを取りましょっー！」

「え～と、何でしじうこの状況？？」

今私は、クランさんと一緒にお風呂に入つています。
他にも、沢山のメイドさんが私をまるで逃がさないよつて取り囲んでいます。

「えっと、クランさん。この状況は……？？」

「それは……」

「それは私どもが、ルーティアお嬢様方が公爵様方に会われる際、どこか粗相の無い様に隅々まで磨き上げねばならない使命を帯びているからです！！！」

クランさんの代わりに、なんか握りこぶしを握つて力説してくれたメイドさんがいます。えっと、その使命は誰が？？

「もちろん、私たちが私たちに課した使命であり。この家に仕えるメイドの仕事なのです！！！」

「おお、立派ですね！……でも、

「自分で洗えま……」

「いいえ、私たちが洗います！！　それが傳ぐ者です！！」

う、引いてくれませんか？？　てか、クランさんが洗ってくれますから……、

「ダメです。クランも洗う対象です。

……では皆さん

ジャキン……、とか聞こえて来そうな勢いで皆さんスポンジやブラシ、石鹼やタオルなんかを構えています。め、目が逝っちゃってま……、

「に、逃げますよクランさん！！」

「だ、だめですか嬢様！　私たちが逃げたら、彼女たちが公爵夫人に折檻されてしまします！！！」

ぐ、そんな！？

ガシツ！！

「大丈夫でお嬢様方！

優しく、丁寧に、人には言えないような場所まで隅々まで洗つて
差し上げますからーー！」

「い、イヤーー！」

・・・・・

「あ～、酷い目にあいました」

「それは、私もですよルー」

ホントに隅々まで磨き上げられちゃいました。ええ、人には言え
ない様な場所まで丁寧に磨き上げられちゃいました。女の子同士つ
て凄いんですね。躊躇がありませんでした。

今は色々とグッタリしながら、鏡台の前で綺麗に洗い流された髪
に丁寧にクシを通してもらつてます。もちろんクランさんにですよ
？あのどこか甘が逝つているメイドさんたちに任せたらヤバイそ
うですからね。

……さてと、白く輝く髪は後ろで束ねて紅いリボンを添える。い
つも好んで着ている白を基調としたドレスに着替えます。最後にタ
ケミカヅチを構えて、

「さて、参りましようか」

何処へですかと、下手な突つ込みが聞こえて来た気がしましたが、
あえてスルーします。冗談ですからタケミカヅチはしまいますよ？
「ルーティアお嬢様、ルイズお嬢様の家庭教師の方がお帰りになり
ました」

「ん、分かりましたジエロームさん。では、ルイズお姉さまに会いに行きましょう」
きつと疲れているでしょうから、甘い甘いお菓子とお茶も一緒にです。

「ルイズ……お姉さま？？」

「ルーティア、久しぶりね！」

元気な声とは裏腹に、私の目の前に立つルイズお姉様は目の下に幾重ものクマを作り、頬をこけさせて憔悴しています。ほんの少し押せば、今にも折れてしまいそうな……そんな感じでした。

つて！？

私は、いきなりグラッとも倒れかけたルイズお姉さまを抱きかきました。

「えへへ、ちょっとお姉ちゃん、がんばりすぎちゃった……かな？」
「がんばりすぎです！　たつた二ヶ月でどれだけ痩せたんですか！」

？

抱きかかえた一瞬、自分の感覚を疑いましたよ……。前に会った時の半分くらいにしかルイズお姉さまの重さが感じられませんでした。

とりあえず、大事をとつて一旦ルイズお姉さまをベッドに寝かせました。

「もう……、大丈夫だつて言つてるのに」

どう見ても大丈夫じゃないです！！

私は、魔法の治癒に“蒼い天眼”を使ったヒーリング、ついでに“慈愛の宝玉”的力も使ってルイズお姉さまを回復させます。そのかいあってか、目の下のクマも消えてこけた頬も幾分か回復し見れるものになりました。

「……ありがとうルー」

まったく……、私たちはまだまだ子供なんですから、そんなに無

茶をしあわせにいけないんですよ？ 分かってるんですか？？ …… 分かつてませんね。私の話そっちのけで、美味しそうにクックベリー パイと紅茶を食べています。

それにしても……ほんの三ヶ月前、ぬいぐるみ等の女の子っぽい物が沢山置かれていたルイズお姉さまの部屋でしたが、それらは今色々な本や勉強で書いたノートで作られた山脈で覆い隠されてしまつていて。

いくらルイズお姉さまががんばつてゐるからって……。

これは一度、お母様とお父様とジックリ話し合つ必要があります

ね？

『ちょっと、お話しようか？』

ゾクツ！？

うう……、なんかどこかの白い悪魔が私の後ろでさわやいた気がしましたが、気のせいです。

「ルイズお姉さま、ムリはしないで……」

「大丈夫よ。ルーティアがいるんだからしゃんとしないと」

私に支えられながら、それでも自分で立つて歩こうとするルイズ お姉さま。今は夕食の時間です。

ほんとは、自室に持つてきてもいいつもりでしたが、丁度お父様 とお母様が帰つてきたので食堂で皆で食べる事になりました。エレ オノール姉さまとちい姉様はまだ帰つてきていません。どうやら、 帰つてくる途中でトラブルがあつたらしく到着が明日になるとの事 です。アストレアさんの魔法を使えば早く帰つてこれるだろうに… え？あの“動物園”で移動してたんですか？それなら仕方な いですね。

「お父様、それにお母様、ただいま帰りました」

「おお、ルーティア。本当に心配していたんだぞ？」

フォンティーヌ領の開拓に付つきりで、久しく顔を見ることがで

きなかつたぞ？？」

「申し訳ありませんお父様。

なにぶん幼い私では、そしそう手が離せない仕事でしたので……」

「そうだつたなルーティア……時折、お前が本当に7歳程度の幼子
なのか、我が目を疑つてしまふばかりだ」

「ハハハ……。

お父様、7歳程度の子供に領地開拓を頼まれた時は、私も自分の耳があかしくなつたのかと疑つてしまひましたよ？」

なんででしょ？　なんだか……普通に喋つてゐるのにどこかぎこちない感じがします。

「……ところで、ルイズ。その……大丈夫なのか？」

「はい、大丈夫です。ルーティアもいるんですから、姉としてがんばらないといけません」

……もしかしてぎこちなく感じてしまうのは、ルイズお姉さまの事があるから？

「……」

「どうしたのルー？」

ルイズお姉さまとお父様が、不安そうに私を見ています。どうやら、いつの間にか険しい顔をしていたようです。

そしてお母様はと言つと、とても険しい表情でルイズを睨んでいた。

「ルイズ、貴族たる者がその様な事でどうしますか！」

妹に支えられねば立つ事もままならないなど、姉として恥ずかしくないのでですか！？」

「カリーヌ、ルイズは……」

「アナタは黙つていなさい。

ルイズ、何時まで妹のルーティアに支えられているつもりですか？

その様な醜態、恥を知りなさ……！」

「ブチ。

……お母様、

「！？」「

いい加減、

「ちょっと、口閉じようかお母様？」

私は、剣形態のタケミカヅチの切つ先をお母様に向けながら、冷たく、だけど熱く煮えた怒りを込めて、突きつけていた。

「ルーティア、一体これは何のま……」

「何のまね、ではありません。

お母様こそ、それがボロボロにやつれたルイズお姉さまに対しても言つ事なのですか！？

それが、ここまでボロボロになってしまったルイズお姉さまに対してする仕打ちですか！？！」

「ルーティア！ アナタは、自分の母親に向かつてなんて言つ事を言つのですか！？」

お母様はカツと目を見開くと、杖を引き抜き私に突きつけて来る。そしてその杖の先には、魔力が渦を巻いていた。私は、負けじとさらにお母様を睨みつけます。

「親だから何を言つてもよい、何をやつてもよいなどと言つ道理は、通すわけにはいきません！？！」

互いの杖を突きつけ合い、一触即発の空気を放つ私たちに、

「二人とも止めるんだ！ 杖をしまわないか！？」

「ルーティア止めて！ お母様と喧嘩しないで！？」

ほ、ほら！ 私はちゃんと一人で立てるからね？ だから大丈夫だからね？？」

私たちを止めようと、間に割つて入つてくるお父様。そして、私たちに必死に自分は大丈夫だとアピールするルイスお姉様……。

それから私達は、どちらからでもなく杖を收め、久しぶりの家族との夕食となりました。

……もつとも、何を口にしても美味しいとは感じられませんでし

た
が。
。

楽しく転生18（後書き）

5万ユニーク、30万PV突破！！！

ひとえにこのううを読んでくれる皆さんのおかげです！

今回から、ヴァリエール家での騒動になります。

メイドさん達がなんだかアレな感じなったのは、アストレアさんの仕業です。日本のサブカルチャーで活躍するメイドさんとかの気概とか色々と仕込んだんです。

詳しくは書いてませんが（書けませんが）、女の子たちに徹底的に磨かれたネギくんを想像しておいてください。おおむねあんな感じです。

ルイズは、少しだけボロボロになつてもらいました。一応元の案を変更して、不在期間を二ヶ月、頼りになるカトレアさんもいる状況にしました。修正前は、ひこもりに他者恐怖症を発病……ダメですね。楽しくありません。

ルイズに使つたヒーリングは、ザ・カードの登場人物、イクスなどが使う氣を使った治癒術です。ただ回復させるだけでなく、持続的な回復力向上効果ももたらせる事ができるようです。

久しぶりに柊蓮司と宝玉の少女を読み直しましたが、慈愛の宝玉つて死者の蘇生もできるんですね。コレだけの力があれば、ルイズを万全状態に持つていけそうですが……。まあ、コレだけで全部解決させると他の能力が空気になってしまいますから結果オーライです。

次回はたぶん、烈風カリソとの戦いになるのか？？

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたらご指
摘ください。
感想も待っています！

楽しく転生ー9（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

結局、あの後お母様と何か話す事もなく、瀟々と夕食は終わった。今は、ルイズお姉様と一緒に私の部屋にいる。

病人の様にやつれたルイズお姉様をベッドに寝かせ、眠るように促す。だけど、ルイズお姉様は、

「まだ、今日習った範囲を復習し終えてないから寝れないわ。それに明日の分も予習しないと……」

笑顔で自室に戻ろうとするルイズお姉様の後姿が、酷く脆く感じた。

耐えかねた私は、ルイズお姉様を抱き閉めるとそのままベッドに押し倒す。そして、ルイズお姉様が何かを言つ前に“節制の宝玉”的力で強制的に眠らせた。

「……大丈夫ですルイズお姉さま。

大丈夫です……」

一体何が大丈夫なのか？ 自分で言つておきながら、自分に問いただしたくなってしまう。

コン！ コン！

こんな時間にいつたい……お父様？ 他には……誰もいなにようですね。

「どうかなさいましたか公爵様？」

「……2人は、まだ起きているか？」

クランさんが少し空けたドアの隙間から、まだ明るい廊下の光が薄暗い部屋の中に入り込んできている。確かに、もう眠っているようにも見えなくはない。

「いえ、お一人とも……」

「クランさん、通していいですよ」

私がそう言うと、クランさんは肯きスッとドアを開いた。

部屋の中に入ってきたお父様の表情は、とても複雑そうで……怒

つっていたり、悲しんでいたり、悩んでいたりと言つた具合に読み取
りにくい。

「お父様、どうされましたか？」

「……いや、何から言つたらいいのか決めかねている。

「……ルイズは、大丈夫なのか？」

「大丈夫……としか、今は言う事ができません

「そうか……」

ルーティア、父からの頼みだ。もうあの様な事はしないでおくれ
あんな事……お母様と杖を突きつけあつた事ですね。

「……それは、難しい約束ですお父様」

「な……！？」

「私は、とても不器用です。

話し合いの席で、頭に血が上つて杖を抜いてしまつほど^{うほど}の不器用
さです。

ですから、もし約束を破つてしまつた場合には、愚かな私をしか
つてください。お願いします」

「……はあ、まつたく……。ルイズもそうだが、ルーティアは私た
ちに似て融通が利かないようだ」

「はい、私達はお父様とお母様の娘ですから！」

無い胸を精一杯張つて言つた。つてお父様、そんなに肩を落とさ
ないでください。

私は、お母様が嫌いなわけじゃない。もう少しだけ、ルイズお姉
さまにやさしくして欲しいのだ。

「……お母様の教育方針が間違つていると、否定したいわけではあ
りません。

ただ、ルイズお姉さまが倒れている時、言葉の鞭を振るうのでは
なく、抱きしめてあげて欲しい。もう一度立ち上がりるように支え
て欲しい……それが私の望んでいる事ですお父様」

“節制の宝玉”の力で、泥の様に眠るルイズお姉様を撫でながら、
私は自分の思つてることをお父様に打ち明けた。

「……倒れても、もう一度立ち上がるよつ……か
「はい……」

たぶん、お母様もそうしているのでしょうか。でも、すれ違つてしまつてゐる。

*

翌朝。

しつかりと眠つたおかげで、私はとても目覚めがスッキリです。横で寝ているルイズお姉様は、一晩中“慈愛の宝玉”の力を受けていたためか血色が十分に回復していました。

私は、ルイズお姉さまを起こさないようベッドを抜け出すと、いつ間にか控えていたクランさんがさささのさーと着替えさせてくれる。前にクランさんが『優秀な執事やメイドさんには、主が必要とするまで決してその気配を悟らせない^{ステルス}隠密能力が備わっているらしいですよ?』などと、某借金執事みたいな事をクランさんが言つていた気がします。何処で知ったんでしょう??

朝のまだ使用人以外は誰も起きてこないこの時間、ヴァリエール邸備え付けの練兵所の真ん中で私は待つていた。

そして、

「ルーティア、構えなさい」

魔法衛士マンティコア隊のマントを羽織り、顔の下を隠すマスクに騎士甲冑を着込み、レイピアのような杖剣を携えた……完全武装のお母様と対峙しています。

「……お母様、お待ちしていました」

冷たい視線を送つてくるカリースお母様。するとお母様は、杖剣

を構えて私にウインドブレイクを打つてくる。狙いを甘くしているのか、少し避けねば当たらない。

「アナタに、母親（私）らしい教育をしてあげましょうと思い、この騎士甲冑を持ち出しました。

さあ、構えなさいルーティア！！」

私は、タケミカヅチ（斧形態）を月衣から引き抜き、そのまま下に下ろした。

「構える前に……お母様、一つお聴きたいことがあります」

「……なにかしらルーティア？」

「この教育は、昨日の事でのお母様の私怨から来るモノですか？」

「私怨？ それは違いますルーティア。これは、教育です」「教育……ね、

「……分かりましたお母様」

私は、タケミカヅチを正段で構え、

「始めましょう、最初で最後、全力全開の話し合いを」

12本のソード・オブ・ガーディアンを月衣から出現させ、翼のように浮遊させる。

それを見たカリースお母様　　いえ、烈風カリンは、杖剣に風を纏わせた。

始めて動いたのは……私だ。

「ダンシング・エッジ！」

12本のうち6本のソード・オブ・ガーディアンが、カリンお母様めがけ真っ直ぐに飛んでいく。それから少し遅れて、私も低空フライ（ガンダムのドムのような移動を想像してほしい）を使い、間合いで詰めていく。

「甘いですよルーティア！」

向かってくる剣を、お母様は杖に纏させただけの風で吹き飛ばした。もっとも、それくらい予想済みですよお母様。

瞬動。

ソード・オブ・ガーディアンが、お母様の作りだした風で吹き飛

ばされる。

私は、それらをとんぼ返りをしながら空中で見届けた。そして、ソードたちを吹き飛ばした風はそのまま先ほどまで私がいた場所を吹き飛ばしていく。

「それぐらい、分かつていますよ！

行け！！

残していた4本のソード・オブガーディアンを打ち放つ。それらはお母様の左右から別々に襲い掛かった。

「くツ……！？」

ガキ、ガキインツ！！

空中でソードたちがぶつかり火花を上げる。

お母様は、後ろに飛んでソードたちを回避していた。

「その程度で……」

「ハアアアアア！！」

「ツ！？」

だけど、それは次の攻撃のための布石。虚空瞬動が未だ不完全な私は、残していたソードを足場にして、4本のソードたちを避けたばかりのカリンお母様の懷に、瞬動で一気に切り込んでいった。

「甘い！！！」

踏み込みが甘かった。細身の杖剣では斧形態のタケミカヅチを受け切れないと考えたのか、カリンお母様はとっさに杖に風を纏わせ、タケミカヅチを、いなし。先端に重量が集中する斧形態、さらに全力で振り下ろされたタケミカヅチは、そのまま地面を深くえぐつた。

「これで……ツ！？」

私が作ってしまった隙を付かれ、杖剣を振り下ろされる。

「まだです！！」

だが、まだ引き下がるわけには行かない。タケミカヅチから左手を離し、空中に出現した柄を握り締める。そして、それを一気に引き抜くと、振り下ろされる杖剣を受けとめた。

「さすがお母様、この程度の小細工では虚もつけませんでしたね」「……褒めて、手は抜きませんよルーティア？」

「ガキンッ！ 受け止めていた杖剣が風を纏い、受け止めていたソ

ードを撥ね退ける。私はそれを後方に跳んで回避した。

「一つお聞きしますお母様、なぜルイズお姉さまに優しくしてあげられないのですか？」

「私は、優しくしていますよルーティア？」

弾かれた左腕が痺れる。それをタケミカヅチに添え直すと、

「なら、もつともつと優しくしてあげてください」

「……それは、私に勝つてから願いなさい」

「分かりました。では、是が非でも負けられませんね」

唇をペロッと舐めると、私はソード・オブ・ガーディアン達を集結させた。

お母様は風の偏在を唱え、その数を増やす。

さあ、口からが本番だ。

Another side

やけに朝から騒がしいな……。そう思つてベッドを抜け出し、メイドを呼んで何かあつたのかを聞くと、

「お、奥様とルーティアお嬢様のお二方が、練兵場でた、戦つているんです！」

戦つている？ カリースとルーティアが？

「はい！ 奥様は騎士甲冑を、きやつー！」

くつ、何だこの揺れは！？

「ええい！ あの二人は何をまったく何をやつているんだー！」

長年愛用している杖を取り、寝巻きの上にマントを羽織る。

カリースが騎士甲冑を持ち出したとなると……ワシと屋敷の衛兵達

とで対処できるだらうか？ もしかしたら軍隊を出さねばならないかもしね。そう思いつつ、無理やり止めると後でどんな罰を与えるかが頭を過ぎり、身が震えた。

「……ジエローム！ 衛兵たちを集められるだけ集め、至急練兵所へ向かうぞ！」

「はつ……ですが、奥様をお止になると」

「私だつてカリーヌは怖い。だが、父親として止めねばならん……。まつたく、何で私はこうも妻に頭が上がらないんだ。

*

「あらあら……なんでしょう？」

お屋敷の方から煙が上がつて

「はあ？ カトレア、いつたい何を……って、ええ！？」

確かにお屋敷の方から煙が上がつていた。それを確認した次の瞬間、一筋の閃光がラ・ヴァリエール邸付近から空に向かつて伸びていた。それから数瞬置いて雷が落ちたような音が辺りに響き渡つてくる。

「い、いつたい何が？？」

「お母様……でしようか？」

昨日ルーティアちゃんが帰つてるはずだから、もしかしたら魔法を教えてるのかも

確かにお母様なら、風のスクウェアスペルの一つ、ライトニング・クラウドを使いこなせるが……。

「いくらなんでも、なんか変よ？？」

土煙が上がり、遠めに見ても分かるような大きな竜巻がそれを巻き上げている。地上から、空から閃光が走り雷鳴が鳴り響き、何かが爆発しているように見える。

「なんだか分からぬけど、すつゝくやな予感がするわ」

「エレオノール姉様、実は先ほどから私も……」

「屋敷に向かうわよカトレア！」

「ええ、アストレア、セットアップ！！」

『いやー、久々の登場なのにコレで終わる気が（「』

*

我が娘ながら、恐ろしいと感じたのはコレが始めてだと思つ。まだ未熟すぎる子供が親に反抗するなど、あつてはならぬ事だと思い躰をしてあげるつもりだつたが……、

「バースト・モード、セット！ 雷撃砲、ファイエル！！！」

「くつ！？」

まるでカノン砲の砲撃……いやそれ以上だ。最初はライトニング・クラウドかと思つたが、発動している感覚があまりにも違つ。あの魔法独特の冷却感や、空氣の流れがまったく感じられない。

「まだです！ 行け、ソード・オブ・ガーディアン！ 錬金・爆破！！！」

私の周囲が突然吹き飛び煙が舞う。いつたい何を錬金したのだ？いや、それよりも私の視界を奪えば攻撃が通るとでも思つているのですか？？ 単調な動きをする剣を風で弾き飛ばし……な！？

「ライトニング・ブレード・ダンシング！！！」

弾き飛ばしたはずの剣が、突然雷を纏つた刃を噴出し剣戟を繰り出してくる。それだけではない。雷の刃を振り回す剣の間を、縫うように飛んでくる剣もある。全力のフライでそれらを回避し、避ける事のできなかつた物だけを杖剣で弾き飛ばした。

「この程度で墜ちま……」

「分かつていますとも！！」

つ、何時の間に後ろに！？

「はああああ！」

「ストーム・ブレイク！！」

咄嗟に複数の風の槌を竜巻のようにして放つ、ストーム・ブレイクでルー・ティアを弾き飛ばす。さらに、体制を立て直させまいと、偏在の一つが素早く呪文を詠唱する。

「カッター・トルネード！！」

未だ空中できりもみ状態のルー・ティアに向けて、真空の刃を持った竜巻を放つた。狙いたがわず竜巻はルー・ティアに向かつていくが

「グ……錬金・連爆！！！」

竜巻の中で複数の爆発が発生する。爆発は竜巻を揺らし、バランスが崩れ崩壊していった。そんな方法が？ 私は杖に神経を集中させ竜巻のバランスを持ち直させる。

だが、その隙にルー・ティアは体勢を立て直し、剣をカッター・トルネードを迂回させて飛来させてきた。

「ブレイド！」

「ライトニング・クラウド！！」

飛んできた剣をブレイドで弾き飛ばし、ライトニング・クラウドで受け止めながら回避する。

よし、何本か折る事ができた。剣は、後何本残っている？
それより、もう精神力が限界のようだ。前にこれほどまでの魔法を使つたのは何時だったか……。

「はは……、限界？ 私は何を言つているのだ？

火竜の群れを討伐した時よりも、吸血鬼の群れをなぎ払つた時よりも……この程度のモノだつたか烈風カリン？
違うだろう！！」

そうだ。決してこの程度ではない！

「……デル・ウインディ……“ライトニング・ストーム！……”

私の中で、何か……籠の様な物が外れた気がした。

使えるかどうかも分からぬ。そもそも呪文すら知らない、今思ついたばかりの魔法。だが、私には分かる。コレが私の力だ！！

Another side out

お母様が、巨大な雷の嵐を作り出し私を取り囲む。こんな隠しダマを持っていたなんて……だが、私も負けられない。

「はああー！」

タケミカヅチ達にライトニング・ブレイド（完成版）を纏わせ、雷の嵐にぶつける。

「クッ、まだまだ……です！！」

お母様も負けじと流し込む魔力を増加させてくる。まずい、もう……殆ど魔力が制御できない。

お母様の力に押され、ソードたちは悲鳴を上げて弾け飛ぶ。

「負けま、せん！！！」

ブレイドと嵐が接触した場所が、次々と小爆破を繰り返す。

負けない！

負けられない！

勝つて、お母様にもっと優しくしてもらひうんだ！！

「うおおおおおおおおーーーー！」

「なつー？」

私は、タケミカヅチに取り付けていた結界炉に残りの風石を全て注ぎ込んだ。

安全装置？ そんなもの初めから無い！ 引き金を引くたびの、風石の中に圧縮されていた魔力が急激に解き放たれる。そして、タケミカヅチから発せられるライトニング・ブレイドの密度が急激に高まつていった。

「ウヰルおおおおおおおお...」

じりじりと、お母様の雷の嵐を押し返していく。

「あたし、おまえがいい……」

アシ

二〇

ま、まだ……後ちょっとなんだ

思いの限りにタケミカヅチを振りぬき、お母様の嵐を一瞬だが弾

毛呂山

タケミカヅチが、魔法に耐え切れず、内側から爆発する。
そして、完全に押し返しきれなかつた雷の嵐が私を襲い……、

世界に紅き月が昇つた。

楽しく転生19（後書き）

烈風カリンとの激闘です。

カリンさんの実力がぜんぜんチートっぽくないのですが……そこは作者の実力不足です。○「」

ちなみに、戦闘中オリ主は〇〇〇の力をほぼ使用していません（“節制の宝玉”で〇〇〇を押さえ込んでないと勝手に発動しまうので）。純粹に人として、娘としてバトルしています……。

執事は……。

はやての「」とくより。……と言つか、もつど「」でも必須なスキルですね。明言していくよく知っているのは、「」の作品だけですが。

最初で最後、全力全開……。

リリなの（無印）で、フェイトと全力勝負した時のセリフ……。
若干うろ覚え。

母と娘との全力バトルにはもつてここのセリフだと想い採用。

いつもより多めでしたが、誤字や脱字などを見つけたら「」指摘ください。

感想も随時募集しておりますーー！

楽しく転生20（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

現世は、偽りに満ちた夢幻……。

暗き夜に垣間見るは、眞の夢（現実）……。

そして、眞実（世界）を蝕むは……紅き刃。

*

痛みが意識を覆い隠し、“節制”の鎖が引き千切れる。

終わりをもたらす刃は、私の静止を振り切り、世界へと解き放たれた。

Another side

「アイン……ソフ……オウル」

「な！？」

突如出現した紅い刃が、練兵所ごと私の放つた雷の嵐を切り裂いて行つた。

まだ、こんな奥の手を隠し持つっていたのか！？

そして、切り裂かれた嵐の中から、真紅の刃を放つ白亜の剣を持つ我が娘 ルーティアが現れた。その姿は雷の嵐に焼かれ、服や一部の皮膚がボロボロに炭化している様にも見えた。そして、白亜の剣はバラバラになり娘の周囲に浮かぶ。

娘の姿にやりすぎたと思つていると、小さな羽の様になったモノの一つが光を放つた。すると、まるで何事もなかつたかの様にルーティアの負つていた傷が消えてなくなつてしまつ。

「ツ！？」

そんなバカな！？ アレほどの深手が一瞬で回復しただと？？

「ルーティア、アナタは一体……ツ！？」

問いただそうとした私を、蒼く光る瞳が射抜いた。なんだあの眼は？ ルーティアの眼は紅ではなかつたか？？

「くつ！」

すぐさま杖剣を構え直す。油断するな。アレは……ルーティアなのか？？ そんな疑問を自らに問いかけて見るも、その答えは出ない。誰かと入れ替わつたわけではないはずだ。あの娘の持つ独特の気配や力（異能）は、そうそう真似できるものではない。

それに、もう片方の瞳はルーティアの紅なのだ。だが、その瞳からは意思の光がまるで感じられない。対照的に、蒼く光る瞳は底冷えする様な冷たい視線を私に向けてくる。

スッと娘の左手が上に、そして私に向けて伸ばされる。それに答えるようにして、白亜の盾が私に向かつてくる。なかなか早いが、対処できないわけではない！！

私は、フライで浮かび上がると複雑な機動で襲い掛かつてくる羽達をかわし距離をとる。そして、偏在と共に二重のライトニング・ストームを撃ち放つた。が、

「なつ！？」

白亜の羽が集まり、一つの巨大な盾に姿を変える。そして、二重のライトニング・ストームを完全に防ぎ切つて見せた。

「お母様、一体何があつたのですか！？」「カトレア！？ それにエレオノールまで！

「下がりなさい二人とも！ 今は事態を説明している場合ではありません！」「

『そう言つわけにもいかねえぜ公爵夫人。こんな訳の分からねえ状

況を作ったのはあんたと、あのルーティア嬢だ……っ！？ 避ける

！』

「あぶない！！」

ツ！？ 危なかつた。白い羽が、私たちに向かつて襲い掛かつて来ていた。

……それにしても、あのカトレアやクランにまで攻撃を加えるなんて、

*

「ルーティアちゃん！ 正気に戻つて！－！」

「…………」

「ルーティアちゃん！」

私の声も聞かず、ルーティアちゃんの掲げられた左手に雷の刃が生まれる。いや、

『カトレア、ルーティアの声を拾つた』

「“ヤメ……ヤメ、テ……”？」

「……ルーティアお嬢様は、助けを求めているんです」

助けを？ ……まるで、前にアストレアさんから見せてもらつた“お話”に出て来たあの人みたい。自分でどうしようもできない、呪われた終わりを繰り返す彼女の様に……。

「なら、私がやる事は一つね？」

『カトレア？』

「……不屈の心はその胸に」

『ツ！ ……了解だマスター！』

『全力全開で打ち抜く（きます）！－』

*

「奥様は、エレオノール様をお願いします！！」

「ま、まちな……！」

私はそう言うと、奥様の静止を振り切り地面を蹴つて走りだす。ルーティアお嬢様を助ける。その為に、私は空中に手を伸ばす。手を伸ばしたそこに剣の柄が現れ、ソレを一気に引き抜いた。

前の私は、ただ殺せと命じられていた。ソレが、私たちの役目でもあつたし、彼女と取り分けて面識があつたわけでもなかつたから……。

だけど今の私は、命の恩人のルーティアちゃんにそんな事は出来ない。いや、したくもない！！だから、私の中にあつたこの力は、この思いを成し遂げるための力なんです！

「お嬢様！」

お嬢様の振るう雷の剣を手にした剣……いや、ハリセンでなぎ払つた。

パリーン！！

まるで、ガラスの割れた様な音と共に雷の剣が砕け散つた。もう一度！

「はああ！！」

スッパーン！！

小気味良い音と共に、ハリセンの一撃がAIN・ソフ・オウルに弾かれた。

「くツ！」

『アストレア、モード・ヴァーチュ！』

『GNバズーカ、GNキャノン、シューート！』

私が一撃を与えた場所に、カトレアお嬢様が放つた桜色の砲撃が打ち込まれる。だが、

『対象へのダメージ……ゼロ。む、無傷だと…？ そんなバカな！

『』

鉄壁の守護を誇るアイン・ソフ・オウルの“慈愛”が、ルーティアちゃんを包み込み守りきっていた。

「……アストレアさん、“アレ”いけるかしら？」

真剣な眼差しで、自らが持つ杖に問い合わせるカトレアお嬢様。

『……無茶だ！ 今“アレ”を発動させたら、病み上がりのカトレア姉さんの身体にどれだけの負担がかかるか十分に解つてゐるでしょ！？』

「でも、私たちにできる最大の一撃は“ソレ”しかないわよ？」

あの一人には、“慈愛”的防御を抜くための手段が何かあるようだ。なら、

「お二人は、あの羽の相手をお願いします！ 私はそのスキにお嬢様を止めます！！」

「お待ちなさい！ あなた達だけには任せられません」

奥様？ エレオノール様は……避難させたのですね？？

「それに……コレは元々私とルーティアとの問題です。

私が、決着をつけねばいけない事」

立派です。でも、

「……そもそも言つていられませんよ奥様？」

七枚しかないAIN・ソフ・オウルの羽が数十倍に増えていた。

おそらく“信頼の宝玉”による認識操作でしょう。これ以上時間とかけていたら、お嬢様が飲み込まれてしまふかも知れない。

「はああ！！！」

雪崩れ込む様に襲つてくる羽達を、私は手にしたハリセンでなぎ払う事で消し去る。カトレアお嬢様や奥様も魔法で応戦するが、打ち落としきれずにアストレアさんが発生させてている防御力場の中で耐えている。

私は、二人に襲いかかる羽を全てなぎ払う。

「奥様、それにカトレア様！ 援護をお願いします！！」

「分かつたわ、アストレアさんも行きますよ？」

『あ～もう！　了解ですマスター！！』

「……仕方ありませんね。この状況で、唯一の対抗手段がアナタだけのようですし」

よし！　私はお嬢様に向き直り、剣　ハリセンを正段に構えた。視線の先には、幾千もの羽を引き連れ、両の手に雷の巨剣をもつ白い少女。

きつとあの人も、こんな気持ちで　絶望の中で、魔剣を握っていたのだろうか？？

でも、

「でも、もう終わりにしようルーちゃん。私が、絶対助けるから！」羽の大群をハリセンでなぎ払う。そして、

「『トランザム！！』」

むき出しになつたルーちゃんにカトレア様とアストレアさんの砲撃が突き刺さる。だがソレは、全てアイン・ソフ・オウルによって阻まれる。

「「「ライトニング・ストーム！！」」

そこに、偏在も動員して三本のライトニング・ストームを打ち込む奥様。その攻撃に、アイン・ソフ・オウルが縛り付けられる。

「この時を、待っていました！！」

ルーちゃんに接敵し、振り下ろされた両の手の雷を打ち碎く。そして、

「リミット・ブレイク！！！」

私の思いを全て乗せたハリセンを振り下ろし……、

スパーン！！

紅い月の昇る世界に、小気味良い音が響き渡つた。

・・・・・・・・

気がついて最初に眼にしたのは、空に上るたつた一つの紅い月。

「……ここは？」

何処だらうと言つよりも早く、

「目が覚めましたかルー・ティアお嬢様？」

クランさん？ それに……お母様にちい姉様、それとエレオノール姉様？ 皆さんなんだかボロボロです。

「つー？」

……どうやら、私もボロボロのようです。

身体中が痛い。しかも頭は鈍痛が酷い。そんな頭を無理矢理持ち上げて二、三度ほど振つてみる。

「お嬢様、ムリをしないでください」

……いつたい何がどうなつた？

たしか、私はお母様とO・H A・N A・S H Iをして……。

それからタケミカヅチが私の魔法に耐え切れなくなつて爆発して

……。

それから……それから……。

「……AIN・SOFT・OWUL？」

爆発した瞬間、私の静止を振り切つて白い七つの羽が広がるのを見た気がした。

「……そうです。

お嬢様は、AIN・SOFT・OWULを使つてしまい……」

「負けたのですね？　自分自身に」

使わないと決めていた。

使えば、それこそ本当の殺し合いになってしまつ。いや、一方的な殺戮になつてしまつだろう。戦争ならまだしも、親と子の話し合いで使うべき物じやない。だから、使わないと決めていた。なのに……。

ギュ！

「クラン、さん？」

「大丈夫ですお嬢様。

お嬢様は、負けていません。

私の最後の攻撃、アレを防がなかつたのは紛れも無くお嬢様の意思です」

……うつすらとだが覚えているのは、金色に光るクランさんと“希望の宝玉”による因果操作を止めたと言つ感覺だけ。

「ん！　んん！！」

なんですか？　ＫＹですよエレオノール姉様。

「え～っと、いい加減ここから出たいんだけど……ゲッコウだっけ？　解いてくれないかしら？？」

それに、いつまでも壊れた実家を見ているのもいい気分じやないし……」

そう言つて示された先には……、

「うわ……」

うわ、じゃないですね。完全に瓦礫の山……と言つかクレーターになつて消滅してしまつているヴァリエール邸がありました。他にも、焦土と化したヴァリエール領が回りに広がっています。もしこれが、月匣の中じゃなかつたら……。ゾッとした光景です。

「……すみません。今すぐ解除しますから……よし！」

世界全体にヒビが入り砕け散る。その向こう側から、（アレに比べたら）多少崩壊したヴァリエール邸と、未だ平和なヴァリエール領が現れました。

なにやら周りがうるさいですが……、

「クランさん。なんだか、すつごい迷惑をかけてしまって……ごめんなさい！」

「大丈夫です。私は、お嬢様がまた心から笑えるようにするお手伝いをしただけですから」

クランさん、その笑顔がとってもまぶしいです。

楽しく転生20（後書き）

烈風カリン（+カトレア、クラシ）とルーティア（魔王化？）との戦いでした。

……オカシイなあ。本当は、マンガでよくある朝チュンみたいに終わらせるつもりだったのにいつの間にやらバトルに突入。高レベルな戦闘描写がまったく○○○な感じです。実力不足が痛感できます。

でも、じつするしかなかつたんだーーー！

ふう。

今回の戦闘は、やたらと飛んだことをさせてみました。

まずは、カリンさんのメイジとしてのランクをブレイク。一段か一段ほど上がつてもらいました。さらに偏在と組み合わせて、擬似贊美歌詠唱を行っています。複数の魔法行使も、しちやつてるかな？？

カトレアさんは……説明するまでもないですね。ちなみに、B-Jはヴァーチェを意識してズングリムックリな甲冑です。もちろんキヤスト・オフもできます。

カトレアさんが遅れた理由は馬車で移動していたからと、飛行特性が低かつたと言つ事で……。あとは、まだ本調子で魔法が使えないと言う理由です。

そして、クラン・ベル。

NWの世界からの転生者で、シャイマール戦で脱落したウィーザードと言つ設定です。

持つている武器は……あのハリセンです。ハマノツルギ破魔剣です。

なぜ持つているのか？ きっと誰かが持たせてくれたんでしょう

(おい)

アリアンロッジの世界からの転生も考えましたが……それはまた別に(え)

ちなみに、本人にも微弱ながら破魔マジック・キャンセラーの力が宿っています。

かなり無理矢理感がありましたが、とりあえず戦闘はここで一旦終了です。

あ、エレオノールさんは今のところノン・チートの一般人です。落ち着いてるのは、戦闘終了からかなりの時間がたったからです。

感想お待ちしています。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたらご指摘ください。

楽しく転生21（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

模造された世界　月匣から帰還した私たちを出迎えたのは、半壊したヴァリエール邸と、

「さて、二人とも。この惨状を見て何か思う事はないかね？」

普段は滅多に見る事のできない　心底怒っているお父様でした。改めて周りを良く見てみると……、私たちが戦っていた練兵所はレンガ作りの小屋に壁や整備されていたグラウンドは全壊。これは、修理ではなく作り直した方がいいですね？

他には、風魔法や爆発の余波で屋敷中の窓ガラスが割れていったり。家に何個か立つていた尖塔も、真っ二つに両断されて転がっています。外壁の一部も吹き飛び、作ってもいらないのに新しい堀が出来ていたり、大穴が開いて泉が出来てしまつていたり……。

幸いにも使用人たちも含めて重度の怪我人は出ていないようです。

「で、一人とも何か言つ事はないかね？」

すつごく怒った顔で説明してくれたお父様が、言つ事はないかと聞いてきた。
ううと……、

有意義なお話し合いでしたと言つ?
素直に「ごめんなさい」と謝る?

……つて、私は何を考えているんだ!

「こ」は素直に、

「ごめ……」

「ええ、とても有意義な親子の会話が出来ましたが、なにか?つて、お母様!?　へんな電波でも受信してしまいましたか?!」

お父様もそんなに険しい顔をしないでください……。

「お前たちは、反省する事はないのか！？」

「そうですね、すこしはしゃぎすぎた気がしますね」

「いえ、ハツチャケ過ぎてますよお母様？　お父様も呆れてしまつたのか、頭を抱えながらぶつぶつと屋敷の修繕をどうするか考える事にしたようだ。」

「まあ、たしかに少し話し合いで熱が入りすぎたことは認めましょう」

「お母様、少々じゃないですよ？？」

「このところ魔法の鍛錬や練武を怠っていたせいか、私も少々腕が衰えてしまったようですので……娘の稽古もかねて久々に張り切つて行きたいと考えています」

「え……何を言つてるのですかお母様？？　それを聞いたお父様も、田を点にして……やたらに頭を抱えながらうなつっていた。」

「この事件の後、稽古の名田でお母様と頻繁にO・H・A・N・A・S Iをする様になりました。なぜかクランさんも一緒にです。なんでも、

「こうしていれば、ルイズをしかる時間が減ります」

「だそうです。」

「まったく、素直じゃないですね。」

*

「そうそう、お母様との話し合には結果として私の“一応”負け……と言つ事になりました。」

「なので、ルイズがお母様にしかられてその度に泣いたり猛勉強をしたりと言つ事には変化はありません。ただし、」

「毎日ルイズお姉様を抱きしめてあげる事。一度でなく、何度もで

すよ？

あ、隠れて抱きしめるのはダメですよ？

最低でも、一回は皆が見ている場所でやつてくださいね？」

元々サシでの話し合いだったのに、三人（+一枚）がかりでもぎ取った勝利です。いつの言い分を少しづらい通してもバチは当たりません！

よくよく思い出してみると、私……と言つかルイズお姉様はお母様に抱きしめられている姿を見た事がないんですね。

『子供の愛し方が分からぬ時は、まず抱きしめてあげてください』お母様とルイズお姉様には、愛が足りないんですね！ それに厳しくされるだけだと、子供は親を“敵”としか見なくなっちゃいますしね。

それから、お母様に抱きしめられているルイズお姉様を良く見れるようになり、

「あんなにルイズがやつれていたなんて……まつたく気づかなかつたわ」

と、お父様と真剣に話し合っているお母様が見れたので、後は何か成るでしょう。

今の時点ではまだですが、一年後くらいには、テラスでお茶をしながら談笑しているお母様とルイズお姉様の姿が見られる様になりました。ただ、内容が難しい魔法理論の勉強だつたりするんですけどね。

*

……全部順風満帆には終わりませんでした。

一つだけ問題が出ました。

『だから無茶だつて言つたんだよ！ まつたく……』

アストレアさんが、ベッドで眠るちいねえさまをしかつています。どうもちいねえさまは、肉体的には完治していても魔法を十分に使える状態までは回復していなかつたようです。そこに魔力を大幅に引き出させる魔法版“トランザム”を使用した事で症状が悪化、予定していた魔法学園への入学が先送りになつてしましました。

アストレアさん曰く、少なくとも一年間は絶対魔法を使っちゃダメらしいです。他にも、この状態が本当に完治するまでソレから数年はかかるかもと……。

“賢明の宝玉”もソレを妥当だと判断しています。

安静が必要なちいねえさまにルイズお姉様を任せて、自分は領地に戻つて開拓に専念するわけにもいきません。いろいろと心配なんです（主にルイズお姉様が）。

なので、私達はこのままヴァリエール邸に残る事にしました。もちろん領地の開拓もしなければいけないので、
「お母様、 “風の偏在” を教えてください！」
と言つて、お母様から風の偏在を教えてもらい、偏在の方で領地を見て回つてもらつてます。一応、領民の安全のために本体が月一で視察に向かう事にしました。

時間ですか？ 築で飛んでも半日とかかりません。全力で飛べば音速も突破できそつなので、数分で到着ですね。

閑話休題。

そう言えば、タケミカヅチにソード・オブ・ガーディアン……全壊でしたね。

ソードの方は12本全部が粉々に割られていて、タケミカヅチは結界炉の爆発で……僅かな破片だけを残して蒸発しています。

「うーん、よく無傷でいられましたね私たち（笑）」

人間一人くらい蒸発できそうな熱量が放出されてと思つんですけどね。

さすがに自分の作品たちが粉々に壊れてしまったのは應みました。もう残骸としか言えない彼らの前で o_rz をしています。

それを見たお父様が、代わりに杖剣をプレゼントしてくれると言つてくれました。

「それは、とてもうれしいのですが……タケミカヅチみたいな剣を作れる職人さんはいませんよね？」

そう言つと、お父様も渋い顔をして呻つてしまつた。ためしに王都の職人にタケミカヅチの設計図を見せたところ……『ゲルマニアでも、こんなカラクリは作れない』と言つてしまつた。しかも、結界炉の原理も理解できなかつたため『なんですか、この飾りは?』とまで言つてしまつた。

「絶望した！ 魔法と機械工学の研究が進んでいないこの世界に絶望したあ！！」

と、某絶望な先生を真似てみたとかみなかたとか……。
絶望しても始まりません。

仕方ないので、もう一度タケミカヅチとソード・オブ・ガーディアンを作る事にしました。

ただ、もう一度作る際にお母様からアドバイスを貰いました。
「ライトニング・ブレイドを個別の剣から発生させて使うなら、それ専用の強靭な剣とそれ以外の剣に分けて用意するのがいいでしょう。

本当なら、あの雷の剣を十本や一十本程同時に制御できるのが理想的ですが……あなたがやつたように雷の合間を縫つて剣で襲わせるのも有効な手です」

さすがに十本、二十本も制御できないですよ。あれ？ でも、やれない事はないか？？

まあ、確かに強靭な剣にだけ魔法をかければ壊れる事も少なくなりますね。

そこで、某剣の世界にいるファリスの重戦車様の必要筋力値24のグレソよろしく、重く分厚くでつかい剣を鍊金しました。新生ソード・オブ・ガーディアンの数は、十一本から数を減らして七本です（AIN・SOF・OWULと同じ数にして、いざと言う時に誤魔化

すため）。せりへ、今まで使っていたソードと同じ一、二本の剣を“コモンズ・ソード”としました。

「さあ、新生ガーディアンとコモンズの舞。見てください……」
総勢十九本の剣の舞です！

「甘い！！！」

「わー、だめだー！！！」

バリーン……。

作つて早々、お母様に打ち碎かれてしまいました。なんか一瞬、どこかの（名前だけ）精銳部隊のやられる時の声だった気がしますが……氣のせいですかね？？

後日、お父様がトリステインで一番の職人さんに、壊れてしまつた七本のガーディアンと十一本のコモンズの製作を依頼してくれました（これらは特殊なカラクリもないでの、材料と技術さえあれば問題なしです）。

タケミカヅチだけは、どうしても私が作らなければいけないのでは……設計を一から練り直すことにしました。

「結界炉はココで……あ、でもココをこうすると変形機構に支障がある……。

そうだ、刃の形状もえて……」

などと、夜な夜な設計図と睨めつゝ。たまに試作品を作つてテストしてみたりです。

結界的に、私が納得のいく新生タケミカヅチ　タケミカヅチく雷風ゝが完成するまで一年の歳月がかかつてしまいました。

*

「……で、今度はなんですか“自称天使様”？」
『だから、いつまでも“自称”を着けないでよー』

私は今、ネガ反転した世界で某「スロリ天使」に良く似た“自称天使様”と対談中です。

『存在が薄すぎてすっかり忘れていましたよ。

『まあ良いわ。ソレよりもちょっとだけ厄介な事になつたわよ?』

「厄介な事ですか?」

『そう。この前アナタが暴走しちやつたでしょ?』

「ああ、ありましたね。それで?」

『世界の免疫力がね、アンタを敵として認識しちやつたのよ
ガツテム! なんと言つことでしょ?... なんて、某世界
の守護者なら言ひそうですね。』

「世界の免疫力……“勇者”の産出ですか?」

『ファー・ジ・アース風に言つなら、たぶんそれで良いのかな?
一応こっちで手を打つておいたから、あからさまにアンタを殺し
に来る“勇者”は出ないとと思つよ?』

「おお、凄いサービスですね。

でも、なんでそんな事を??.』

『また暴走されても困るからね。

……ほんとは、こいつやって教えに来るのも“ルール違反”なんだ
けど、ギリギリグレーボーンかな?』

「グレー・ゾーン??.』

『危険な事を抽象的に知らせる 虫の知らせみたいなヤツね。
詳しく述べられないけど、あなたを倒すための“勇者”的“代理
”の管轄は私じゃない。

クランもアストレアも、元をたどっていくと“勇者”になるわ
「なるほど、だから“ハマノツルギ”ですか?』

クランさんが、あの武器を持っていてくれて助かりました。

『……これ以上は、さすがに危ないわね。

それじゃ、がんばつてもう一つの可能性を楽しんでね?』

そう言い終わると、ネガ反転していた世界が消えてなくなり、いつも世界に戻ります。

「……ま、何はともあれ“今”を楽しみましょうか」
作業台の上から、組み立ての終わった“新しい篠”を手に取り自分で
分の部屋を出る。

そして、

「ルイズお姉様！ 空を飛びましょうーー！」

楽しく転生21（後書き）

今回は……、事後処理の様なお話でした。

駆け足でしたが、まあ今回はこんな感じで。チート無敵な転生者って、殆どの場合烈風カリンに勝っちゃうんですね。だから、趣向を変えてオリ主を負けさせた。だけど、このままじゃルイズが凄惨な事に……。そう思いカリンさんには『ルイズを抱きしめる』と言つ義務をさせました。

原作を読んでいて、なんだかこの一人は親子のスキンシップが取れていらないんじゃないかと思います。なので、カトレアさんの代わりにカリンさんに一杯ルイズをモフモフしてもらいます。

カトレアさんとアストレアさんは、ちょっとだけ退場してもらいます。

病弱で上手く学校に通えなかつたと言つ演出です。ちゃんと卒業しますよ？ 病気（魔法的な障害）で出席日数とかが足りなくなつて留年したりする予定ですが。

久々に登場“自称天使様”（笑）。

やつぱり複数の転生者（主人公属性持ち）がいると言つ設定にしました。

彼らが、オリ主ルーティアと敵対関係を取るかは別としてですが……。

理屈として、彼らは“勇者”です。オリ主を倒すために世界が用意した特効薬です。詳しくは、NWのスターダストメモリーを読んでください。

そろそろストックがなくなりそうです。

ノンプロットで、勢いで書いたストックは命！ とにかく、最低

限オリ主たちが魔法学園に入學して春の使い魔召喚の儀まで書かないと……。

感想お待ちしております。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしません。見つけたら、指摘ください。

楽しく転生22（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

「ルイズお姉様、もつと肩の力を抜いてレバーを倒してください！
そうじゃないと、いつまでたっても機首が上を向いたままでよ

エッポーン!

ああ、
あたまにかまへた。

私は、レバーを操作して簾を反転させ、泉に落っこちたルイスお姉様の直ぐ横で機首を水平よりやや下に向けてホバリングします。

「大丈夫ですかライズお姉様？」

「ハッ！ 二ヶ月なんともないわ！」

何度もすふ濡れになりながら、それでもライスお姉様の瞳には諦めの文字が浮かぶ事を知らない。とても頼もしい事です。

和たちは、この内にある泉の上で“簞”の絶景をしています。

ルイズお姉さまも、すこく空を飛ひたがっていましたからね。

なので、まだ試作段階の“篇”をカムフラージュしておいた。ドクタ、最初は『四つの口』がどういはーいがーーー

を拒否されました。

うん、がんばってくれるのはすっごく嬉しいんだけど……悲しいですね。私は、ルイズお姉様の前ですっごく落ち込んだ様に振る舞いました。

するとルイズお姉様は、

「わ、解ったわよ！ ルーティアのプレゼント、ちゃんと受け取る

から、
ね？」

一
わ
い
！

「……ルー、あんた演技が上手くなつたわね？」

「てへへ。でも、ルイズお姉様に受け取ってくれなくて悲しかったのは本当ですよ？」

なにしろ、ルイズお姉様のためにだけ作った箒ですからね。

そして今は、ルイズお姉様と一緒に練習中。遠くでクラントお母様が見ています。

練習場所として「口を選んだのは、もし落っこちても下が水なのでクッショնになってくれるからです。なにしろルイズお姉様は、最初に練兵所で練習をした時に顔面から地面に突っ込んだんです？ 危なくて地面の上で練習なんてさせられません。

低いところよりも安全だうと、一度だけ高高度で練習をしようと連れて行つたんですけど……。ルイズお姉様に大泣きされたあげく、着地後はそのままお風呂に直行でした。理由は、ルイズお姉様の名誉の為に伏せておきます。

閑話休題。

最初は筧から何度も墜ちていたルイズお姉様でしたが、こつを掴んだのかグングンと腕を上げてきています。簡単なローリングや背面飛行などの曲芸飛行にも挑戦しているようです。最近は高度1000メイルで飛ぶ事ができる様になりました。

これは、私が筧に何度も改良を加えた結果でもあります。さすがに高高度からの転落は、冗談抜きで死んじゃいますからね。筧に落下防止装置を何重にも取り付けましたし、それで発生した出力不足を補うために結界炉の改良や増設などなど……。最初にプレゼントした時より一回りくらい大きくなっちゃっています。小型化が必要ですね？

ちなみに、エレオノール姉様が私の作った筧を見てすっごく悔しそうに、

「私にだってねえ、姉としてのプライドがあるのよー！」

そう言って、私から結界炉と筧の図面と理論、それに現物を無理やり奪い取ると研究室に筧もつてしましました。

……別にかまいませんが、後でオシオキダベー！！

「妹の物を取り上げるとは何事ですか……」

「『ごめんなさいお母様！』」

でも、私がお仕置きする前にお母様が天誅を下してしました（笑）。

*

私達　私とお母様にクラインさんと一緒に紅い月匣の中で魔法の訓練をしています。

理由は簡単、私達が魔法の練習をすると被害が尋常じやないからです。

練兵所の一件で『話し合ひなら、誰もいない安全な場所で好きなだけしていなさい！』と、お父様にしかられてしまって……屋敷の近くの山でO・H A・N A・S H Iをしたら山の形が変わってしましました（笑）。

どうもお母様、いつの間にかスクウェアの壁を超えてペンタゴン（？）に昇格していたようです。我が母ながら恐ろしい事で……。幸い他の領地に迷惑はかかりませんでしたが、お父様の胃腸がとてもやばい事になりました。

なので、誰にも迷惑のかからない月匣と言つわけです。ここなら思う存分暴れても問題なしなのです！

「でも、ハツチャケちゃうのはいけないと私はお母様？」

そう言つて、カツタートルネードでズタズタになつた高層ビルの様な障害物を見上げます。これ、鋼鉄並みの強度を持たせているんですけど……真つ二つになつてます。

「アナタ相手だと、手を抜いていられませんからね。
なんですか絶対防御つて？」

相手の能力の抑制？

認識操作による幻痛？

確立の操作？

「どれをとつても反則としか言えないでしょ？」

「仕方ありませんよ？」

お母様が、タケミカヅチにガーディアンとモンモンを全部壊しちゃつたんです。

私は、この小さな杖とアイン・ソフ・オウルを使うしかないのです

まあ、それでも食いついてこれるお母様が凄すぎるんですけどね。“剛毅”でブースとした剣を受け止められた時に受けた驚きといつたら……。

アイン・ソフ・オウルの事は、あの時居合わせた人達だけの秘密になっています。さすがに“単体でハルケギニアを殲滅できる力”と言つものの存在を公の場に流布するのはまずいですからね。主に欲に溺れた権力者とか、信仰に狂つた思想家とか……。

あ、ルイズお姉様にはそれとなく真実をボカして説明してあります。双子なのに隠し事ばかりだと、本格的にぐれちゃうそうで……。ちなみに、クランさんは遠くでルイズお姉様と一緒に見学中です。ハマノツルギの力で流れ魔法を受ける心配もないですし、クランさんもお母様に褒められるくらい筋がいいので飛んできた瓦礫とかからもルイズお姉様を守ってくれます。お茶の用意も出来るので、最高のメイドさんですね。

「はあ……あいつ変わらずすごい場所よね」

ふと声のした方を見ると、月匣の中を見ながら呆れたような声を上げている……、

「エレオノールお姉さま？」

エレオノール姉様がいました。あれ？ アカデミーで仕事があつたのでは？？

「今日は、目的があつて戻ってきたの！」

「数日前に、やつとルーティアの作ったマジックアイテム（結界炉）の理論が分かつたのよ！」

「で、その試作品ができたから持つてきたってわけ！」

「どんなもんだと、エレオノール姉様が胸を張っています。お母様から折檻を受けた後、さすがに可哀そうに成ったので理論の模写と予備パーソから組み立てた結界炉（最新型）の付いた筹をプレゼントしました。それにしても、“賢明の宝玉” + “夢幻書庫”的知識で生み出した論文を半月で理解して現物まで作っちゃうなんて……すごいですお姉さま！ これで、アカデミーでもまともな研究を始めてくれますかね？？ あそこ、宗教関係の研究（始祖の像を作るのに適した土は何かとか）で国の税金を食いつぶしてますからね～。」

「見て驚きなさい！」

「ドン！」

「…………あの、お姉さま。コレが…………ですか？」

「お姉さまが持つて来た結界炉は、お姉さまの身の丈よりも大きい物でした。具体的に言つと、全高が約2メイルに直径が約1メイルくらいの巨大な筒です。

「ちなみに、エレオノール姉様やルイズお姉様にプレゼントした箇についている結界炉は、だいたい2リットルペットボトルくらいの大きさです。

「ちなみに、その結界炉からはそよ風が吹いてきています。

「お姉様、ちょっと調べさせてもらいますね？」

「ちょ！？」

「カバツと蓋を開けて中身を確認。そして閉める。……なんでしょう、中が可哀そうな事になつています。え～と、

「何でこんなにデカイのですか？」

「安定性があつて良いじゃない！」

「フレームが妙に分厚ですが？」

「頑丈でしょ？」

「重いですね？」

「簡単には動かせないわ！」

「大事な部品が外れそうですね？」

「大丈夫、ちゃんと動くから…」

「風力はコレで限界ですか？」

「限界よ！ 最初つから全力なのよ！」

「ダメダメで……」

「そんな事を言つ悪い口はコレか！ 小さく出来ないつて悪口を言う口はコレか……！」

「いふあい！ いふあいですう……！」

……あ～痛かった。

事情を聞いたところ、どうもお姉さまはこの研究を一人でやつているみたいで、まだ一緒にやつてくれる仲間がないようです。初期研究は少数で……は、何処の世界でも一緒ですね。なので、薄くて丈夫な材料を手に入れられなかつたり。細かい細工が彫れなかつたり……色々と大変なようです。

そして、やつと出来た試作品を片手に、この結界炉をアカデミーの所長に見せて人員と予算を確保してもらおうとしたところ、『う～む……風石をこの様に使うのは、異端ではないかね？』

などと言われ、人員も予算も下りなかつたようです。ちなみにこの研究は破棄するようになど。

そして、代わりに回されて来たのは、

『始祖への祈りを捧げるさい、もつとも意識が安らげる香の研究をしなさい』

だそうです。

「……エレオノール姉様、一度その所長さんを私に紹介してくれませんか？」

いえ、今度どこら辺が異端なのか、じっくりとO・H A・N A・S H Iしたいと思いまして……」

あれ？ エレオノール姉様、なんで顔を青くされているのですか

？？

「まあいいです。

彼らが要らないといふのであれば、無償で差し上げてあげる義理
もありません。

エレオノール姉様、結界炉の研究資料や試作品、誰にも渡す必要
はありませんよ？」

そう、コレは私たちだけが独占している技術です。後から欲しが
つても遅いですよ？ もう風石の分解と再結晶化の目処も立つてい
ます。後は、地下1000メイルにある風石の鉱脈までその効果範
囲が届けばいいだけなんですからね！

樂しく転生22（後書き）

今回は、ルイズが簾を乗りこなせるようになるお話と、エレオノールさんが結界炉と簾に興味を持つて作っちゃうお話でした。

オリ主が最初に作った箇は、じゃじゃ馬もいいところなものですが。何しろ、ちょっととの操作でもバランスを崩して操縦者が転落します。シートベルト、ナニソレ美味しいの？　です。暴風対策もされていないので、高高度だと寒すぎますし対策をとらないと高速飛行も出来ません。

なにしろこのオリ主、用衣（非常識）のせいで落っこちて死ぬとか凍えて死ぬとかがなくなっちゃいましたからね。安全対策を完全に失念していました。ソレを眞面目に考え始めたのは、ルイズの地面への顔面ダイブ以降です。

ハレオノールさんは、原作で妹の病気と妹の魔法についてどうの
かトニア
ルイズ
Jのする為にアカデミーに入つたとかと言つ設定がありましたが
……。このJでは、どちらも一応は解決しているので動機がない
んです。なので彼女には、純粹に研究者として進んでもらいます。
まあ彼女的に、オリ主が持つている〇〇〇や月衣とか月匣とか調
べたいんでしょうけど……。その辺で動機付けするのも良いかな?

それと、結界炉がアカデニーで異端視されました。

新人が上の意思と関係なくこんな研究を持つてきたり、まあそう

風石を使用した船について他のSSで諸説書かれています。この

SSで風石は、飛行船に使われているヘリウムガスの代わりの様な物と言う扱いです。特別な機械は積んでいません。それが6000年間ずっと変わらずに続いているのです。

そこに“風石の力を強制的に解放する魔法機械”なる物を出したら……。

「ゴルベール先生の蒸気飛行船ですら教会から異端視されましたからね。今まで無かった物には閉鎖的なんです。

ちなみに、もう風石の再結晶化も目処が立っているので、大隆起に合わせて、ゴーラドラッショならぬ風石ラッショを仕掛けられるかと（風石を露天掘りしなくても取り出せる+結界炉による航空輸送の高速化による利益）。

まあ、まだまだ解決しなきゃいけない問題も山積みなんですがね。

うーん、周りがチートな感じになってるし……ルイズにも何かチート、と言つつかブーストをつけた方がいいかな？　さすがにこのままだと影が薄すぎる。

あと、サイトはどうしよ……。出す意味あるのか??

感想お待ちして迫ります。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたら、指摘ください。

楽しく転生（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

またく、アカデミーもてんで役に立ちませんね。

そんなんでは、王立魔法研究機関の名が泣きますよ？

正直に言うと、私的にはエレオノール姉様をアカデミーから引き抜きたいんです。

だつて、たつた一人でこの結界炉の論理を理解しただけじゃなく、実物まで作っちゃったんですよ？ それだけじゃなくとも、将来は主席研究員（？）だつたかに成るほどの人なんです。あんな場所で腐らせておく道理はありません！

……でも、ココはグッと我慢しなければいけません。ここでエレオノール姉様を引き抜いちゃうと、アカデミーの動向を知る事ができる大切なパイプが無くなっちゃうんですね。

「仕方ありませんね。

今のところは、箒を乗りこなせる衛士の育成を行いましょうか…

まずは、実績を作つて結界炉の価値を高めましょ。

なにしろ飼育費がかかる幻獣と違つて、箒は燃料の風石と維持費以外は特に必要はありません。速度だって、軍が採用している火竜程度の速度は確保できています。最強の空軍を作っちゃいましょ！

「……そうと決まつたら、攻撃手段も必要ですね？」

魔法資質さえあれば箒には乗れます。でも、いくら箒がマジックアイテムと言つても、複数の“魔法”を同時行使するのは辛いでしょう。

そこで、正式武装として銃を採用しました。もちろん、先詰め式のマスケットなどではなく、私が現代地球の知識を動員して作った“新式銃”です。輪胴弾倉式のリボルバー拳銃と、ポンプアクション式ショットガンの一種類になります。

最初は、オートマチック式の拳銃にしようと考えましたが、使用

する火薬が黒色火薬だとジャム（弾詰まり）などの動作不良が多くて使えないんです。でも、輪胴弾倉ならその心配はありません。

あとは、長物のショットガンです。拳銃だけじゃ火力不足ですかうね。

ちなみに使用する弾は主にスラッグシェルです。この弾は元々ショットガンで使う弾の一種で、複数の弾をばら撒く散弾とは違い単発式の弾丸です。これには最初から風切り用の溝が作られているのでお徳なんですよ？ ショットガンその物も、本来の弾丸である散弾との併用も可能と汎用的です。最初は、レバーアクションもいと考へたんですけど、構造が複雑かつ外部に露出する部品が多いので却下しました。レバーアクは、後々狩猟用として売りに出します。形状は綺麗ですね。

あ、ショットガンはチューブ式弾倉ではなく、即座に脱着が可能なマガジン式に変更しています。チューブ式だと装填が大変なんです。

それにしても、雷管の製作にホント手間取りました。“夢幻書庫”で見つけた“まねしちゃいけない危険な化学”という本のおかげです。この知識がなかつたら、銃の実用化が遅くなつていたところでした。

まあ、タルブにあるはずのゼロ戦に積み込まれている弾薬から、無色火薬と雷管のサンプルを手に入れるという方法あつたんですね……。

閑話休題。

「……と言つてお父様、この箒を使った航空部隊をヴァリエールとフォンティースの共同で設立したいのですが……」

今は、お父様と二人つきりで交渉中です。間のテーブルには、ショットガンにリボルバー拳銃、それに箒が置かれています。

「最悪、試験部隊でもかまいません。ヴァリエールでそのような部隊があつたと言つ前例が欲しいのです」

「そつは言つがルーティア、新しく部隊を作るとなると……」

「はい、運用費用について比較を行えるよう、ラ・ヴァリエール領で保有するグリフロン隊の費用を元に必要経費を仮算出しました」
フフフ、仕事に抜かりはないですよ？ ちなみに、部隊の規模は現行の部隊と同じです。ただし、幻獣を扱うわけではないのでそれらにかかる食費や糞尿の処理費、寝床となる厩舎の維持費は全面力量トです。それと、筹は慣れさえすれば誰でも乗れるので、幻獣騎乗と言う特殊技能で高い給料を払う必要もありません。トータルで見ても経費が安く済みますし、同金額でより多くの人員を確保できるでしょう。

お父様はしばし書類と睨めっこをすると、

「……もし、ヴァリエール領は賛同しないと言つたら？」

「その時は、フォンティーヌ領にみで航空部隊を設立し、これらの装備を正式配備します」

「……そうなると、フォンティーヌ領は他のどの領地からも容易に手が出せなくなるほどの強力な軍事力を持つことになる……か」

「それなりに時間はかかりますけどねお父様？」

フォンティーヌで部隊を立ち上げるのはすでに決定事項です。警邏機能が外部に依存なのはさすがにマズイです。それに、領地そのものが擬似的に一つの国として機能している昨今の統治下では、多少過剰な戦力でも必要なモノ。でも、すぐにこれらの軍備を揃えるのは難しい。それに、時間がかかりすぎると風石の暴走による大隆起までに結界炉の価値が上がってくれません。

現象が起きてから、

「こんなこともあろうかと！」

などとモノをだしても、その信憑性を確保するまで時間がかかります。あれは本格的にピンチになつて初めて使える手なんですよ？

「テスト？ そんな事している時間はない！」

ではもつとダメです。そんな博打、最終回ラスボスの目の前でやつてください。盛り上がりますから。

閑話休題。

で、手つ取り早く運用データが取れて信頼を得られる場所といえば、軍です。それも身内であれば極秘事項が漏れる心配もありません。

「……よし、少数だが試験部隊の設立を考えて見よう

「はい、やっぱりお父様は話の判る人で助かりました！」

良い返事が聞けて本当に嬉しいです。後は、部隊を維持できるよう十分な補給路を確保すれば万事OKです。

*

Another side

末の娘 ルーティアが持ってきた銃を取り、しばし考える。
娘の言つたとおりなら、この銃は恐ろしい武器だ。連射のサイクルが我々メイジが魔法を唱えるよりも早く、

ジャキャンツ！

至近距離なら、この連射できる散弾銃で容易に落とされるだろう。例え離れていても、このスラッシュシェルとか言つ弾に狙い打たれるだろう。

拳銃もそうだ。手の平に収まる大きさで連射できる銃。あの娘は、こんな恐ろしいものを世に送り出すつもりなのか？

……いや、だから“軍”なのか？

もしこの銃が市井で量産されれ、反貴族の賊の手に渡れば大惨事になるだろう。

そして、フォンティヌ領にはそう言つ輩が多く集まっている……。ルーティアから聞いたが、貴族に“裏切られた”または“虐げられた”者達が領民として暮らしているらしい。

我が家ながら、なぜそのような爆弾を好き好んで抱え込むような真似をするのか理解に苦しむが……、

『苦しんでいる人を見て“可哀想だ”と、哀れめば……“自分はその人を助けたんだ”と思えてしまう』

きつとルーティアの眼には、あの者達がクランと同じ様に見えているのだろう。そして、ソレに抱く思い。

『だた、引けぬと……引いてはならぬと私の中で叫ぶモノがあり。それに従っているだけです』

だがそれは、この世界を敵に回す事にも等しいの事なのだとぞ？
「……せめて、もしもの時に助けてやるのが父親としての役目だな」

Another side out

*

数日後、ラ・フォンティースとラ・ヴァリエールと合同で、笄を装備した魔法衛士隊 通称ブルーム（笄）隊が結成されました。

部隊規模は十名と小さいものです。しかも、そのメンバーの殆どが子供。さらに言うと、ラ・フォンティースのメンバーは全員女子で、ラ・ヴァリエールのメンバーは全員男の子です。ラ・フォンティースはとある事情で女の子が多いですからね。女の子ばかりなのは仕方ないとして……、お父様には事前に全員女の子だと教えて置いたのに、なんでメンバーが男の子ばかりなんですか？ いくら学園入学前の下級貴族、その第三子か第四子だけを集めたからって……一人くらい女の子がいてもいいんじゃないのかな？

「お嬢様、一人だけ女の子ですよ？」

クランさん、頭の中を読まないでください。

どれどれ……「うん、履歴書には確かに性別“女”になっている子が一人だけいます。あのどこか眼が据わっていてボロボロな子ですね。

『履歴書には、妾さんとの間の子供で『嫁がせる先もないので、ヴァリエール家で保護する』と言つお父様の注意書きがありました。他の人の履歴書にも眼を通して見ると、なにやらきな臭い注意書きがチラホラと書かれています。大丈夫かな？

「よつしゃあ！ これで原作組みと接点が……これでかつる！！」などと、小さくガツッポーズしている子もいます。なんだか頭が痛くなつてきました。

いや、そつちの問題も問題なんですが……、

「次は、このブルーム隊の顧問の紹介です。

ヴァリエール公爵夫人、カリーヌ・デジレ……またの名を“烈風”カリソンです」

こつちの問題も厄介です。

壇上にお母様が立つてその場にいた全員を睨みつけます。あ～もう、そんなに威圧しなくて……。やつぱり最初が肝心なんでしょうが、お母様の出すプレッシャーで全員萎縮してカチンコチンです。そうです、お母様が幕隊の顧問を買って出たのです。

「ルーティアに決して逆らわない、鉄の規律を持つ部隊に仕上げて見せるわ」

と、張り切つてらつしゃいました。いや、あの……程ほどにしてくださいね？ 腹せん私みたいに丈夫じゃないんですから。

ちなみにお母様は幕の初心者です。……いや、でした。さすがは私たちの母と言うべきか、一日とかからず幕から墜ちなくなりました。その後直ぐ、高高度での飛行にアクロバティックな機動も可能になっています。何このチート？ フライで飛ぶわけと違うんですね？ 重心制御とか、制御翼や結界炉の操作とか色々大変なのに……

…。

「セー」、姿勢を乱さない！」

「は、はい！」

「どもらない！…！」

「はい！！」

今は皆さん、お母様に恐縮しながら幕で飛んでいます。もちろんヴァリエール邸にある泉の上でです。

「ルーティア、あんなんで大丈夫なの？　あ、また一人落っこちたわ！」

「ルイズお姉様、大丈夫ですよ。訓練はまだ始まつたばかりなんですから」

私たちはそれを離れて見ています。もちろん私たちも訓練に参加しているからですよ？　私自身が部隊の発案者ですからね。今のところは、一緒に編隊飛行の練習です。これも立派な訓練ですからね。もつとも……、

「「わあ！？」」

「「ぐお！？」」

「「きやああ！…！」」

悲鳴と共に次々と水柱が上がります。

この調子じや、銃や魔法を使用した戦闘訓練はまだまだ先になりますね。

楽しく転生23（後書き）

物騒な世界ですからね。今回は武力を手に入れるお話をした。

エレオノールさんをアカデミーからスカウトするのは見送りました。

その人がいないと、アカデミーの動向が分かりませんからね。あそこは、オリ主の作る学び舎に刺客なり何なり送りつけてきそうな場所のひとつですから……。

ルイズの強化案は、やっぱり能力（異世界の力）の付与が一番シックリ来るかな？ オリ主の〇〇〇みたいにアイテムを渡すのもいいけど……丁度いいアイテムのアイディアが浮かばない。onz

一応、月衣の発現は候補に入っています。が、ナイトウィザード率が高いから、他の作品のモノをもうちょっと絡ませたいといふ……。やっぱりアイテムなら杖とかかな？

篝騎士の姿が想像できない……ので、ブルーム隊と言づのを結成させました。ネギま！ のアリアドネー魔法騎士団候補生（ユエ達）がイメージです。あんな感じなのかな？ いや、ウイキには篝ジャンキーって書いてあつたし……つむ。

楽しく転生24（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと語り劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

ちょっと、今回は……。お気に入り件数が一気に減りそうな、そんな予感。

*

Another side

ブルーム隊が結成されてもう半月。なぜかルー・ティアお嬢様は、突然雲隠れをしてしまわれました。……いえ、誘拐されてしまったとかではなく、確かにこの屋敷にちゃんといふと思うんですよ。時折、ちんまりとした犬耳メイドさん型のガーゴイル達がAIN・ソフ・オウルに食事なり何なりを乗せて運んでいくのを何度も見かけましたし。

でも……、さすがにこれだけルーちゃんと会わないとルーちゃん成分が……ん?

「もう、ルーティあつたら篳隊の訓練をサボつてなにやつてんのかしら?」

あそこにいらっしゃるのはルイズお嬢様?

「あ、クラン。ルーティアを見なかつた?

あの娘つたら、ココ最近ずっと顔を見せないし……クランは何か知らない?」

ルイズお嬢様もですか、

「はい、私もここ最近ルーティアお嬢様と会つていないです。

そろそろ、恋しくて、寂しくて……」

「あ~、まあ分からなくもないけど……一応ルーティアは公爵貴族だからね? クランは今、平民のメイドさんだからね? もうちょっと尊敬とか、畏怖とか……」

「命の恩人に畏怖などと、ルイズお嬢様は恩知らずなのですか?」

ボロボロにだつた私を、まるで神の御使いの「」とへ救つてください
つたルー・ティアお嬢様に感謝こそすれど……

「あ～うん。それなら良いのよ、うん」

ちょっと、芝居が効きすぎましたね。でも、本当に感謝している
んですよ？ もし、あの時ルーちゃんに拾つてもえなれば、野
生動物のお腹の中か、はたまた人買いに売られて生き地獄の人生。
どちらに転んでも最悪でした。

「はあ、ルー・ティアつたら何処にいるのかしら？」

「あ、ソレでしたら」

「知ってるの？」

私は、足元をチョコチョコと移動しているハルケギニアではありに
りに独特な形状をしたガーゴイルたちを指差して、

「彼らに付いて行けば、ルー・ティアお嬢様の所に行けるかと」

「そう、ならクランも一緒に行くわよ！ クランも一緒なら、あの娘も素直に出てきてくれると思うし」

ルイズお嬢様だけでも、十分にルー・ティアお嬢様を説得できると思
いますよ？ まあ、私もルー・ティアお嬢様とお会いしたいと思つ
ていたところですし。

・ · · · · · · ·

え～と……、これなんでしょう？ 私の目の前に広がつてこむこの
の力オスな光景は？

「足りない足りない手が足りないいいいい！」

そう言いながら、背中から 某カニアーマーよろしく無数の腕
型ゴーレムを背中から生やして、どこか虚ろな眼で書類作業を行つ

ルーティアお嬢様に、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」とつゆるして「ごめんなさい……」

これまたどこか虚ろな眼で机に突っ伏しながら、それでも懸命に別の書類作業を行う別のルーティアお嬢様……。いや、まだこれはウェザードである私には十分許容できる範囲です。前の世界では、これよりも酷いカオスな状況もありましたし。でも、

「ア～～ヒ～！」

「モ～ノ～ナカ！」

「マ～さんに！ デアツタ！！」

無茶苦茶な音程、と言つたか絶叫を上げながら首をガクガクとスイングさせ、一心不乱に何かしらの機械らしきものを作つてゐる無数のルーティアお嬢様……。これはさすがにライズお嬢様には堪えているようです。目の前に広がるカオスに怯え、涙を流しながら私のメイド服にしがみ付いています。

それから、

「私たちに足りないもの、ソレは……」

「情熱！」

「思想！」

「理念！」

「頭脳！」

「気品！」

「優雅さ…」

「勤勉さ…」

「速さ…」

「…………そしてなによりもオオオオオオオツ…！…」

「…………人手が足りない…！」

突然別々の作業を行つていた複数のルーティアお嬢様が、示し合わせたようにどこぞの兄貴の名言のパッチモンを呼びました。そしてソレを言い終わった瞬間、部屋の中にいた無数のルーティアお嬢

様達が一斉に発狂して……猛スピードで壊れた様な言動を吐きながら、猛スピードで壊れたような動作をしながら……それでも正確に作業をこなしています。なんと言つか、アレな光景ですね。

ルーティアお嬢様たちが発狂した瞬間、書き上げた書類などが散乱したりもしました。ですが、それらは全て掃除用具で突っ込みを入れそうなプチ犬耳メイドさん型ガーゴイルや同じような大きさに変更された 黒い虫を殺して回りそうなピンクの髪のメイドさんに黒髪のショートボブの女の子、それと割烹服は大和撫子の戦闘服ですとか言いそうなメイドさんに、中学生を乗せて宇宙を漂流した某娯楽施設で作られた六角片で動きそうな緑色のロボット……。それらがいそいそと散らばった書類やらなにやらを片付けていきます。彼らがいなかつたら、ここはもつと凄惨な惨状になつていたでしょう。

あ、この縁のロボット可愛いなあ……。

「つて、冷静に現実逃避している場合ではありません!!」

とにかく、この無数のルーティアお嬢様は偏在でしょう。本人もここ数日見ていないので、おそらくこの無数の偏在ルーティアお嬢様の中にまぎれているはず……。

「ツ！」

見つけました。部屋の奥の方で、壊れた笑いを出しながら、必死に許しを請いながら、新しい算の最終調整をしていました。

「ハハハ！！ これで、これで世界は私のも、ノー！！！？」

スパーク！ グシャー！！

「ご乱心しないでくださいルーティアお嬢様……つて、あれ？」

ついつい、発狂したルーティアお嬢様を月衣から出したハマノツルギで殴ってしまった。ソレまではまだいい。いや、封権政のこの世界ではだめかな？ まあ、結果的にルーティアお嬢様が気を失つたので、作業をしていた偏在たちのコントロールも切れて力オスな光景が綺麗さっぱりと消えてしまいました。でも……、

「え、と、ルーティアお嬢様？」

田の前には、トマトケチャップをぶちまけた様に真っ赤なナニカ
を頭から噴出させているルーティアお嬢様がいます。エ、ナニコレ
？？

「いや、いくらなんでも、ハリセンで？」

お嬢様の頭が、ハリセンで潰れました。……いや、ちょっとまって！ ルーちゃん、月衣があるでしょ！？ このなギヤグみたいに死なないでよ！！ つて、ハマノツルギは魔法無効化だから月衣意味無いじゃん！！ アイン・ソフ・オウルの守りは！？ なんで発動しないのよ！！

こんな形で恩知らずになりたくない!!

二二一

「先程からウルサイですが、何があつたの……ツ！？」

お奥様…… 私ね、お嬢様を……

卷之三

「奥様もおちついてください！」わ、私もおちついてしんじきュー

つて、「ごめんなさい」「ごめんなさい」――

カンカンと 固定化と硬化のかかる壁に自分の頭を叩きこむ。

そこで、矢箇が口つぱし掛つた。そ、あひぢゅ!!

”
で蘇生しましょうー！

「ま、まだ助かるかもしだれません奥様！！」

そんな盛力は頭から出血させでおいで助かるだなどと言わ

奥様とそろつてリーティアお嬢様の方を見ゆ」と、

「……一人とも、なにをやっているんですか？？」

何事もなかつたように、そこルーティアお嬢様が座つていました。

卷之三

私たちは、顔を見合わせた後、盛大に絶叫した。

「はあ、もういいです。疲れたので、寝ま……」

私たちの混乱を他所に、ルーティアお嬢様は、机の上で丸くなつて眠つてしまつた。

ちなみにルイズお嬢様ですが、当の昔に精神の限界に達したらしく、私がルーティアお嬢様に突つ込みを入れる前に気絶していました。

Another side end

*

「で、ルーティア、何か言う事はないかな??」

すつごい倦怠感に苛まれながら、それでも居心地の良い（？）作業机から必死に起き上がった私は、なぜか険しい顔をするお父様達と出会いました。

え~と、

「おはようございますお父様。

そして、お休みなさい」

そう言って、再び居心地の良い（？）作業机に横になる。

「そうそう、起きたらおはようって、チガーウ！」

そして、また寝ないでおくれルーティア！！

なんですか？なぜかは知りませんが、私、すつごく、眠いんです。だから、もう少しじだけ……。zzz。

「おーい、起きろー！

起きてください。お願ひだから……」

「ムニヤムニヤ、あと五分……一分でいいから……」

……その後、私が起きたのはかれこれ数時間が経つてからでした。

「はあ……」

「そんなにため息をつかないでくださいお父様」

「幸せが逃げてしまいますよ？」

「いや、ルーティアが無茶をしたと聞いてな……」

「無茶？……しましたつけ？」

そりやー、ちょっとばっかりやらなきゃいけない事が多かつたで

すけど……。あれ？　なんだかここ数日の記憶が思い出せない？

「そう言えば……。人手が足りないからと偏在をシコタマ出した後、偏在との思考の並列接続なんかも試した辺りから記憶が……」

ガシ！

「人手が足りないのなら、私たちの方でも何とかするから。だからあんな壊れた様にならないでくれ……！」

えゝと、言つている事は良くは判りませんが……、

「わ、分かりましたお父様」

「うんうん、分かつてくれたか！」

なんだか情けない顔で肯いています。お父様、威厳が丸つぶれですよ？

それはさておき……。ハハハ、なんだか凄い惨状ですね？

机の上や床に散乱する書類に、作りかけの箋とその部品があちらこちらに散らばり、構想だけしていた　某六角片で動くロボットをモデルにした“戦艦”的模型が部屋の真ん中に鎮座していく……。なぜか一部の作業机や椅子が砕けていたり、壁の一部が陥没してたりもします。

この惨状を、私が作ったガーゴイル　この大きさだとアルヴィーズと言う分類になるのかな？　犬耳メイドのプチネウス（偽）に、同じ大きさのライフサイズ・ホイホイさん（偽）にライフサイズ・コンバットさん（偽）、ちゃんとした立体モデルがないので造詣が怪しいナビ・コミュン（偽）についてで作ったプチディジー（偽）さん達がいそいそと散らかつた部屋を掃除して回っています。でも、

「ふむふむ、風石動力炉じゃなくて結界炉つて名前にしたのはこいついう事……。

(ヒヨイツ)で、こっちの資料は船かしら? こっちはハルケギニア全土を網羅する物流網の構想に……何かしらこの、鎧??」
彼らが拾い集める先から、なぜか実家にいるエレオノールお姉様に書類なり部品なりを奪い取られ。適当にそこらへんに置かれる投げ捨てられてるので一行に掃除が終わらない。なおかつ、書類も整理できていないので中身がグチャグチャ……。
アハハハ……。とりあえず、落ち着こう。

*

私が作業していた部屋、そこに集まっているのはお父様にエレオノール姉様、それから私を抱えているちいねえさまです。

クランさんにお母様、ルイズお姉様ですが何故か寝込んでしまったようです。アストレアさんですか? あの人は今、フォンティーヌ領で働いているので屋敷にはいませんよ。

さて、

「え」と、まずはエレオノール姉様。いつの間に実家に帰られたのですか? アカデミーの方が忙しいのでは?」

「私が帰ってきたのは昨日。アンタが部屋に籠もって何かしてるつて言うから、暇なアカデミーなんか放つて置いて様子を見に来れば……。案の定、面白い事をしていたわね?」

え、アカデミーが暇?

「そうなのよ! あの後、他の研究の合間を縫つてひつそりと結界炉の研究を続けていたんだけどね。あ、研究仲間も出来たわ。ヴァレリーフて新人の娘なんだけど、ポーションの製作が得意な娘よ。でも上の人、評議会が圧力をかけて来て……そのまま一人そろつ

て末席にまで降格つてなわけ

「あ、えっと、その……」

「別にルーティアが気にする事じやないわ。

私たちも好きでやつてた事だし……。

そりや、最初はお父様に抗議してもらおうと帰郷したけどね。この部屋を見て、あなたがものすつじく面白い事しているから……」

そこまで言つと、満面の笑みを浮かべながら……手をクイクイツとしています。アハハ。私も混ぜろですか？

「で、でもエレオノール姉様はアカデミーの研究で……」

「だから、もう殆どまともな研究をさせてもらえないのよ。私の自分が公爵家だから、自主的に辞めるまで待つか、陳謝状の一つでも書かせるつもりね。

まあ、私は辞めるつもないし……。さつき言つてた新人のヴァレリーも、魔力増強のポーションを作つたりして上からあまり良い目で見られてないのよ。だから、さきにこっちで確保しておいたわ」「いや、確保しておいたつて姉様、確定事項で話を進めちゃつたんですか？ 私は全然許可していませんよ？」

「あのねえ……。はあ、アナタ、実の姉をアカデミーとのパイプ代わりに使おうなんて考えておいて、よくもまあそんな事言えるわね？」

「あ～、ばれてたんですねって、い、イファイイファイ！…？」

ひとしきり私の頬をつねつた後、エレオノール姉様はため息をついて、

「アンタのこれを見れば、アカデミーの研究なんて面白くもなんともなくなるわ」

「イタタタ、でも、エレオノール姉様はアカデミーに入つて主席研究員に成るのが目標だつたんじや？」

「そうよ、それも評議会のメンバーに選ばれるくらいすつごい研究員になるのが私の目標……だつたのよ」

だつた？

「今は、違うんですか？」

「一番最初の目標は、カトリアの病気とルイズの魔法……。評議会のメンバーに選ばれるようになれば、色々とやれると思つてね。でも、カトリアの病気は、どこかの誰かさんが治しちゃうし。ルイズにいたつては、あんたの作った箋で毎日のように空を楽しそうに飛んでいるし……。

ねえ、姉の私から目標を全部奪つておいて、ソレでいて他の子には色々あげて私には何もくれないのは不公平だと思わない、ねえ？」

「え、えっと……」

「不公平だと、思わない？」

「お、思いますエレオノール姉様」

「じゃ、決まりね？ それじゃ、早速アカデミーに辞表を……」

「そ、それは待つてください！ お姉様には、アカデミーに席を置いておいてもらいます。それが、私のやうとしている事に参加する為の条件です！」

アカデミーとのパイプを失うわけにはいけません。それに、

「なに？ まあ確かに、働くに実家で研究しているなんて色々と風評が悪くなるでしょうけど……。やっぱり私つて言うパイプが必要だから？」

「風評については、後々解消されると思います……。パイプの件ですが、動向を探るため以外にアカデミーで働いている人をこちら側に引き抜く為でもあります」

一応、国の最高研究機関ですからね。そこに集まる人達はおのずと優秀な人達になります。多少問題を起こしてしまったような“問題児”も集まるでしょうが……むしろそれがいいのです。現代地球で生きてきた私なら、アカデミーで異端扱いされて破門された人の研究が、もしかしたらまたもな研究として見れるかもしません。そういう言つ人達を確保できれば、凄まじい戦力になります。主に研究分野で！

「と、言つわけで……エレオノール姉様にはまだアカデミーに席を

置いていてほしいのです

「あ～、分かつたわ。だけど……」

「必要な研究費などは……お父様に任せましょ～」

「なー？」

突然振られたお父様は、いきなりの事に驚きます。しかも、お金の話ですからね。凄いうろたえようです。

「可愛い可愛い娘の頼みです。聞いてくれませんか?」

「あ、いや、お金の事になるとなあ……。

まあ、一応考えてみよう。一応だからな?」

そんな事言つて、ちゃんと用意してくれるんですよね? まあ、

それに見合つたモノをちゃんと作りますよ?

「あらあら。ルーティアアったら、私の知らない間に色々とあくどい娘になっちゃつたのね?」

侵害ですかいねえさま。私はちょ～と、子供にしては頭が回るだけですよ? 悪性貴族にハプシエルを送り込んだり、盗賊や人攫いをドラマタの"J"とくなぎ払つて金品巻き上げたりしただけで、別にあくどいなんて……あれ? 私つて十分あくどい? ……考えたら負けですね

それから、エレオノール姉様に計画書の一部 まずは結界炉の高出力化の研究と、風石の分解と再結晶化の研究をお願いしました。結界炉の出力アップは、軍用で使う筹や戦艦、それから物流の高速化の為に、輸送船の推進機関へと繋がります。

分解と再結晶化ですが……一応成功しているんです。でも、時間がかかりすぎるうえに出来上がる結晶の力が弱くなります(力の減衰を“蒼い天亩眼”で確認しました)。しかも、地下1000メイリに眠つている風石に対してまったく歯が立たないんです。と言つが、効果が届かないんですよ……。

私が風石ラツシユをするために、エレオノール姉様は頑張つてください!!!

楽しく転生24（後書き）

ノリで書いたらこうなつてしまつた。なぜこうなつた？

オリ主も8歳を超えて、幼少期編ももう佳境に来ています。
でも、その前にエレオノール姉さんを取り込めないかと……。それが今回のお話でした。

偏在つて不思議ですね。一人一人に人格があつたりなかつたり……。解釈はさまざまですが、このハルケギニアでは、偏在自信に意思のある独立型と、本体からの意思で操作する遠隔型と言つて分けようかと。

ちなみに、オリ主は独立型の偏在の意識を、遠隔型の偏在を操作する要領で脳を並列に接続。擬似的にインターネットの真似事をして、000の“賢明の宝玉”が暴走。あのような壊れた状態になつたと……。

壊れたノリは、まじしゃんず・あかでみい？聖夜暴走！？ より、修羅場と化した佐久間榮太郎達を想像してください。アニメでもそのシーンがあつたかな？

今回登場させたガーゴイル アルヴィーズたちの選定は……ひ
とえに私の趣味です！ だつて、みんな可愛いんだもん！！
シーフィールドさんにとられない様にしないと危ないな……。
プチネウスにライフサイズ・ホイホイさんにコンバットさん、プ
チ化ディジーにナビコ、皆可愛いよー！

……まあ、ロマリア対策に真ライフサイズ・ホイホイさんの登場を考えたりもしたけど、ハプシエルもいるしいるしかないかな？

元ネタは、プチネウスはまじしゃんず・あかでみいより、佐久間

榮太郎の外付け両親回路の娘さん（違います）。

ホイホイさんにコンバットさんは一撃殺虫ホイホイさんより、インセプタードールのホイホイさんとコンバットさん。

ディジーはトウインクル スターシップより、ホームヘルパー アンドロイドのディジー。

ナビコはメダロット・ナビより、クラスター管理システム謹製のメダロット、ナビ・コン。

あと、風石ラッシュは自肃しました！　さすがにこんなに簡単に難題が解決したんじゃ面白くないじゃないか！－

幼少期編も佳境になつたので、そろそろタバサやジョゼット、ティファニアなどのフラグを拾つてこよつかと考えています。でも、どうやら辺で介入するのが妥当でしょうか？

一応、原作で死んでいる人（弟のシャルルさんに、テファのお母さん）はそのままにしようかと……。

楽しく転生25（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

気がついたら私たちももう十歳です。

そして、後数年で原作と言ひ名の流れに飲み込まれる……。

そもそも、各国で原作メンバーに関係のあるきな臭い事件が発生し始める時期。そこで、きな臭くなる前に修道院で暮らしているジヨゼット（タバサの妹）さんや、アルビオンでまだ平穏に暮らしているはずのティファニアさんなんかを回収しに行こうかと思います。先ずは……ガリアのジヨゼットさんです。

メイドさんネットワークにより、アルビオンのモード公はまだまだ安心できると判断しました。もし何かあつたとしても、アルビオンに転生しているであろう“勇者”さんの一人が何とかしてくれるのは?

それに、先にジヨゼットさんたちと接触するのは、彼女たちが使っているフェイスチェンジのマジックアイテムが目的だからです。あれがあれば、ティファニアさんやそのお母さんをアルビオンでもフォンティーヌでも問題なく匿う事ができます!

エレオノールお姉様に製作をお願いしてもいいんですけど……ほら、理由の説明が面倒じゃないですか？一応、王都の裏路地とかの魔法工具とかも回つたんですけどね……。あんな便利で高度な魔法を発動させる魔法具は扱っていないそうです。

「ど、言う事でやつてきましたセント・マルガリータ寺院……修道院でしたね」

「お嬢様、いつたい誰に言つてますか？」

クラルの突込みは軽くスルーします。時々突込みが激しくなって、ハマノツルギで叩かれる事も（出血する事も）あります……。クランさん、たくましくなりましたね。

閑話休題。

そして私たちの目の前には、私たちを警戒している修道院のシス

ター（？）の方々が手に手に桑やスコップで武装して出迎えてくれています。

「物騒ですね～、そんなに歓迎してくれなくても……」

まあ、私たちがこの様な歓迎も仕方ありませんね。
なにしろ、まだお昼だというのにこの修道院は夜なんです。それ
も紅い月が一つだけ昇っている夜　　月匣です。周囲は紅い月の光
に染まり、海の向こうにあつたはずの本土も消えてなくなっています。
こんな異常な状況で、普段見かけない人がいたら……警戒しますよ
ね？　ちなみに私たちは、自分達が誰だか判らない様に変装してい
ます。きっとそれも一役買つていいのでしょうか。

ちなみに私は、白地に紅いラインの入つたバイザーを着け、同じ
く白地に電子回路の様な紅い幾何学模様を掘り込んだ特別なローブ
を着ています。持つている杖も普段使つているタクトではなく、あ
る特殊な機構を積んだ試作品の長杖です。

対するクランさんはとと言うと、目元から上だけが隠れる仮面（フ
リル付き）を着けているだけで、それ以外はいつも通りの白と黒の
エプロンドレス　もちろん、身元が割れるような紋章などの無い
ものです。

「あ、アナタ達、いつたい何者ですか！？」

「口は神聖なる始祖ブリミルの加護を受け、俗世を捨てたモノた
ちが修行を行う修道院。世俗モノが、しかも賊の類が来て良い場所
ではありますよ！！」

「心外ですね～。確かに怪しさは爆発していますが……。

「え～っと、賊じやありませんよ？」

「私達は、何かを強引に奪いに来たわけではありませんし……」

「なら、何故その様な仮面を着けているのですか！？」

「これはちょっとした理由在つての事です。

それに……仮面を被っているのは“お互い様”なのでは？」

そう言って私は、バイザー越しに眼を細めます。

今私が言った事を理解できない若い修道女達は、その殆どが顔を

傾げています。ですが、それを理解している「」一部の人達は一斉に顔色を変え、直ぐに獲物を持ち直して一步前に出て来ます。

「……」

それを見たクランさんが、無言でハマノツルギを抜き一步前に……

「止めなさい」

それを私が止める。こぞいざを起すために来たわけではないのです。それに、へたに怪我人も出したくないし……。

「これを預かっておいてください」

そう言って長杖をクランさんに預け、警戒するシスターさん達のもとに丸腰で アイン・ソフ・オウルを始め、月衣の中に武装が入っているので丸腰とはいえませんが 歩いていきます。そして、当然の「」とく私に桑やスコップを突きつけられます。いい気分はしませんが、仕方ないです。

「此度の突然の訪問、真に申し訳ありません。

出来れば、この修道院の責任者の方とお話がしたいのですが、責任者の方はどうなたでしょうか？」

「賊などに……！」

「責任者は、私です」

「修道院長さま！？」

そう言って奥の方から出て来たのは、顔に深い皺を刻んだ……なんと言うか孝行おばあちゃんなお方です。あれ？ もうちょっと若い人じゃなかつたっけ？？ ……まあ些細な事はこの際いいです。

「それで、どの様なご用件でしょうかミス？」

「はい、用件はこの修道院で保護している人達についてお話をしたく、自ら足を運ばせていただきました」

「そうですか……。ですが、ここは俗世を捨て永遠の祈りを捧げる場所です。

ここでの決まりとして、過去の詮索はしてはならないというモノがあります。故に、私たちからは何も……」

「偽りの仮面は、被り続ければいずれ本当の顔すら飲み込み犯す。申し訳ありませんが、貴方達が話し合いに応じてくださらないのでしたら……その首から提げた聖具^{ロザリオ}を全て碎かせていただきます」私がそう言うと、一斉に場の空気が変わった。聖具を破壊する。ブリミル教が支配するこのハルケギニアでそのような行動は……異端。すなわち、始祖ブリミルに対しての背徳行為になります。でも、それだけじゃないですよね？ なにしろその聖具は、あなた達の大切な大切な仮面なんですから……。

「アナタ！ 聖具を破壊する事がどの様な行為か知つていて言つているのですか！？」

修道女的一人が声を上げる。私はそちらの方に向き直ると、「ええ、十分に知つています。ですが、それは本物の聖具を破壊した時に被るもの。

それが聖具の形をしたまつたくベ……」

「お止めなさい！」

「修道院長！？」

「…………では、話し合いに応じていただける気になりましたか？」「分かりました応じましよう。ですが、それ以上口々でその事を口にしないで頂きたい

「ええ、分かりました。

そうですね……口々では場所が悪いので、どこか落ち着いて話し合える場所はありませんか？」

「それでしたら、こちらに……」

そう言つて私たちは、セント・マルガリータ修道院の奥へと案内された。

私達が通されたのは、修道院の奥にある執務室のような場所でしたが、

「……さて、私としても、この様な歓迎はあまりよろしくないと思いますが?」

そう言つて、私たちを死角から襲つた者達を積み上げて埃を払う様に手を叩く。ここを専属で警護している聖騎士か何かでしょうか? 暗い布を巻いた風体は、どこか忍者を思わせます。ただし、その身に着けているやけにデカイ装飾品なのか武装なのか分からぬ物が、忍と言う意味をぶち壊しにしますが。いや、忍気なんて毛頭ないんでしょう。リーダーと思われる人の装束は上から下まで真っ赤ですし……。

もつとも、この程度の輩では私たちの相手にすらなりません。お母様、これもアナタとの修行の成果です。何度も三途の川を見せてくれてありがとう!-

私がやつたのは、彼らが襲い掛かつてくる瞬間に、雷を障壁状に展開する防御魔法 名づけて雷壁方陣 で刺客さんホイホイを作り大半を行動不能にしただけです。面白いものですよ? 皆して飛び込んできてはビリビリと感電して撃墜されて行くと言つのも……。あとは、取りこぼした襲撃者をクラルさんがハマノツルギで各個撃破して終わりです。

それにしても、この衣装はどこかで……まあ、いいでしちゃう。「ひむら」としては、一応穩便に交渉しようと思つていたのですが……

「そう言いながら、恐怖に震えている修道女や修道院長を見詰め、「実力行使で、物事を進めてもかまいませんよね?」

長杖の先端からブレイドを噴出させ槍の様に変わる。そして、その切つ先を近くの来客者用のテーブルに振り下ろして真つ二つに切断した。

「ひつ!」

それを見た修道院長は顔を真つ青にし、すがりつく様に許しを求

めできました。

「お、お許しください！　私の命はどうなつてもかまいません。ですが子供たちの命だけは…！」

「そうですね～、私もそう何度も許せるわけではありません。……ですので、その懷に隠しているナイフも捨ててもらいましょうか？」

私の指摘に、修道院長は一瞬ビクリとします。ですが、素直に隠し持っていたナイフを捨ててくれました。他に武器らしき武器は…持つてなさそうですね。

「それでは交渉に入りましょう」

・・・・・

「以上が此方からの要求……と言つよつお願いですね」

「……」

「ここ」の修道院で暮らす彼女たちの特別な事情は解っています。
かく言う私も、彼女らの様に双子の片割れ……生まれた国が違うので親に棄てられる事もなく幸福に暮らしてこれました。

今現在、彼女たちにとってここが一番安全だとは思われます。ですが……彼女たちにももう少しだけ自分の道を選ぶ権利があると思つていいのです

私がした要求は簡単、ここで暮らしているガリアの双子の片割れたちにこの修道院の外に行きたくないかを問う事。もちろん、口不出た先の受け入れ先は確保してあるという事も教えてあります。ただし、そこが三つの王家が収める国のうちの一つである事だけで、トリステインのラ・フォンティーヌ領だと教えていません。

「分かりました。ですが……」

「分かっています。無理強いはしません。

「こ」が彼女たちにとつて、今現在もつとも安全な場所である事に代わりはありません

交渉は無事に成立しました。ちょっと力任せでしたが……。

別に修道院を潰しに来たわけじゃないんですからこの結果は当然です。と言つたが、潰したらダメなんですよ。もし潰しちゃつたら、棄てられた子達を助けてくれる人がいなくなっちゃいます。この修道院つて、赤ちゃんも育てているんですよ？ フォンティーヌにはまだ乳幼児を育てられるような施設はありませんし……。やう言つては、修道院はやっぱり必要なんです。今度、計画書にも盛り込んでおこつ。

閑話休題。

そう言つ訳で、この修道院から外の世界に行きたいと言つ方の希望を取つてみたところ……、

「けつこういますね~」

「皆、外の世界と言つものに興味を向ける年頃ですから……」

遊びたい盛りの子供……と言つべきか、下は私とだいたい同じ年から上は17・8位の娘たちの殆どがござつて外の世界に行きたいと言いました。年輩のシスターさん達はそれを見て皆顔を青くしていましたが……。

その後、最終的に私と一緒に外に行く事を決めたのは、最初に外に行く事を希望した内の大体半数でした。

減つた理由ですか？ それはもちろん、

「外の世界は、必ずしも優しい世界とも限りません。

あなた達にとって、それこそ地獄のような日々を送らねばならぬかも知れません。

それでも構わないという決意のある方だけ連れて行きます」と言つと、半分の人が躊躇してしまいました（当たり前ですね）。

「口は安全な鳥籠ですからね~。

「それではまた、一年後にやつてきます」

そう言つて私は、希望者をアイン・ソフ・オウルで呑むした籠に乗せて飛び立つた。その後は一旦陸地に運び、そこから馬車などの陸路を使ってトリステインはラ・フォンティーヌ領を目指していきます。

そうそつ、セント・マルガリータ修道院を出て行く半数の中には、ジョゼットさんは含まれませんでした。ちょっと予想外でしたが、どうもあのオッド・アイの少年がからんでいるようです。あんないたいけな少女、キザつたらしいジュリオにはもつたいたのに……。もうこの歳からお熱なんですか？……まあ、いいでしょう。人の恋路を邪魔するのもなんですからね。

あ、

「……そうだ、一服盛るくらいは別にいいですよね？」

「彼女と彼を絶倫にして、彼を服上死させるのも……ブツブツ……」

「お、お嬢様？」

ちょっと物騒な事を考えてしまいましたが……まあ、原作で素直になれなかつた彼にはちょうどいいかもしねませんね？

……ただ、一つだけ気がかりな事を修道院長から教えてもらいました。

それは、ロマリア本国の宗教庁命令での修道女の徴収。そして、その後の消息の不明です。

セント・マルガリータ修道院以外でも、忌み子が預けられている修道院は他にも幾つかあるようです。そのうちの一ついでの出来事ですが……どうにもきな臭いですね。

「さて、どうしたものでしようか……」

私の咳きは、まだ静かなハルケギニアの空に消えていった。

楽しく転生25（後書き）

今回は、少しだけ時間を進めて原作組みの回収イベントを行いました。

色々密に書くと話数が増えるので、その分本編突入後エタ化しあくなる危険性が……。

最初は、ジョゼットさんなどの双子さん修道女です。比較的回収がしやすく、危険な場所です。他のううでも、初期に介入される場所かな？

修道院なんて書いてありますが、男の修道士はいませんね。女所だろうし。またフォンティーヌ領が女の子で溢れる……。

ジョゼットさんの回収は、この時点では見送りました。後々回収します。

フォンティーヌ領の開拓やらなにやら、いきなり一年間もすっ飛ばしちゃいましたが……順調に進んでいます。本当は、もつと細かく進捗状況を書きたいとも思つたんですけど、それは学園編に入つたらチラホラと出していく予定です。

ココで簡単な原作の時系列表を、

園遊会、アンリエッタとウエーレズの出会い（ルイズ13歳

前ガリア王死去、ジョゼフの王位継承（ルイズ12歳、タバサ1

1歳

モード公肅清事件（ルイズ12歳

オリ主、ジョゼットの回収へ（ルイズ10歳

……あれ？ ラグドリアン湖の園遊会と王位継承の時期が、あれあれ？ 予定していた流れが……。

本当は、園遊会でジョゼフやイザベラなどと知り合いになつて、

その後に王位継承とオルレシアン公の肅清事件への介入と言つ風に
しようと思ったのに……。久々に原作読み直したら、この落とし穴

o r z

ま、まあ何とかなるか……な?

楽しく転生26（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

楽しく転生26

「イリナが、私たちの新しいスタートライン……」
修道服を着た幼い女が、フォンティーヌ第一学校の校舎を見上げて呟いていました。

他にも、この幼い修道女の様に校舎を見上げたり、街中を走り回っている水道橋や赤レンガ模様の集合住宅や、周囲を山で囲われた牧草地などに目を奪われています。彼女達の顔には、希望と不安が入り混じっていて、だけどそこには彼らの本当の顔を奪ってきた仮面はありません。むき出しのままの表情で、私たちの街を見てくれています。

……さて、このまま呆けていても困りますね。

パンパン！

「皆さん！ ちゅうもーくー！」

皆さんはもう、修道士ではないのでいつまでも修道服でいられません。代わりの服はこちらで用意したので、アチラの建物でソレに着替えてもらいます！

……それじゃイリンさん、後はお願いしますね？

「はい、お嬢様！」

「！」

この学校で働いている翼人のメイドさん イリンさんに、皆さんが一瞬ギョッとして固まります。まあ、普通に生活していても合うことが稀なのに、隔離世で生活していた彼女達からしたら『翼とか獸耳や尻尾』が普通に生えている亜人さん達のインパクトが強かつたみたいです。

「それでは皆さん、私についてきてください！」

「……」

「皆さん、どうかされましたか？」

と言つて、校舎に入つて行こうとしたイリアさんが振り返ります。

それから、早く来てくださいと言つと彼女は校舎の中に入つていきました。ソレを見て、私が特に何も言わないでいると、皆さんは恐る恐ると付いていきました。

「ふう……」

これでひと段落……、

「ふう、じゃありませんよルーティアお嬢様？」

そう言つて、クランさん……ではなくて、別の翼人さんが降りてきました。彼女は、フォンティーヌ第一学校で精霊魔法（座学）の教鞭をとっている先生で名前は……、

「今は、私の名前はいいです。

それよりも彼女です！ 每回毎回、外の人がああいう態度に結構傷ついてているんですよ？

「彼女は、いつもああやつて明るく振舞つていますけど……」

「それは分かっています。

ですが、これは必要な事なんです。

この領地は、他の領地と違つてアナタ達の様な友好的な亜人達との共存を行つています。それを 多かれ少なかれ受け入れてもらわなければ、この領地で暮らしていく事が困難になります。

それに、一番最初の印象が後々尾を引くと言う事もありますし……彼女の様に明るくて人当たりの良い方が最初の出会いとしてもつてこいなんですよ」

第一印象つて大事ですからね～。

「ハア……その点に関しては重々承知します」

「分かつていただけているならそれで良し、です。

……そう言えば話は変わりますが、この前イリアさんに告白した

と

「あー、彼女達の書類手続きをしないと。それじゃ私はこれで！」

会話の雲行きが怪しくなったのか、彼女は急いで校舎に逃げて行つてしまつた。

フフフ……。彼女（翼人）達も、私の決めた決め事をだいぶ受

け入れてくれたみたいで。ちなみに私個人としては、白い百合が咲き乱れようと黒い薔薇が咲き乱れようと特にかまいません。まあ、

ぶつちやけて『子供が出来れば文句は言わないよ』が指針です。

「さて、いつたいどっちがファーマとオウマになるのか……あれ

? 私は何を言つてゐるのかな?」

う~む、……なにやら電波が入つた気がしますが、気にしないでおきましょ。

それよりも、最近暴れ足りなくてウズウズしてゐるんですよ。日々のところ毎日毎日デスクワーク三昧で……、

「そうだ。気晴らしに竜を狩りま……」

スパーーン!

やたら小気味良い音と共に、私の頭部に凄まじい衝撃が走った。そして、私はそのまま地面に倒れ頭から赤い何かを吐き出しながら

最後の力を振り絞り『クラン』と地面に血文字を……、

「ルーティアお嬢様、御ふざけになるのもいい加減にしてください」はあ、クランさんはジョークが分かつていませんね。私はさつさと起き上ると赤い何かを消し去ります。

「あと、今日はピクニックに行こう的なノリで竜を狩に行こうといでください!」

え、ダメですか? どこの世界のハンターさん達は、いつもそんなノリでリオとかラオとかショーンさんを狩に行きますよ? ほら、私だつてスラッシュアクス持つてますし。

「お嬢様……」

……はい、分かりました。自重します。ですから、その手を止めて下さい。

「ふう。

それではルーティアお嬢様、不在中にお仕事が山のようになつておりました。執務室までご足労お願いしまつ!?

「それじゃクランさん、私はちょっと火竜山脈まで行つて来ますね!

! では!!

書類仕事はもうこじらへりです！！　あの一件以来、大量の書類仕事をすると何故かトラウマを思い出すように壊れそうになるんですねよ！！　って！？

ガシ！！

「逃がしません！」

「いやあああ！」

そして、私は情けない悲鳴を上げながら、ズルズルと校舎の中にある執務室へと連行されたのだった。
チャンチャン。

*

ドカツと椅子に座り、同じくドサツと田の前に詰まれた書類の山。私は、それを見てスッ、ゴクげんなりとします。これが、新しい機械の設計図や企画書ならまだマシなんですが……。まあ、いやな仕事はチャツチャと片付けましょう。

さて、ここで書類整理と一緒に一旦現在のフォンティーヌ領の発展具合についておさらいしておきましょう。なんだか知りませんが、一年間ほどの空白期間がありましたし……。

フォンティーヌ領の街は、他の領の街と違い学校を中心発展して言っています。これは、中世ヨーロッパ的な世界であるハルケギニアでは結構異例な事で、本来なら宗教関連の施設　教会や修道院、孤児院を中心にしてクモが巣を張るようにして街が発展していくんですけどね。

まあ、ロマリア関係の教会からそういう施設を作つて司祭を就任せなさいと言つ圧力はかかる来てます。今回クランさんが持つてきた書類の中には、そう言つた類の手紙も含まれています。今のところ、宗教関連の施設建設は後回しにしています。やっぱ

り元が神様に対しても寛容な日本である私には、ロマリアの掲げている異端審問とかエルフを排斥せよとか言う教義を『はい、そうですか』と受け入れられないんですよ。ついでに言つと、彼らの言う絶典の原本　始祖の祈祷書の序文を原作知識で知つてるので、その教義に色々と突つ込みを入れたいんですね）。まあ、今のところ入れませんが（笑）。

まあ、そういうた類の手紙には危険なモノが仕掛けられてたりもする　過去に一回、手紙に“普通”的毒物が入つていましたので、入念に検査した後で開封しています。もつとも、流し読みしてそのまま専用の籠（ゴミ箱）に投函。後は、活版印刷で量産した“お返事”的手紙を送り返す様に指示を出すだけです。

閑話休題。

次は）、街の開拓計画の進捗に関するモノですね。

学校は、最初の都市郊外の村にありそうな小さな校舎から一変して、さまざまな教科やら研究やらを行うために日々増殖を行っています。具体的に言うと、校舎の裏にある伐採した山を幾分か平坦に慣らし、山の反対側までと続くくらいに校舎が伸びています。これら辺は、結構無計画に建設していくのでそろそろ最適化する必要があります。建築技術が向上したら、高層建築や地下施設　エヴァのジオフロントみたいのを建設するのも良いですね。

そう言えば、丁度学校のある山を越えて少しきくと旧フォンティーヌ領の領主宅というか元ヴァリエール家の別荘があります。今は使っていませんが……元々は公爵家の別荘なので屋敷はそれなりのモノ、後で何かに使えないかな？

水源と水道橋を挟んで反対側には、学生用の寮が山腹に段々畳の様にして生えています。居住区と言う枠組みで40人くらいが住める寮を10棟程建設しましたが……さすがにこれ以上は不要かな？卒業した学生の中には、フォンティーヌ警邏隊　篝隊等に所属するなどして、個人宅を持つ様にまでなった人もいるようですし。他の領地から引っ越してきた人達の中にも、個人宅を持っている人

がいますしね。

「現在の住民数に対し、住居の緊急的な必要性は皆無つと……」

カキカキ。

そつそつ、もちろんフォンティーヌの街はトリスターニア（トリステイン王都）の様に道が狭かつたりはしません。メインの道路は、道幅が馬車が交互通行できるくらいにとつて有ります。それと、治水の面でも日本の江戸を参考にしてしつかりと街中に水道橋を張り巡らせ、水道橋から落とす水の圧力で作動する簡単なスプリンクラーを設置しています。一応ですが、クラブマンに装備させる事でのきる消火用のポンプも作つておいたので、これで火事が起きても安心です。

ふふふ、これでクラブマンもあと十年は活躍できますよー！

……あれ？ 次期重機兼警邏ゴーレム、AV98構想？ ナンデスカこの書類は？

閑話休題。

残るは、商業や工業関連ですね。

工業に関しては、領地の一角を工業区画として工房を建設。そこでこの領内の工業生産を一括で行っています。主な製造品は、箒や結界炉の部品など難しいマジックアイテムから、草刈用の鎌や包丁、鍋の様に生活用品等と幅広く取り扱わせているのですが……やはり、まだまだまだ始まつたばかりと言う感じですね。

一応、工房は工房。研究所は研究所で分けています。で、研究所と工房をエレオノールお姉様達ががんばって皆をひっぱてている様です。……本格的に工房からの成果が出るのは後数年といったところでしょうか？

あ、そうそう。エレオノール姉様には、結界炉での風石の分解と再構成の研究の必要性を知つてもらうために、大深度に眠る風石とそれによる大隆起の事は教えておきました。もちろん、原作知識とかではなくて“蒼い天眼”の力ですよ？

まあ、これを知ったエレオノール姉様は一週間ほどの現実逃避を

しゃいましたけどね。今はもう大丈夫ですよ？

閑話休題。

商業は……絶望的ではないにしろ、難航しています。

やっぱり、亜人との共存や現代地球の技術を僅かばかり取り入れて発展している……少し変わった領地ですかね。ロマリアとかが圧力をかけて来ていて、我が領地の生産品を買い漁るんです。買い漁るという言い方なのは、私が公爵家の間で、王宮からも『こちらに対して不干渉』と言うお達しがあるからです。もし、コレがただの中流貴族や下級貴族だったならば、表立つて不買運動やら、営業妨害があつたでしょう。今のところは、ハルケギニア全域でフォンティーヌ製の製品の売れ行きは良くないと言つたところで

す。その代わりにですが、ゲルマニアを中心に近年活動を開始したをアナハイムにクルスガワ、ヴィクターにグロリオーサ etc……と言つた商会を経由した“無印”製品の売れ行きが伸びています。名前を見て分かるように、ゲルニアの転生者達が立ち上げた様です。しかも、そろいもそろつて『搖り籠からお墓まで』や『拳銃から戦艦まで』などと謳い文句で言われた企業ばかり。験を担いでいるのか、手にしたチート能力がそうさせているのか……。まあ、彼らの協力で一から裏ルートの製作を行わなくてすんだのは嬉しい事です。

「え、と、この書類も……問題なし。

……。

ふ、終わった

最後の書類に判とサインを押してひと段落。両手を広げて盛大に机に突つ伏します。

「フフフ、お疲れ様ですお嬢様」

あ、もう、笑わないでくださいよクランさん。私は、デスクワークよりも外で暴れたり機械製品を作つたりするのが性に合つてゐ

んですよ？

あ、お茶ありがとうございます。

ふ……。

ああ～明日は何をしましょうか……新しい筹の開発？ それとも、前から構想を練っていた戦艦の建造？ いやいや、獰猛な竜種が巣くう火竜山脈にピクニック（ハンティング）も棄てがたいですね～。「……そうだ、アルビオンの件もさっさと解決しましょう」

危ない危ない、思わず忘れるところでした。

任務の難易度的に考えてクランさんだけで問題無し。モード公かサウスゴーダ家に忍び込むなりして、親書とロザリオを渡すと言つだけです。標準でステルス迷彩を装備しているクランさんには他愛無い事でしょう。

「……と言つわけ

「何がどういうわけなんですか？」

突つ込まない突つ込まない。

「クランさんには、近日中にアルビオンに極秘で出張してもらいます。

あ、お茶のお代わりください」

「はいどうぞ。

それにしても、急な話ですねルー・ティアお嬢様？

まだ、先日ガリアのセントマルガリータ修道院に出向いたばかりだと言つのに……」

う～、私が急けていたつけなんですよ。もうちょうひと早く彼女達に接触していれば、こんな苦労をクランさんにはさせなくて良かつたんです。

まあ、悔やんでも始まりません。時間もないでの分担作業です！
「詳しく説明しますとですね……」

「…………と、言つ訳でお願いします

「ハア……。分かりましたお嬢様。

でも、もうちょっと早く教えてくれても良かつたともいますよ？」

アハハ、ごめんなさい。

でも、これで私はガリアの問題に専念できます。領地経営は、アストレアさん……は学園に行つていてムリそつなのでエレオノール姉様か偏在に代役を任せましょう。

私は、金庫からこの時のために予め作つておいた親書とロザリオ、それからティファニアさん達を庇うためのカバーストリーを書いた書類の束をクランさんに……そこで私は手を止めました。

「書類は、また後ですね」

「ええ……まつたく、無粋な侵入者達です」

蒼い天宙眼が、チリチリと疼く。

クランさんも直ぐにハマノツルギを構えた。

楽しく転生26（後書き）

祝、70万PV & 10万ユニーク突破ーー！

前書きに“闇鍋”と書きつつ、カオスじゃない事に。おれ

今回は、投稿するまで時間がかかった割りには、セントマルガリータ修道院からフォンティーヌに帰った後、どの様に領地が発展したかの経過報告でした。

このSSSのオーナーことルーティアは、伝統を重んじるトリステイン王国の公爵家の一員です。なので、他のSSSである様に内政チートによる富国強兵や、国を挙げての平民の教育等がある程度しか出来ないと言う枷を背負つてもらっています。

これが、ゲルマニア帝国やクルテンホルク大公国ならまだ幾分か自由度があつたんですが。

いまさら気づいて事なんですが、ルーティアがあんまり外国に出て行つていないと言う事態が発覚（いまさら何言つてんの？）

ティファニアとか、イザベラ、タバサ（シャルロット）とかと一切の接点を作つていませんでした。（マズイですね。

閑話とかを入れて、無理矢理接点を作るのもなんですし……このまま逝っちゃいましょう。

ティファニアさん達には、足長おじさん風で支援すれば良し。

ツンツンでギスギスなイザベラさんと、オドオドなシャルロットさんとの関係も……まあ、これから干渉すればなんとか（ならんならん。

楽しく転生27（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと書ひ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

スランプ気味で、文章にグダグダ感が……　Orz

*

転生って本当にあるんだなーって思った事があった。

そこで、転生した先が生前結構好きだつた『ゼロの使い魔』って小説の世界だつたから、そん時は神様つて本当にいるんだなーって思つたりもした。

そんで、チート能力をもらつて無双……出来ると思つたんだ。手にしたチートは……AMS適性、デバイス・マスター技能、NIT能力だZE。

……とにかく言おう、剣と魔法の世界でこんな能力役に立つかー！！

ACネクストねーよ！

科学力が中世ヨーロッパなんだよ！

サイコミコ兵器もねーんだよ！

せめて用意していくおいてれよ、ゴジマでリリカルでガンダムな口ボットをよーーー！

ハアハアハア……ぜつてー能力と世界が噛み合つてない。そう思つて『世界に絶望した!!』と、夕日に向かつて叫んだ事もあつた。唯一の救いは、オレがメイジだつたつてくらいだな。

ゼロ魔系のSSも読んだ事があるし、その登場人物みたくチート魔法が使えたらつて思つた事があるし、そこの人間みたくチート魔法が使えた事があるし、だからよ、欲を言わせてもらえるなら火のメイジじゃなくて土とか風のメイジがよかつたぜ。そんで、ドットじゃなくてスクウェアメイジくらいの実力

が最初つから欲しかったＺＥ。

とにかく使えないモノのオンパレードだった。

いや、これ位はまだ序の口だな。

神様、オレに恨みでもあるんですか？

転生した先がロマリアってどういう事なの！？

他の国と比べて死亡フラグ満載じゃないけど、宗教なんてそんなにめり込めないってば！ 每朝教会に参拝する気もねーの！－！でも、しないと親にシコタマ怒られるけどね……。

そんで……。

ソンデ……。

そんで右翼曲折あつて、今はトリステインの異端共を裁きに来たんだ。オレは、その尖兵つてヤツだ。

アレ、ナンデコウナツタ？ ナニカサレタキガスルガ……マア、イイカ。

んで、ＮＴ能力のすば抜けた勘と、デバイス・マスター技能を応用した破壊工作がオレの仕事つてなわけだ。

「悪いな、これも戦争なんだ」

さて、仕掛けは万全。あとは後続の騎士様方に任せると……ツ！？

力力力力！！

オレは、咄嗟にその場から飛び退り杖を構えた。そして、今までオレがいた場所には無数のナイフが付き刺さっていた。

あ、アブねー！ ＮＴ能力がなかつたらやられていた……じゃなくつて！

「ちい！！」

再度投げつけられた八方から投げられるナイフを避け、オレはその場から逃走する。敵の姿が見えない。だが、少なくとも一人じゃない……複数のはずだ。なのに、敵の姿がまったく見えないってなんだよ！？

「仕方ない。計画までまだ時間があるが……」

まあ、あいつらなら臨機応変にやつてくれるだろ？今は、オレが生き延びるのが先だ。

オレは、懐から5と番号が振られた小さいハコを取り出すと、そこにについているボタンを押した。

「ポチつとな…………あれ？」

もう一度押すが、何も起こらない。

「ポチポチポチポチ……」

他の発火装置のボタンも押して見るが、何も起こらない。

度畜生！なんで爆発しないんだよ！遠隔発火装置のマジックアイテムは、ちゃんと設置したはずだぞ！？

「お困りのようですがどうかされましたか？」

いやー、さっき仕掛けた発火装置が機能しなくてさー。

「発火装置……と言いますとこれでしようか？」

ガシャガシャガシャ……。

そうそうソレ……って、なんでソレがそこにあるの！？てか、

アンタは！？

「申し送れました。私は、じがないメイドさんです」

「ウホ、いいメイド……じゃなくつて！」

「ファイアーボール！」

惜しいが、見られたからには消させてもらつ！ どうせ、オレを追っている奴らの一人だし騎士団が襲撃すれば……、

パリーン！

つて、えええ！？ オ、オレの放った渾身のファイアーボールは、まるでガラスを割る様な音と共に碎け散つてしまつた。

そして今更に成つて気づいた事だが、本当に今更だが、メイドさんはやたらと大きなハリセンを持つていたんだ。

おいおい、魔法が消えただ？

「ん……ハリセン？」

「そんな、まさか！？？」

「あ、あつちやいけない。」

オレは、唱えられる限りのファイアーボールをメイドさんに向か

つて放つた。だが、

ハリーン！ ハリーン！ ハリーン！

「あ、あ、あ

か、勝てない。こんな手でオレは勝てない！

「チェックメイトです」

えええええ！――！

前後左右、四方八方を埋め尽くすようにして、どこかで見たよう

な無数の少女型蟲除口ホッエがオレを囲んで……

二二四

機に力不足は万能カンダムなハンマーの他はさあさまな鎌火器の照準を才へに向けていた。

「吉野（作者）の懸念が見え

「全機攻擊開始！」

ガガガガ……………！！！

メイドさんの掛け声と

せめてこのセリフだけは言わせてく、ガク……。

「ふう、市街地に駆け入った金工作品の堆積、脱げ、脱げ」とお嘆願する。

『お疲れ様ですクラシさん。』

ところで、その上作兵ですが

「うーん、安心を。多少抵抗されましたが、

弾で制圧しました

そうですか お疲れ様です

ランさん

「はい、ルーティアお嬢様」

*

ガチャコン……。

私は受話器を置き、執務室の机に両肘を付くと、口元を隠すように手を組んで細く笑つた。もちろん、小さめで丸い色眼鏡も忘れちゃいけません。

そして室内には私以外誰もいない。いや、正確には人間は私しかいません。なのでコレに突っ込んでくれる人は誰もいません……グス。

閑話休題。

部屋の中は、今まであつた応接セツトや調度品等のあつた場所がひっくり返つて、別のモノ　さながらSF系の司令室セツトへと入れ替えられている。証明も落とされていて、その雰囲気を十分に醸し出せているでしょう。

ナビゲーションシートには、人間の代わりに簡易人工精靈『試作型ツクモガミ?型』を搭載したアルヴィーさん達が席についています。

「つまり、可愛いプチネウスやプチディイジー、それとナビコなんかがせつせつせと監視カメラの画像を見張つていたり各部署に指示をだすのです！」

「ダレー、イッテンダ、ダレニ」

ああ、ありがとうプチーズさん達。今突っ込んでくれるのはあなた達だけです。

さてと、私はメインモニターに市街地外に潜伏している賊の

画像 動画ではなく、初期のカメラ技術と魔法の鍊金を組み合わせて実現したカラー写真をメインスクリーンに写すように命令する。一拍置いて、部屋の中央に設置されているスクリーンに一枚の写真が映写された。

深夜、蒼い街灯が照らすフォンティーヌの街路を顔までスッポリと覆い隠した黒装束の集団が身を低くして走っていく姿だ。しかし……服の所々に金や銀色な装飾品の他、デッカクで派手な飾りまで付いていたりするので、

『テメーら、本気で忍氣あるのか！？』

と、不覚に突っ込んでしまいました もちろん心の中ですよ？ それにもしても、口口まで自分たちが怪しい者ですと体现してくれる侵入者は珍しいですね。一步間違えば、仮装行列とも言い訳できそうな位の連中です。彼らのアイデンティティーとかいうヤツでしううか？

「まあ、あからさまに身分の分かる様な格好の侵入者なんて……」

「アチャラッシー、しゃしん、です」

たどたどしい声で回されて来る新しい写真には……、

「は？」

曇り一つない真っ白な鎧 金銀で甘美に装飾され、ロマリア宗教院を表す紋章を隠す事無く堂々と歩いてくる聖騎士達が写っていました。襲撃しに来たんでしょう？ そんなに正々堂々と歩くなこのおバカ共！！

「……バカですね。正真正銘のバカばっかりです」

はあ……。まあ、彼らが超の付くおバカだと叫び印象は持てたとして……防衛ラインまであとどれ位？

「……市街地の南側から進行して来る集団が一番早く、あと100メイルと言ったところ。次に近いのは、西側から進行して来るおバカ共で、あと500メイルほ……」

「キチャガわ、ミかいチャク、エリアから、そくホウです」

「三つ目ですか、画像は？」

少し間を置いて、モニターに北側からの集団が映し出された。うん、こっちもバカだ。白い騎士甲冑を着込んだ聖騎士達に、

「竜……ですか」

騎乗用の火竜が……30匹位かな？ 騎士達は、彼らからせつせと蔵等を外す作業をしています。……大方、野生の火竜に見える様に偽装しているのでしよう。

ううん。大体、彼らの大筋は大体読めました。

盗賊に扮した聖騎士と野生の火竜の群れがフォンティーヌの街を襲い、たまたま通りがかつた聖騎士達がそれを阻止しながら街を破壊する……おバカ共が変装もせずに堂々とやつて来るのもコレで負けます。

「さて、そろそろ最初のグループが防衛ラインに接触する頃ですね？」

「きより、やく20メイル」

「うむ。襲撃者の皆さん、紙袋の準備は万全ですか？ 今までの性癖とサヨナラは済ませましたか？ 臭い飯を食つ心の準備は出来ましたか？」

「……では、第一次使徒防衛線を開始します」

「そう言って、私は椅子から立ち上がり両手を大きく広げ、「諸君、派手に行こう！」

舞台の幕を上げた。

「……今度は、だれも私に突っ込んでくれません。うー、クランさん早く帰つて来てくださいよー。」

*

異端に裁きを！

神の御技たる魔法を平民に広げし異端者に裁きを！

我らが偉大なる始祖ブリミルの教えを信じぬ亜人共、そんな奴らと共存を行うかの者達に神の鉄槌を！

悪魔の業でもある先住魔法を広めんとするかの者達に裁きの鉄槌を！

……部下たちの士気はすごいようだ。

だがしかし、ああ忌々しい！なぜ、神聖なるロマリア聖騎士団がこそ泥の様な真似をしなければならぬのだ？

「なぜ、宗教庁は異端審問の許可を出してくれないのだ？」

部下の素朴な疑問も分かる。相手は異端者だ。偉大なる始祖ブリミルに祝福されし我々に、正面からはむかうヤツなど決していい！なのになぜ、この様なこそ泥の様な真似をせねばならぬのだ？

……いや、理由は分かつている。

トリステイン王国で、事実上宰相を兼任しているマザリー二枢機卿とトリステイン王家が、神聖なる我らがロマリアに圧力をかけて来ているのだ。外交的配慮とか言つフザケタ理由で、表立つて聖騎士団を動かせないとは……。

「アー忌々しい！！」

ハアハアハア…………しかも、厄介な理由はそれだけじゃないと來ている。

昨今、我らが神の国であるロマリアで、ジエイル・スカリエッティなどと名乗る異端のメイジが暴れ回っているのだ。

しかも、そいつの行動に感化された一部のゴミ……民衆が暴徒化し、教会が襲撃されるなどと言つ前代未聞の事態も発生してしまった。本当に前代未聞だ！！

しかも、そんな時にヤツは突然現れ、ゴミム……民衆を唆したのだ。そして、我らは教会に収められた神への供物を奪われ、聖騎士団員にも重傷者や死傷者を出すと言う深い痛手を負わされたのだ。

おかげで、神聖なる任務を全うするはずの我らの力を、あんなゴミム……ああ、もうゴミムシでかまわん！ 異端共の掃除に使わねばならなくなつたのだ。忌々しい事この上ない！！ あの様なモノなど万死に値する！！！

「……しかし、コレだけの聖騎士と竜を確保できた事は行幸だ。

おお始祖ブリミルよ！ 私は、必ずこのトリスティンにはびこる異端者に裁きを『えよつぞ！！』

ああ、神よ！ 我らにコレだけの軍勢を『えてくれてありがとうございま……ん？

「……妙に周りが赤いな？」

先行した部下共が、街に火を放つたのだろうか？ いや、だとしどもこんな風に赤くは……、

「た、隊長！ つ、月が！」

「ん？ 月がどうしたと……な！？」

見上げた夜空には……おぞましいほど真紅色に染まつた巨大な月が浮かんでいた。

Another side end

*

「南部方面、第一次防衛ラインにて侵入者達をホイホイさん部隊により迎撃。

侵入者達は、第二次防衛ラインである迷宮エリアへと逃亡したようです」

「つむ、問題ない」

「……何をやつているんですかルー・ティアお嬢様？」

あ～、クランさんの突っ込みに癒される～。出来れば、もっとアグレッシブでスプラッタな感じに突っ込んでも……。

閑話休題。

それはさておき、逃げちゃったんですか？ ホイホイさんでやられていれば、彼らはとても幸運だつたでしょ！」

「あの迷宮には、金ダライや昆布雨に納豆の落とし穴等々……色々と精神力が削られるトラップを仕掛けでいています。走破する頃にはグロッキー状態ですね～」

いや～、実際に試していなかつたので彼らにはいいサンプルになつてもう一いましょう。あ、そうです。念のために真ライフサイズホイホイさんも配備しておきましよう。

「はあ……。北部方面での襲撃者、依然として火竜襲撃の準備を行中。

西部方面の侵入者達は現在、第一次防衛ラインに向かつて進行中。どうされますカルーティアお嬢様？」

「……もちろん、エヴァを出しますよ？」

「そのためのエヴァですか？」

「あの……考へ直してくれませんか？」

「あれは、生理的にちょっと……」

顔を真っ青にして、使用の中止を訴えてくるクランさん。まあ、

気持ちちは分からぬはないですが……、

「モット伯での事程度でグロッキーだと、これから始める祭りには耐え切れそうにありませんね～」

「あ、あれ以上の事をやるつもりなんですかルーちゃん！？ 何を言っているのですか？ もちのろんですよ～？」

クランさんは、顔を更に真っ青にして椅子に座ってしまう。気分が優れないようでしたら退室しても大丈夫ですよ？

「……え、お嬢様が暴走しないように見張つておかないとけませんから」

アハハ……。

「ではクランさん、腹を括ってくださいね？」

「チャイしよう、ダイイチぼうえいラインにセッチョク、しまス」

「ククク！」

では……エヴァンゲリスト初号機、発進！！！」

「え、ヴあんげリストしょ、ゴウキ、シャしゅつ」

さあ、あなたたちはどんな声で悲鳴を上げますか？

楽しく転生27（後書き）

いひいう書き物系でで一番困るのは、敵さんの心情と言つか描写だと思います。

前回の投稿から……早半月かな？ 神様万歳なロマリアの騎士さんや、オリ主の領地攻撃の作戦プラントか、描写的仕方で悩んでいたらこんなに成ってしまった。

一人称だとそう言つのが結構辛いんですね。作者が主人公を大いに盛り上げようとしていると、どうしても相手の事がおろそかに成ってしまって上手く書けないといつ……。

とりあえず、最初の撃退者はロマリアに転生した哀れなモブその一でした。

手にした力が、世界とミスマッチなかわいそうな男ですね。ロマリア転生物は、今まであまり見たことがないので囁ませ役として出しましたが……。

ロマリア転生だと、大抵は『ナニカサレタコウダ……』と言つ傀儡ルートか、『奴らに復讐してやる！』と言つ異端審問生存ルートでしょうか？ あ、水都市のアクリエイアドコンドリ亞ーノをやると言つルートも（火星でやつてゐる。

せつかくの防衛戦なので、新世纪な感じで装つて見ました。ただし、職員は全員アルヴィーと言つ悲惨な状況。

ツクモガミは、まかでみいから採用。翼人さんなど精靈魔法が使える人達と一緒に開発した人工の精靈です。ちなみに翼人たちの印象は「ちょっと大きい“大いなる意思”の塊」程度の認識です。

さて、では次回をお楽しみください。

楽しく転生²⁸（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔^{SS}です。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

*

Another side

状況がまったくつかめん。

辺りは何故か赤く染まっている。

空には何故か不気味な紅い月が昇っている。

先行した部隊は、とっくの昔に市街地を攻撃しているはずなのだが……遠見の魔法で確認してみても一向に火の手の一つも上がらない。試しに北側で待機している火竜部隊に出撃の合図を出してみたが、そちらからも返事が返ってこない……。

……ふん、まあいい。

「我々は当初の予定通りに進攻を行う。

市街地に到着して、先行した部隊が破壊活動を行っていた場合にはそれに援護を行いつつ戦闘を行う！

もし先行部隊による破壊が見られなかつた場合には、我々のみで異端共に神の鉄槌を下す！

火竜部隊の進攻が確認されたら、一旦市街地外に退避して火竜たちが街を破壊しつくすまで待機。その後、生き残つた異端共の排除を行う！

では、全軍進め！！

私は号令を飛ばすと、部下たちと共に異端者たちの住む街へと進軍した。

「……なんだアレは？」

そして、丁度我々が市街地の入り口に差し掛かつたところでそれ

を見つけた。地面に不自然な……扉か？　おそれく鉄で出来た扉の様な物が取り付けられている。

「おい、アレがなんだか分かるか？」

「は！　おそらく扉だと思われます！」

「そんな事は判っている！　なぜあんな道のど真ん中にあの様な……く！」

ガシュウン！！

凄まじい音と共に、地面の扉から煙幕が上った。

そして、その扉だった場所には骨組みだけの箱に納められたまったくと言つていいくほど特徴のない「ゴーレムが固定されていた。なんだアレは？」

「全軍防御体制！　警戒しろ！…」

私は、咄嗟に部下たちに指示を飛ばすと、自身も杖を抜いてこの「ゴーレムを警戒する。この領地は、砂漠の悪魔達とも手を結んでいると詠う噂もある。警戒するに越した事はない。そう私が思つてゐる」と……、

ガコーン！！

「ゴーレムが箱から出ると、凄まじい衝撃と共にヤツから光が放たれた。

「なー？」

「ラーグウ、アーンドウ、ピース！！！」

そして無面の「ゴーレムは、一瞬にしてそのひ弱な姿をなんともおぞましい姿に 握つたら折れてしまいそうな細い姿から、全身を強靭でゴレでもかつて詠う位に強調された筋肉の鎧姿に変わった。

それが着飾るのは重厚な鉄の鎧ではなく、あまりにも薄く肌に密着し殆ど何も隠す事無くアレの筋肉美を伝えようとするモノに変わった。

「愛、知つているかしら？」

そして今まで煙に隠れていた顔が姿を現した。線が細く艶やかな眼にツヤののつた紫のルージュで装飾された唇、「ゴテゴテとした概

観に角刈りの頭髪に綺麗に整えられた髪と言つて滅茶苦茶な組み合わせの顔だ。いや、もつとおぞましいのは、この「ゴーレム全体が瑞々しい」と言つ事だ！　まあまるで生きているようではないか！！

部下たちが悲鳴を上げる。

な、何だコレは！？ なんとおぞましいーー！ 神への冒瀧……い

「二、攻撃!! 攻撃だ!!! や、そんな表現でには生ぬるし!!!

何をやつていいるー！この神を冒瀆していいるとしか言えん化

八！

それから、火球に風の刃、石の弾丸に水の刃……とにかく知つて

「アーッ、ソ・ザ・キ・テ・キイ！」

我輩、こんなにも積極的な挨拶に感動したわ。

あ、アレだけの魔法が効いていないだと！？ そんなバカな！！

「う、ウオオオ！！」

何人かの騎士達がブレイドを唱え、あの化け物に果敢にも切りかかる。そうだ、遠距離がダメでも白兵戦なら、ら！？

卷之三

や
上
め

「アーティスト」

「アハン！」

や、止める！ そんなおぞましい場所で神聖な杖を受けるな！！

「アーッ！　！」

……なんて、なんて激しいのかしら。我輩、感激——！——」
ギューム！

化け物は奇声を上げ、切りかかつていた騎士達を捕縛する。
な、何をする気だ！？

「汝に……」

い
い
か
ん
！
ヤツを攻撃しろ！

「ダメです！ 今攻撃したらジョーー達が！！」

幸アレ

一ノ九二

濃厚なベーゼと呼ぶべきか、ジヨニーはあの化け物に唇を奪われた。最初はじたばたと暴れていたが、次第に手足から力が抜けたようだ。ダラリとなり……たまに痙攣したようにビクビクと動いている。

ジュッポン――――

そこで おやぐれであるNII、それをシミーの口から弾かれ

「次はこつちね！」

「か、かーさん助け！！！ イ、イヤダ————！！！」

ブチュヽヽヽヽ
ジユポンヽヽヽ

「汝に、幸アレ」

アラルカニア

その言葉と共に 真田にかへて 一矢之志を 力驕二邊を挙げ落とす機

「う、次はアタッカム」

そして、あのヒナ物は次の獲物を私にまかね。

カツンカツン、

二十一

「ひ、ひるむな！ 神聖なるブリミルに使えし聖騎士たる者が、あ

をつゝかヒヤツコ魔去を放つが、まつたく効果的

つゝつするつちこ、ヤツはおぞましいポーズをとりながら一歩一歩確実にこちらに歩いて……歩いて？なぜヤツは歩いてくるのだ？

走れば、もつと速く間合いを詰められるといつのことか！
あれは元は「ゴーレムだ。あのおぞましい姿を維持するのに、よほ
ど精神力を使つていいのだらう。ならば、

「各員よく聞け！

あの化け物……いや、「ゴーレムはおそらく走る事ができん！ 左
右から回り込み、市街地へと進攻する！

そして、あのおぞましい「ゴーレムを操つていいメイジを発見しだ
い、即異端審問を開始せよ！」

「りょ、了解！…」

「あ～ん、まつて～！…」

誰が待つか！ あのおぞましい「ゴーレムを作りし異端め！ 聖な
る炎でもがき苦しむがいい！…

*

ハアハアハア！

オレ達は今、必死にあの化け物を振り切つて異端者の住む街へと
向かつた……はずなんだ。

「なんなんだよ、これ……」

さつきまで何もない道だけだったはずだ。だけど、いつの間にか
回りは壁、壁、壁！ コレじゃまるで迷路じゃないか！…

「他の仲間ともはぐれてしまつたし……どうす、る？
シャアアアアアア……」

「なんだこの音は？」

そう思つて、今しがた降りてきた階段の方を見てみると、

「ラ～ヴ、アンドゥ、ピース！…」

「ギャアアア！…」

あ、あの化け物が、小さな荷車の様な物に乗つて階段から飛び降

りてきたのだ。

オレは逃げた。それを見て、一旦散に逃げた！　いやだ、あんなのとキスしたくない！！

「あ～ん、まつて～」

誰が待つか！！

あの荷車みたいのは、どうやって走っていてるか分からんが、真っ直ぐにしか進めない様に見えた。だからオレは必死に走り、やつと見つけた脇道へと逃げ込んだ。

「コ、コレで……」

キキィィイー！！

凄まじい音と煙を上げながら、あの化け物は直角ターンを決めてくれたのだ。

「何で曲がれるんだよーー！」

「愛の力よ～」

ワケわかんねーよー！

とにかく逃げるしかない、そう思つて真っ直ぐで長い道を全力で走つていくと、

ガシュンー！！

いきなり地面から壁がせり上がり、通路を塞いでしまった。

オレは、壁とぶつかる寸前で止まり、壁を拳で叩き……ヤツもまた壁に両手をめり込ませながらオレを捕縛した。

「さ、ツ・カ・マ・エ・タ」

「ま、マジかよ！　夢なら覚めて……アアアアアアアアーー！」

「なあ」

「どうした？」

「この任務が終わってロマリアに帰つたら、オレ、司祭様にもつと給料を上げてくれと上申しよと思つんだ」

「ハハハ、ソレいいな！　こんな恐ろしい任務でもらえる報酬が6

〇〇〇ヒキューまつちのはした金じゅや、ゼんぜん釣り合わなこ……

「やめお前ら、それはフリ、……」

ズガーン！

「――ヒヤー――？」

「う～ん、汝らに幸あれ」

ブチコ～！！

「ギヤアアアアアアアアア――――！」

「すまん！ オレは逃げる！ オレは逃げる――――！」

……また、やられたか。

この迷路のよつな場所に入つてから、塵じりになつた同志達の悲鳴が絶えない。部下達も、その声を聞くたびに身を竦み上がりせて辺りを警戒する。

「安心しろ、声は遠い……。

それよりもトラップに注意しろ――」

「うう、マイク、マイクウウ――」

「泣くな――」

先程、左右の壁に押しつぶされて一足早く、ヴァルハラへと旅たつた同志を悔やむ部下を叱咤し、私は先を急いだ。

「……ここは？」

やつと迷路を抜けたのか？ 壁が途切れ、何も無い場所に出てしまつた。遠くの方に何か見えるが……アレは街か？

「……よし、もう直ぐだ！ 全員気合を入れろ――」

フフフ、数は減つたが十数名にも及ぶ聖騎士が到達できたのだ。奴らに引導を……ん？ 何だアレは？ ……まさか！？

「……おいおい嘘だろ！？ 嘘だといつてくれ――！」

そう叫んだ部下の気持ちも分かる。田の前の地面を埋め尽くすよう、あの化け物が出て来た扉が敷き詰められているのだ。

「――、こんなのこけおどしだ！ 沢山しかけりやいいつてもんじゅ

.....

誰かがそう言つた次の瞬間、

ガシュシュシュシュシュー…………！

あの化け物共が、地面から次々と…………あれ？

「ほ、本当にこけおどしかよ！」

出でくるのは空箱だけだつた。

「さ、さあ、気を取り直して…………」

「た、隊長！ う、上！ ウエーハーハー！」

「なんだ騒々し、あ…………」

あの化け物が、空を埋め尽くさんばかりに飛んで来ているのだ。

「はは、アハハハハ！ ！！！」

「おいおい、一体何体いるんだよ！ ？」

「向こう側が見えない…………」

「や、止める！ 来るなあああああ…………」

「「「ラヴ・テンプテーション」「」「」

「「「アアアアアアアアアア！ ！！！」「」「」

そして、私たちは肉に埋もれた。

Another side end

*

「ロアリアの使徒は、量産型エヴァンゲリストに食われましたか
「その、様です、ルーティアお嬢様…………もうダメ。失礼します」

バタン！

クランさんは、トイレでナイスポートのよつですね。とりあえず、
出撃させたハプシエル達はそのまま第一防衛ラインに残存する聖騎

士達の鎮圧に向かわせましょ。といつが、いい加減疲れてしましました。

「さて、残るは火竜さん達にその騎乗者達ですか……」

飛び立つた火竜たちは、すでに月匣の中に捕らえてあるので問題なし。ですが、薬品でも投げられたのか異常なまでに気性が荒いようですし……、

「ちじょうタイキちゅうのブタイ、こんばとさんブタイによりゲキタイ。

カリュウいがいノゼンタイショウ、カンゼンにちんもく」

「そう、分かりました」

うん、クランさんもいないことですし、せっかく残しておいた火竜……30匹ですか？ 腕が鳴りますね～。

「では、狩の時間です！」

そう言って、意氣揚々と部屋を出ようとドアを開けると、

「……お嬢様、自重してください、な！？」

ボウーン！

私は、小さく爆発と共に消えちゃいます。

「偏……在？ お嬢様ー！！！」

あとには、クランさんの悲痛な叫び声が響いたそつな……。

「ごめんなさいクランさん。私は、すでに執務室ではなく秘密の格納庫で準備をしています。そう、こんな事もあるうかと建造していました 半ば趣味の暴走で作った新兵器をお披露目できるまたとないチャンスです。

「せつからく火竜が30匹もいるんですよ？ 狩らないわけにはいきませんよね～」

それに、作った兵器が対人戦で使えないって言うのがあるんですね。分厚い殻と鱗に守られ、生命力の高い火竜相手なら実験にはもってこいです。

「全火器への弾薬……セット完了」と

よしよし。私は、薄いなめし皮を使って特注した白いウェットスーツの様なモノを装着しながら、兵器の起動シーケンスを進ませる。そして座席に私の身体をベルトで固定すると、機体各部に設置した結界炉を起動させた。

真紅に塗装された機体を中心に凄まじい量の風が噴出し始める。ああ、これで緑とか赤色の謎の粒子とかが出てくれればもつと良いんですけど……でないのは仕方ありません。

「では……。メタル・ウル……じゃなくって、アーグビートル・カオス発し……え、違う?」

あ～もう、言えばいいんでしょ!……って、誰に言つてゐるのかしら?

まあいいです。私はグリップを強く握ると、カタパルトで加速しながら格納庫の扉をぶち破つて外に飛び出し、

「レツツパーティイイイイ!!」

なぜかこうしようと、世界が言つていた気がしたので叫んだ。

*

Another side

別段普段の扱いが不満じやなかつた。

オレ達の乗り手は……まあ、色々とアレな連中だが悪い奴らじやない。上手い飯ももらえるし、他の奴らから巣を襲われるこどもない。縄張りをもてなかつたり、好きに飛び回れないのが若干窮屈だが……今回みたいに自由に飛んでもいいといわれる事もある。

今日は好きなだけ飛んで、好きなだけ食べて、好きなだけ壊して

良いんだよね？

相棒は、オレの質問に『会図が出るまで好きなだけやれ』と言つてくれた。

そして 気分の良くなれる水を飲んでから意気揚々と升ったまではいいんだが……一向に目的地に着かない。

いい加減イライラしてたら、アイツが現れた。

*

なんなんでしょうね、田の前で繰り広げられるこの光景は……。

私の心配も何のその、30匹もの火竜に単機で出撃してしまつた
ルーティアお嬢様を止めようと戦場まで来たのですが……。あ、別
にルーちゃんが30匹くらいの火竜に遅れを取るとか考へてはいま
せん。でも、あんまり奇行と言うかハツチャケタ事をして欲しくな
いんです。ほら、奥様とか色々とぶつ飛んでいますし…… 可愛いル
ーちゃんがあの腹黒口リバ…… イエイエナンデモナイ田? ただ私
は、ルーちゃんがレベルとかが下がるお茶とかお茶とかお茶とかを
平然と飲ませるような鬼畜女の様には成つてほしくないだけで……

つは！ そうでした。今、目の前では30匹の火竜とルーティアお嬢様の乗っている……筈なのかな？ とにかく真紅に塗られた機

体に乗り、戦闘機（？）形態と人型形態の両立なんて言うHENTAI的な変形機構を織り交ぜて、複雑な三次元機動を繰り返しながら火竜たちを翻弄しています。

「すごいですね。でも……開発計画にはあの様な機体はなかつたはずですし」

なにより、あの機動ではパイロットにかかるGの負担が計り知れないのでしょう。対Gスーツの開発も出来ていませんし、これも月衣のおかげでしようか？

「だとしたら、開発計画に乗つていもないのも肯けますね」

根本からして、一般人向けの開発ではありませんし……。

あらかた機動性のテストが終わつたのか、今度は武器を構え……つて、えええ！？

突然両肩にあつた筒が開いたかと思うと、そこから無数の銃火器が飛び出した。い、いや、ウイザードは普段から月衣にいろいろな武器をしまつてるので、これ位で一々驚いてちゃダメですね。……でも、何も知らない人が見たら画期的な武器収納ケースに見えるんでしょう。ナイスアイデアですお嬢様！

……つて、さつきまで褒めていたんですけど、正直言つてやりすぎですお嬢様！！ 大口径の二丁拳銃に始まり、ショットガンのダブルトリガー、グレネード弾をばら撒くガトリング砲に超長距離用対物スナイパー・ライフル、仕舞いには無数のマイクロミサイルを吐き出す筒などと言つ……あまりにも、あまりにも火竜たちがかわいそうになつて来る様な銃火器のオンパレードです。

……いえ、それだけではありませんでした。

「プロミネンス、ファイエル！？」

「ゴウ！」

立派な一本の角から紫電に輝く奔流が放たれ、それに巻き込まれた火竜は跡形もなく蒸発していきました。魔法で再現した荷電粒子砲ですかお嬢様……。

そして、焼き尽くされる世界。

私は、この後お嬢様にどうこうお仕置きをしたら良いのかと思案を巡らせる事で、田の前に広がる現実と言ひ名の破壊から田を背けるのだった。

*

あれ？ 何でオレ意識があるんだ？ 確か壁に押しつぶされて、ヴァルハラに召されたはずじゃ……。 そうか、ここがヴァルハラなのか。
「マイク！ マイクー！ 生きてたのかーー！」
その声は……って、何でキサマ素つ裸なんだよ！
つて、オレもか！？ 他の奴らもいるが皆素つ裸だし……ん？
「や、止めるーー！」

何故唇を近づけてくるー？ 止めろ、止めてくれー！
ガシ！

「シ・ゲ・キ・テ・キニヤルハラー！
た、隊長！？ どうしてそんなモノをつて、
「パイルバンカアアアアアアアー！ーーー！」

そして、黒い薔薇が咲き乱れた。

Another side end

*

「あ～、ところでルー・ティア」

「なんでしょうお父様？」

「最近、王都周辺でロマリアの聖騎士などと名乗る気の狂った全裸の集団が捕まつたらしいのだが……ルーティアは何か心当たりはないか？」

「？ そんな面白い方達がいたの……」

「あ、ああ、関係ないならいいんだルーティア。今言つた事は直ぐに忘れなさい」

「？ そうですか……」

私はお父様にそう返すと、細く笑いながら踵を返した。

後日、その氣の狂つた ハプシエルによつてハーダな方に目覚めた全裸の集団は『聖騎士を語つた不届きな賊』とされ、ロマリアへと送還され処理されたとか……。

更に後日、

「……あの子の性教育に失敗したのかしら？」

「いえ、まだ間に合います。ですのでこの本を……」

「それだけじゃ足りないわ。もつと用意しないといえ、直々に手ほどきをした方が……ブツブツ」

クランさんとお母様が一枚の写真を肴に、真剣に相談をしていたとか……。

楽しく転生②（後書き）

や、やれるだけやつたぜ……。

ロマリアの異端狩り攻撃、撃退完了。

ハプシエルは、「一レムフレームを素体にして幻像を投射すると
いう形を取る事で、そう言つて兵装マジックアイテムがある様に装いました。これは、
七徳の宝玉から田をそらすと言つ狙いです。

量産型は……、なんと言うか空から来るって言うイメージがあつ
たので、沢山飛んでもらいました。そしてあの踊り（笑）。

オリ主、ルーティアの乗るネタ兵器（？）こと飛行外骨格型竇の
アークビートル・カオス。

元ネタは、最近新作が出たメダロットからアークビートル・ダッ
シュ。そして、変態企業を次々と産出するフロムソフトウェアが生
み出した最強のアメリカ大統領、メタルウルフ・カオスです。
いや、二二二二でプレイ動画をみて笑いました。X箱ないから
プレイできないけど……。

アークビートル・ダッシュの両肩の筒が、丁度メタルウルフの四
次元格納庫に見えたので合体！ 多少手直しもしてロールアウトし
ました。ちなみに、ちゃんと変形して戦車形態にもなり、空だって
軽快に飛び周ります（無理矢理だけど）。

今日は、あんまり投稿できなかつた oren

それでは、待て次回！

楽しく転生29（前書き）

これは一次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと云つ劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

*

Another side

カツカツカツとペンを走らせ、積み上げられた書類を仕上げていく。

「まったく、書類仕事は面倒ですね～」
などと思っていると、

ガチャ……。

「ルーティア、ちょっと今いいかし……って、なにかぶつてるの?
あ、コレですか? 演劇で黒子さんが顔を隠すために被る帽子の
様な物です。それと、ルーティアは今不在です。

「なに言つてんのよ? 今私の目の前に……遍在?」

私が肯くと、エレオノール姉様はディテクトマジックでその真偽
を確かめ、ガックリとうなだれた。

いや、フレードワークが多いから遍在を認めたまでは良かつ
たんですね。ですが、遍在はどれが本体か見分けは付かないし……。
なので、執務室にいる偏在が直ぐに遍在だと分かる様に、黒子さん
が顔を隠す帽子の様な物を着けさせる事にしたんです。

「まいっただわね～。本体との連絡は……」

「出来なくはありませんが……緊急事態ですか?」

「う～ん、そんなんじゃないんだけど……。ほら、この前クランが
持ってきた陸上走行型甲冑籌つてあつたじゃない? その試作品
が出来て、その試験結果が出たんだけど……」

ああ、アーキビール・カオスを見たクランさんが立ち上げた企

画ですね？アレから飛行能力をと四次元格納庫を取り外して、代わりに武装を長距離砲と白兵戦用に刀剣を装備させた……いわば劣化版アークビー・トル・カオスですね。完成すれば、地上からの支援が期待できると思つていきましたが、

「それで、どんな結果が出たんですか？」

「ええ、その事でちょっと意見が聞きたかったのよ。

ま、とりあえずコレを見てみて……」

そう言つてエレオノール姉様から渡された報告書に目を通していきます。

「……これは、笑った方がいいのかな？」

「それは私も悩んだわ。でも、悩むのも面倒だから笑うことにしてわ」

それは一枚の写真。戦車形態のアーク・ダッシュが、その立派な角を地面に突き刺して垂直に立つていう構図の写真です。そんな写真が十数枚も報告書には入っていました。

「どうがんばっても、走行中の急停止やらなんかでつんのめつてこうなるのよ。

……酷い時にはそのままひっくり返つて大惨事

「うーん、バランスの問題ですね。

そもそも、胴体がこの形状でなくともいい訳ですし……」

あ、色々と問題発言？でも、劣化版には荷電粒子砲

名の雷撃砲を載せないので、角は完全に飾りですしちゃう。

「あ、あと白兵戦装備もいらないかも。

角が邪魔で剣が使えないって苦情も来てるわ

まあ、元となつたKBTタイプは射撃主体ですからね。

「分かりましたエレオノール姉様。後で本体に連絡して解決案を届けに行きますね？」

とりあえず、軸を射撃主体と格闘主体で別けてみる案をだしますか。

「分かつたわ。それじゃお願ひね？」

さて、私も残りの仕事を……つて、エレオノール姉様？

「ん？　あ、美味しく頂いてるわよ？」

エレオノール姉様は、プチーズさん達に入れてもらつた紅茶とお菓子を頬張っています。と言うより、仕事大丈夫なんですか？

「大丈夫よ。

ちゃんとした必要な作業は他の研究員に割り振ったし、私自身が直接やらなきやいけない事はその報告をまとめる以外ないわよ」

そうですか、まあそれなら……。

ガチャ、

「あら、カト・レアにルイズ？」

「ちいねえさまにルイズお姉様？」

「長期休暇だから帰つてきたんだけど……あら、ルーティアちゃんはお出かけ中？」

「そう、ここにいるのは遍在」

「そうなの？……クラランもいないみたい。もう、ルー達つたらなんで肝心な時にいなかのかしら……！」

あらあら、にぎやかに成りましたね～。仕方ありません……、私はペンを置くと追加のコラップとお茶請けを出して休憩する事にした。

*

ひからメイドのクラン・ベル……誰に言つてているんでしょう？
まあいいです。さて、私はルーティアお嬢様の使いで白の国アルビオンまで篠で飛んで来たのですが、

「すみません、シティー・オブ・サウスゴーダはどう行けばいいでしょうか？」

目的地までの道が分かりません。

「？　ああ、それならその街道を……」

「ありがとうございます。では」

ルーティアお嬢様、もうちょっと情報収集しましょうよ。コレの届け先が『アルビオンのサウスゴーダ地方に住むハーフエルフのティファニア嬢』だけでは分かりませんよ？仕方ないので地図を片手に通りがかつた人に道を聞きながら目的地であるモード公の屋敷へと向かいました。

そして某日、私はやっと見つけたモード公の屋敷に忍び込む事に成功したのです！

「……きっとルーティアお嬢様なり』こちらスネーク、進入に成功した』などと言つんでしょうか？」

うん、きっと言いますね。

タタタタ、

……時刻は日もまだ昇らぬ早朝、見回りのメイドをやり過ごした私はモード公の寝室を目指しています。とにかく、誰にも見つからないように屋敷の中を進む事が重要。潜入ミッションでは基本中の基本。どうぞの〇〇ナンバーみたいに派手な銃撃戦はナンセンスです。

さて、目的地であるこの屋敷の最も奥にある寝室のドアを開けて…

「……はれ？ どうされたのですか？」

……あれ、女の子？

「し、失礼しました。

部屋を間違えたようです。

お嬢様は、もう少しお休みになつていてください」

「そうですか、お休みなさい……」

……ちょっと奥に来過ぎたようですね。いつの間にか、屋敷の離れまで来ていました。

そして、先程間違つて入つてしまつた部屋の中では、金髪に長い耳の女の子が寝ていました。おそらく、あの娘がルーティアお嬢様の言つていたティファニア嬢ですね？

「それにしてあの娘、ルーティアお嬢様より胸の発育が良かつた様な……」

確かに、ルーちゃんより歳が下のはずなのに……コレもエルフの神秘つてやつですか？ 青い小鳥亭で働いているハーフな方もエルフなのに胸が大きいですしつ……あれ？ 覚えのない記憶が……電波？ と、いけないけない！ 私は気を取り直すと、こんどこそモード公の寝室へと向かった。場所は魔法で半分眠らせたメイドの一人に部屋の場所を確認したので、今度は大丈夫です。

「だ、だれだ！？」

「お静かに」

念のために結界 いつの間にか使える様になっていた月匣をこの部屋に張つているので、騒がれても問題はありません。でも、冷静であった方がこの後の話がしやすい。

「モード公であられますね？」

「だとしたら、どうする？」

「私はあるお方からの使いで、モード公にこちらの手紙を秘密裏に届けに参つたしだいです」

そう言つて月衣から取り出した手紙 小包を渡しますが……、「誰が送つてきたか分からぬ封書を、そう簡単には開けられん」「ごもつとも。花押も押されていない封書ですからね。もし毒でも入つていたら大変です。お嬢様も一度その手に引っかかるて開けてしまいましたし……。

「では、私めが開封させていただきます。

それをもつとして、安全を確認してください」

「……いや、そう言つてオヌシジ」と無理心中させると言ひ腹積もりやもしれん
「なるほど……。

ですが、我が主は是が非でもこの小包の中の手紙と、贈り物を受け取つていただけたいのです。

……そう、アナタが隠している妾のエルフと、その愛の結晶たる

娘 ティファニア嬢のために

私がそう言い終わると、モード公は顔を真っ青にして杖を向けてくる。

「つ、妻と娘はわたしん！ わたさんぞ！！」

「杖を納めてくださいモード公、だれも奪いつとは言つておりま……」

「エアカッター！」

私の言葉も聽かず、風の刃を放つモード公。私はやれやれと思いつつ、

パリーン！

「な！？」

モード公の放ったエアカッターを、ハマノツルギで打ち碎いた。

「まったく、こちらの話を聞いて欲しいものです。

モード公、杖を納めてください。

これ以上錯乱されるようでしたら、口を改めますが？

口をパクパクとさせて……モード公はまともに話が出来るような状態ではないようです。

「はあ……これなら、先程お会いする事の出来たティファニア嬢にわたした方が良かつたでしょうかお嬢様？」

「な！？ て、ティファニアに会つたと言うのか！？」

あらいけない。口が滑つたようですね。でも、これは利用できる？

「ええ、お会いました。

寝ぼけていたようですが、とても可愛らしいお嬢様ですね？」

「なぜ殺さなかつた？」

「言いませんでしたか？ 私は、我が主より贈り物を届けに来たわけだけだと……。

彼女達を奪いに来たわけでも、モード公を暗殺しに来たわけでも「ございません」

モード公はしばし考え込むようにした後、

「……信用した訳ではない。だが、一度その贈り物 密書を読んで見よう

「ありがとうございます。どうぞ……」

モード公は無地の花押を破ると、小包の中に入っていた手紙を読み始めた。そして、見る見るうちに顔を真っ青にさせて行き……。

「□□に書かれてることは真か？」

「はい、我が主から聞き及んだところ、あのお一方を火種として王位転覆を狙う戦が高い確率で起こるという見通しであります」

「ワシの肅清の理由を明かせぬが故の不満による反乱に、エルフを妾にとり子を成した事による国の分裂……。

どちらに転んでも、あの子たちには不幸な未来しかないというわけなのか？」

「ご理解が早く助かります。

すでに、アルビオン各地で災いの火はくすぶり始めております。その最大の着火点として利用されるのがモード公、あなた達であると我が主は見定めました。

ですが、我が主はもう一つの道を用意しました

「……それが、このフェイスチェンジのマジックアイテムか。

「レを使い、あの娘達を衆人の目の届く場所に出す事で、妾のエルフ疑惑を解消せよと……」

「はい、もし何か疑惑をもたれても、それは奥方様達の美貌を羨んでの嫉妬と一蹴するもよし。王族に根回しをするもよし。危なく成れば……」

私は杖を取り出すと、水を使って『トリステイン王国、ド・ラ・フォンティーヌ領』と空中に書き記し、

「こちらへとお逃げください。そちらの方でも、対策を行つています」

「……分かつた。考えておく

ふう、これで任務完了。

私はそのまま寝室の窓から失礼して、簾に乗つて出て行きます。

「さて、適当に着替えてアルビオン観光でもして帰りましょう。

お嬢様、おみあげは何が良いですか？」

遠く、ガリアで暗躍（？）しているルーティアお嬢様に問い合わせた。

*

ワシは、見慣れぬマジックアイテムに跨り窓から出て行った珍客が、一瞬だが魔女に見えてしまった。

「だ、旦那様！？」もう起きられていたのですか？」

「ん？ ああ、今日は早く起きてしまってな……」

そう言えば、エアカッターフで切れたはずの床の絨毯が元どおりになっている。どの様な魔法を使ったかは知らんが……もしかしたら、あのメイドもエルフなのかもしれん。

「……そう言えば、名前を聞いていなかつたな」

「はい？」

「いや、独り言だ。それよりも着替えと朝食を用意しない

「か、畏まりました！」

ふう……後でこのマジックアイテムを渡しに行くか。……そうだ。顔が少し代わるから、テファアが姉の様に慕っているサウスゴーダの娘も一緒のほうがいいかもしれんな。

そう思いつつ、ワシは寝室を後にした。

Another side end

*

楽しく転生29（後書き）

今回は日常編 + クリソさんのお使いことについてお話を……。

何気に、オリ主が出でていなません（遍在はいたけど、独立型なので別人）。黒子帽子を被ったのは個人的な趣味です。

最近出てなかつたルイズとカトリアさんをもつと出したかつたけど、この時点で書く事がないので日常編はここでカット……。

オリ主のネタ兵器、劣化版で正式配備を進めることになりました。

「空を飛ぶだけが籌じゃない！」

と、頭の螺子が外れた感じの人気が叫んだ気がします。

モード公が、いやにあつさうと説得された事に不満をもたれる方も多いでしょうが……テファアさんと会つたと言えば、何とかなるかなーと言つ感じに仕上げました。

モード公説得は一話でまとめましたが（特にやることが浮かばなかつたので）、ガリア組みはやってみたい事があつたのでそれを仕込んでいこうかと……。

それではまた次回！ ノシ

楽しく転生 29話までの登場人物など（前書き）

や、気がついたらもう年を越していたＺＥ　ｏｒｚ
お茶濁しに、楽しく転生 29話までに登場したオリキャラなどを紹介します。

楽しく転生 29話までの登場人物など

登場人物など紹介

ルーティア・ルシェル・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティーヌ
ルイズの双子の妹ことオリ主。現代世界からの転生者。
双子なのでルイズと良く似ているが、髪の色は白で長髪、瞳の色
は紅く、アルビノなのか全体的に色が薄い（自称天使様の趣味）。
チート能力は、月衣に月匣の製作、夢幻書庫に宝玉の継承者（？）
、蒼い天亩眼（額に象眼なし）に能力限界解除（要訓練）……。チ
ートアイテムとしてアイン・ソウ・オウルと七徳の宝玉を所持して
いる。

杖としてブレスレットのアイン・ソフ・オウル。一般的なタクト
状の杖。戦闘用にモンハンのスラッシュアックスを元にした機械剣
斧“タケミカヅチ”と契約している。

さらに七本の大剣“ソード・オブ・ガーディアン”と11本の長
剣“モモンズ・ソード”が月衣の中に常時収納されている。他にも
箒や銃火器、試作品や娛樂品などと様々な物が月衣に収納されてい
るが……クラン曰く『月衣って、あんなに物が入ったつけ?』と不
思議がられている。

得意な系統は風、フォンフェイース領の実質的な経営者である。

クラン・ベル・ド・ベルナーブル

元々は領地持ちの貴族であつたが、家が没落して道端で倒れてい
た所を幼いルーティアが発見。以後ルーティアの専属メイドとなる。
ナイトウィザード世界からの転生者で、チート能力としてナイト
ウィザードの能力と魔法無効化能力、ハマノツルギを所持している。
俗に言う戦うメイドさんなキャラである。一流のメイドさんなので、
主が必要としていない時はステルス能力を十二分に發揮して隠れて

いる。最近、ルーティアへの突込みが激しくなつてきている。

髪の色は亞麻色でセミロング、瞳も髪と同じ色。歳はルーティアより少し年上。

得意な系統は水である。

キティ・ド・アリシェル

ルーティアの最初で最後の家庭教師さん。

領地持ちではない貧乏貴族。弟さんがいる。

元々魔法学園の教師を目指していたが、メイジのクラスが低すぎて落選した。

ただし、根は眞面目だったので魔法の実技以外の成績は良好。貧乏ゆえに平民差別が殆どなく、メイドが雇えないのに必然的に家事全般もこなせる。

フォンティーヌ領で学校が開設された際に、フォンティーヌ第一学校の校長に任命される。

得意な系統は土（ラインに届きそうなドット）である。

アストレア

デバイス

カトリアさんの使い魔をやつているリリカルなのは世界の杖。

ルーティアと喧嘩したルイズを仲直りさせるために使い魔の召喚を行つた際に呼び出された現代世界からの転生者でもある。

初期形状は、GNソードのグリップをものすごく長くした槍のような形状をしていた。現在は、ヴァーチュの胴体に首からGNバズ

ー力、肩からGNキャノンを生やした様な杖の形を取つている。

リリなの魔法とのとの兵装を使用できるが、使用者であるカトレアさんが不調であるため本来のスペックを十分に發揮できない可哀そうな人（？）である。

ヴァリエール家のメイドさん達を“ラブコメに出てきそうな理想のメイドさん”に再教育した張本人でもある。

自称天使様

オリ主をハルケギニアに転生させた人（？）。

外見はまじしゃんず・あかでみいに登場するゴスロリ天使“ガブリエル”（ただし、この御方は羽まで真っ黒である）。

何かとオリ主に警告と言つか、助言をしてくれる。おそらく出たがり屋。

彼女の話では、他にも自分の様な存在がこのハルケギニアに転生者を送り込んでいるとの事。

イリン

フオンティーヌ第一学校でメイドをやつている翼人の女性。セントマルガリータ修道院からやってきたガリアの双子さんたちを出迎えた。

最近、同じ学校で働く精霊魔法（座学）の先生（翼人の女性）に告白されたとか……。

ジエイル・スカリエッティ

某ドクターと同じ名前をもつロマリアのテロリスト。

ロマリア国内を中心に活動し、民衆を扇動して教会を襲撃。彼らが溜め込んでいた金品財宝を市井の民に略奪させた。

能力や経歴などが不明のキャラ。おそらくロマリアの転生者の一人。

ロマリア、フオンティーヌ領襲撃騎士団

強力な聖騎士と火竜、破壊工作員を引き連れたロマリアの異端審問団。ロマリアに転生した転生者も何人か所属していたようだ。

最終的に、破壊工作員達はプチーズにより鹹獲。聖騎士達はハップシエルにより性癖が変換された。

火竜達は、ルーティアのネタ兵器“アークビートル・カオス”により撃破、鹹獲された。

メンバーの内、名前が確認できたのは、ジョニー、マイク、あと隊長(?)。

最後は、王都トリスターニアの目の前で全裸で黒い薔薇を咲き乱れていた所を憲兵に取り押さえられ、後にロマリアに送還され処理された。

プチーズ

ルーティアが作った擬似精霊を宿したアルヴィーズ。

今のところは、プチネウス、ライフサイズ・ホイホイさん、ライフサイズ・コンバットさん、ナビ・コミュン、プチディジーさんの五種類。

プチネウス、ライフサイズ・ホイホイさん、プチディジーさんは主に清掃作業などを担当。ナビ・コミュンは主に司令室のオペレーター、夜間の実働警備員としてライフサイズ・コンバットさんが担当している。

ブルーム隊

マジックアイテム 魔女の箒を装備したフォンティースヒヴァリエール合同の新設部隊。初期隊員は10名。

初期隊員の中には、色々ときな臭いモノを抱えている者が多い。原作を知っている転生者もいた様だ。

現在は、フォンティース領民の就職先の最有力候補。

ゲルマニアの転生者

アナハイムにクルスガワ、ヴィクターにグロリオーサなどと言つたどこかで聞いた事のある巨大企業の名称を名乗る商会。ゲルマニアの転生者が運営している。

フォンティース産の特産品を無印品として販売するためのルートとして利用。

アナハイム『歩兵強化も良いけど、ガンダム作らない?』

クルスガワ『マルチ作りたいんで、プチーズの技術教えて！』

ヴィクター『こつちもモモ作りたいから教えて！』

グロリオーサ『ディジーをライセンス生産させてください！』

と言うのが彼らの声だったりもある。

楽しく転生 29話までの登場人物など（後書き）

本編の方は、もうちょっと待ってください。
が、ガリアでのオリ主の行動が上手く決まらない……スランプだ。
? o r z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7242m/>

ゼロの使い魔 楽しく転生

2011年3月7日15時10分発行